マリオ・ベネデッティの文学と政治

Mario Benedetti : Literature and Politics

田代 紳一郎

目次

序章
　第 1 節　研究目的
　第 2 節　先行研究及び研究動向
　第 3 節　研究方法及び論文構成
第 1 章　マリオ・ベネデッティの生涯と文学的軌跡
　第 1 節　生い立ちから下積み時代まで
　第 2 節「オフィス」作家とキューバ革命の衝撃
　第 3 節　軍事クーデターと亡命
　第 4 節　祖国帰還と晩年
第 2 章　マリオ・ベネデッティの政治的スタンス
　第 1 節　革命キューバへの思い
　第 2 節　パディージャ事件との関わり
　第 3 節　バルガス・リョサとの政治論争
第 3 章　マリオ・ベネデッティ作品に見る独裁・抵抗と亡命
　第 1 節　解題：短編『星座とあなた』
　第 2 節　解題：短編『モーツァルトを聴く』

第３節　解題：短編　『エクソダスについて』
第４節　解題：戯曲　『ペドロと大尉』
第５節　解題：短編　『ユーバーリンゲンでの手紙』
第６節　解題：小説　『角の壊れた春』
第７節　解題：小説　『足場』
最終章　研究のまとめ
注
参考文献等
年表〈マリオ・ベネデッティの生涯とその時代〉

序章
第１節　研究目的

ウルグアイの作家マリオ・ベネデッティが 2009 年 5 月 17 日、その生涯を閉じた。享年 88 歳。逝去に伴い、国葬が営まれた。いかに国家・国民に愛された作家であったことか。生誕 100 年にあたる 2020 年には未完の原稿の発見も報じられ、改めてその死を惜しむ声は多い。90 を超える作品を残し、その一部は多くの国々で翻訳されている。また、小説『休戦』[*Tregua*] をもとに制作された映画は、1975 年のアカデミー外国語映画賞ノミネート作品となった。しかしながら、彼の作品はスペイン語圏を中心に注目され続けてきたものの、英語圏での知名度はいまだもって高いとは言えず、ましてや日本語に訳されている作品はほとんどないのが現状である。そこで、彼の生涯を追いながらその人物像と残された作品の文学的価値に迫ることは、日本国内における今後のマリオ・ベネデッティ研究に微力ながら寄与するのではないかと考えた。

マリオ・ベネデッティはペンの力で圧政に挑み続けた革命家と言える。11 年半に及ぶ亡命生活を強いられながらも、自由を希求するために文学的アプローチを通して生涯にわたり抵抗し続けた知識人として、その存在感を際立たせている。祖国愛に満ち、武力闘争からは一定の距離を保ちつつ不屈の反抗心を持ち続けた革命家であり、温かな眼差しを持ったヒューマニスト、ロマンチスト、ユートピアンであった。自身も語るように、困難な時期にあっても常に前向きに物事を考える性格で、笑みを絶やそうとはしない楽天家でもあった。晩年の写真や映像に収まる口髭を蓄えた穏やかそうな風貌、声音、飾らない振舞いからは好々爺を連想させるものの、ぎらぎらとした激越さや熱情のほとばしりはほとんど感じさせない。しかしながら、彼について調べていけばいくほど、その顔に刻まれた皺一つ一つに苦難を乗り越えてきた人生が秘められていることが見えてくる。

彼の文学作品に込められた強権政治や独裁体制に対する痛烈な批判や皮肉は、数多くの読者の心をつかんで離さない。その創作に至る経緯を探る

には、激動の歴史的背景、特に軍事政権に翻弄されるラテンアメリカ社会の歴史事象を踏まえながら、どのような文学的体験と政治的体験を積んできたかを紐解いていく必要がある。そのことによって、軍事政権下での弾圧や人権蹂躙への批判的姿勢を貫き、人間の尊厳を守るために闘い続けた彼の生き様も浮き彫りになると考える。不屈の精神を持って非人道的な圧政に立ち向かい続けた彼の人生の軌跡と、文学界に果たした役割を明らかにしていくことが本研究の目的である。

そのためには、あらかじめ以下のようないくつかの問いを立てて研究を進めていく。

彼の人生における特筆すべき第一の転換点はキューバ革命である。作家としての開花期にあたる 1959 年、フィデル・カストロらによって引き起こされたキューバ革命は彼の魂を大いに揺さ振るものであった。米国のお膝元で起きたこの革命の衝撃は、新植民地主義に喘ぐラテンアメリカ諸国の人々にとって夢と希望を灯す光であり、ベネデッティ自身もこの革命がもたらす可能性に大いに刺激され、政治信条をゆるぎないものにしている。

小さな島国キューバの革命達成が、祖国の政治状況を憂える彼の精神的支柱となっていたわけだが、それでは 1980 年代末から 1990 年初頭にかけて雪崩を打つように生じた東欧革命、ソビエト連邦解体という世界史的大変動の中で、彼はどのような政治的判断を迫られたのだろうか。また、冷戦終結によって国際的孤立に追い込まれたキューバとの関わりを保ち、どのように社会主義の可能性を思い描いていたのだろうか。

また、革命熱に冷や水を浴びせた 1971 年のカストロ政権下での言論弾圧事件、パディージャ事件をどのように捉えていたのだろうか。バルガス・リョサをはじめとする文学者たちが幻滅し離反していく中にありながらも、キューバには終生親近感を寄せていたようであるが、この騒動を目の当たりにしてもなお、彼の革命への熱情に揺らぎはなかったのか。果たしてキューバ政府に無批判なカストロ主義者であったのだろうか。対話をしたり勲章を授与してくれたりしたフィデル・カストロという人物をどのように評価していたのだろうか。

もう一つの転換点は 1973 年、祖国ウルグアイのボルダベリー軍事独裁政権下で身の危険を感じ、亡命を余儀なくされたことである。アルゼンチン、ペルーを経て、最終的にはキューバ及びスペインに落ち着き、生きる糧として文筆活動に打ち込む。そして、常に祖国の趨勢を憂いに満ちた心持ちで見守りながら、いつ実現できるとも限らない帰郷を夢見ることになった。この亡命時期を前後してボリビアのウゴ・バンセル・スアレス政権、チリのアウグスト・ピノチェト政権、ペルーのフランシスコ・モラレス・ベルムデス政権、アルゼンチンのホルヘ・ラファエル・ビデラ政権など、近隣諸国においても次々に抑圧的な政治土壌が形成されていたが、そのような重苦しい時代にあってもなお、希望を見失わずに忍耐強く待ち続けることができたのは何故なのか。

さらなる問いとして、数多くの文学作品を生み出すにあたり、どのような思想や着想に基づいて創作活動に専念していたのだろうか。作品群をジャンル分けした場合、得意と自認する詩と短編以外に、小説、戯曲、文芸批評、政治評論など、手掛けた領域は多岐にわたる。取り上げるテーマも、「都市生活」「恋愛」「不条理」「独裁」「抵抗」「亡命」といったようにバラエティーに富んでいる。そして、作品内の場面設定においては、自身の実生活や実体験を少なからずベースにするといった証言的手法が用いられており、現実社会や日常風景から乖離した単なる空想作品ではないということがわかる。

本研究では、「独裁」「抵抗」「亡命」をモチーフとした作品を取り上げるが、一体彼はそれぞれの作品にどのようなメッセージを込めようとしたのか、また、どのようにユーモアや皮肉を織り交ぜてストーリー展開を工夫したのだろうか。これらのことを確認することによって、人間の愚かさを時には鋭く批判し、時には優しい眼差しで見守る、革命的情熱の火を絶やさない文学者としての彼の実像が浮かび上がってくるはずである。

第 2 節　先行研究及び研究動向

それでは、現在のベネデッティに関する研究はどのような状況にあるのだろうか。まず、日本国内の場合であるが、先行研究を調べてみた限りにおいては、評伝、作家論、作品論の類はほとんどないに等しい。そもそも日本語に訳されている作品自体の数も限られている。ラテンアメリカ文学選の中で他の作家に交じって紹介され、多少の解説が加えられている程度である。カルロス・フエンテス (1928-2021)、マリオ・バルガス・リョサ (1936-)、フリオ・コルタサル (1914-1984)、ガブリエル・ガルシア・マルケス (1927-2014) など、ラテンアメリカ文学ブームを巻き起こした作家たちに比して、彼に関する人物研究・作品研究は乏しく、今後の研究が俟たれる。

限られたものの中から挙げるならば、その一つは寺尾隆吉著『ラテンアメリカ文学ガイドブック』(2020 年) であろう。厳選された 100 人の文学者の内の一人としてベネデッティを見開き 2 ページで簡潔に紹介している。その一部を拾ってみると、「・・・いわゆる〈パディージャ事件〉を機に、1970 年代以降、明確に革命政府への失望を表明する者や、口先だけで革命的言説を弄して左翼のおいしい部分だけをせしめていく者も多く現れるなか、ベネデッティほど頑強にカストロ体制支持を貫いた作家は少ない」「ソ連崩壊後も社会主義への信奉を崩さなかった彼は、左翼系機関から様々な文学賞や叙勲を受けた反面、やっかみもあってか、その激情的すぎる政治姿勢を批判されることもあったが、彼が最後まで理想を貫き通した闘士であった事実に疑いの余地はあるまい」とある。また、同氏の編著『抵抗と亡命のスペイン語作家たち』(2013 年) においては、「祖国を失った苦痛を耐え忍ぶ作家」との記述も見られる。ちなみに、この著作はベネデッティとも関係のある何人かの文学者を取り上げながら文学と政治との関係性を論じた文献であり、彼らと同じように抵抗と亡命を経験したベネデッティを取り巻く背景を理解する上で大いに有用であり、本研究の方向性を定めてくれるものである。

もう一つは、安藤哲行著『現代ラテンアメリカ文学併走　ブームからポスト・ボラーニョまで』(2011 年) であろうか。ベネデッティの作品『俳句の片隅』を紹介する中で、「・・・なぜか日本では無名に等しい」「・・・ユーモアに満ちた、あるいはアイロニカルないい短篇を書く。恋する男女の心の機微を描かせるとこれほどうまい人はいないのではないか、そんな気にさせられる。やはり、詩人なのだ」「・・・掌・短篇を綴るのに言葉に過不足がなく、物語にうまく幕を降ろすつぼを心得ているからだ」との作家評を記している。

一方、ウルグアイをはじめ諸外国における研究状況はどうであろうか。まずは、伝記的な記述によって初めてベネデッティの生涯と作品を関連付けて紹介したと言えるのが、ウルグアイ人ウゴ・アルファロ (1917-1996) による著書『マリオ・ベネデッティ　透明ガラスの裏側に』[*Mario Benedetti: detrás de un vidrio claro*] (1986 年) である。ベネデッティとは週刊新聞『マルチャ』[*Marcha*] の編集を介しての肝胆相照らす仲であり、その後継紙と言われる『ブレチャ』[*Brecha*] を創刊した作家として知られる彼が、本人との対話をもとに書き進めたものであった。

続いては、1991 年にスペインのアリカンテ大学のラファエル・ゴンサーレス・ゴサルベスが、『本体と影　マリオ・ベネデッティの短編と小説』[*El cuerpo y la sombra: Cuentos y Novelas de Mario Benedetti*] という表題で研究論文を発表している。その後の新たな伝記・評伝としては、アルゼンチン作家マリオ・パオレッティによる著書『興をそぐ人　ベネデッティの伝記』[*El aguafiestas: Benedetti la biografía*] (1995 年) と、ウルグアイ人でマリオ・ベネデッティ財団理事長のオルテンシア・カンパネラによる著書『極めて控えめな神話』[*Un mito discretísimo*] (2008 年) がある。

また、ベネデッティの個々の作品に関する研究については、彼が名を馳せた 1960 年代前半頃から同時代的に評論や論文という形で、ラテンアメリカの作家や研究者を中心に少しずつ積み重ねられてきた。そして、その動きが一層盛んになったのは 1990 年代に入ってからであり、1997 年にアリカンテ大学で開催された「マリオ・ベネデッティ国際大会」で一つのピー

クを迎えたと言ってもよい。400 人規模の参加者を得たこの大会では、彼の作品を巡る論文や評論の発表を通して研究交流が促進され、大会後の 1998 年に同大学から刊行された論文集『共犯による在庫』［*Inventario cómplice*］は多角的な視点を与えてくれるものである。このタイトルはベネデッティが自身の詩集『在庫』［*Inventario*］を一捻りして付けたもので、60 人近い研究者一人一人が研究成果を持ち寄り、共同（共犯）して披露したという意味合いを持つ。

その後のベネデッティ研究はこの論文集を踏まえて、さらに総合的・分析的解釈の両面において深まりを見せている。1999 年に同大学内に設立された「マリオ・ベネデッティ　イベロアメリカ文学研究センター」がその研究を後押ししており、今後より一層世界的な広がりを目指す研究交流の拠点として、その役割を担うことは確かであろう。2021 年には生誕 100 年を記念して、評論集『マリオ・ベネデッティの 100 年』［*Cien años de Mario Benedetti*］が同センターから刊行された。

このような諸外国の研究状況と比べてみると、日本国内における研究は後れを取っていると言わざるを得なく、そのため本論文が多少なりとも一つの道標になればと願っている。目指す研究の方向性を改めて示すならば、激動の歴史的体験を通して彼自身の中に刻まれた文学と政治との関係性に焦点をあて、作品のいくつかにも触れながら彼の生き様や思想的傾向を明らかにしていくことである。

ところで、日本におけるウルグアイという国自体の認知度はどれほどのものであろうか。我が国との関係性は薄く、政治・経済・社会・歴史・文化など、どの分野においても専門家以外にはほとんど知られていないのが現状である。人口約 300 万人規模の小国であり、スペイン語で「国」を表す「país」に縮小辞を付けて「paisito」と呼ばれることも多い。一般的に思い浮かぶのは、時差 12 時間で地球の裏側に位置すること、多角的貿易交渉ウルグアイ・ラウンド、サッカーワールドカップ第 1 回優勝国であろうか。情報はまだまだ乏しいと言っても過言ではない。

ただし、近年は「世界一貧しい大統領」として話題になったホセ・ムヒ

カの国連演説や訪日のおかげでウルグアイが一時脚光を浴び、関連書籍も数多く出版され、興味・関心も広がりつつある。2022 年夏には、ウルグアイという国の全体像が見渡せる概説書として、山口恵美子編著『ウルグアイを知るための 60 章』が刊行された。その序文で記されているように研究・調査に携わる人々の増加が期待されており、本論文もその期待に多少なりとも応えられるようなものにしていきたい。

第 3 節　研究方法及び論文構成

研究のアプローチとしては、5 つのカテゴリーに分類した研究資料を駆使して、歴史的側面と文学的側面の両面から考察を進めることとする。彼の創作活動は、自身の日常体験、歴史的体験、政治との関わりをもとに進められており、両者は切っても切れない関係にあるためである。

まず一つ目のカテゴリーは伝記的資料である。先に挙げたウゴ・アルファロ、ラファエル・ゴンサーレス・ゴサルベス、マリオ・パオレッティ、オルテンシア・カンパネラらによる基本的な文献を参考にして、ベネデッティの経歴、歴史的体験、作品成立の過程を時系列で把握する。もちろん単なる各文献の相互補完にとどまらず、新たな情報を追加しながら自分なりに再構成して、彼の生涯をより正確に理解するよう努める。

二つ目は、一次資料としての彼の文学作品である。作品群の中から特にテーマとの関連性の濃いものを選択し解説を加え、執筆の意図を明らかにする。つまり、これまでほとんど紹介されて来なかった数多くの作品の中から研究対象となり得るものを選定し、自ら翻訳を試みて解釈していくということである。その際、フィクションの中に隠されたノンフィクションの部分、つまりベネデッティの体験とウルグアイの歴史事象との関連性に着目して分析することが大切であると考える。

三つ目は、祖国ウルグアイや亡命者として渡り歩いた国々の歴史や政治に関連した資料である。何故ベネデッティが亡命という手段を選ばざるを得なかったのか、また作家としてどのように政治にコミットしていったの

か、さらにはそれらを通してどのような世界観・社会観・人間観を育んでいったのかということを探る上で、彼を取り巻く歴史的・政治的な背景を理解することのできる資料は欠かせないからである。

四つ目は、評論、新聞記事、書簡など直接ベネデッティの考えや主張に触れることのできる資料である。ラテンアメリカ文学の普及のみならず、ジャーナリストとして果たした役割も大きい。それらの資料からは、祖国ウルグアイの反体制運動や革命キューバを通して築いた知識人・政治家・文化人たちとの幅広い交友関係が認められ、彼らからどのような影響を受け、文学者としての地位や政治的スタンスを確立していったのかが見えてくる。

五つ目は、スペインのアリカンテ大学イベロアメリカ文学研究センターや同大学で運用が開始されたミゲル・デ・セルバンテス・バーチャル図書館のアーカイブをはじめ、インターネット上で公開されている写真、インタビュー映像、講演会などの視聴覚資料である。これらの資料を活用することによって、より本人を身近に感じながら研究テーマに迫ることができると考えるからである。

続いて論文構成であるが、まず第 1 章では彼の生涯を時代背景や政治状況の中に明確に位置づけ、数々のエピソードを織り交ぜながら生い立ちから亡くなるまでをできる限り克明に記述していく。特に、どのような歴史的空間に身を置き、どのような創作活動を展開したのかを把握し、作品タイトルのみならず内容にも多少触れながら、特に 20 世紀後半以降の文学界に残した輝かしい足跡を明らかにしていく。

第 2 章では、ベネデッティの政治的スタンスについて考察する。彼の作家人生を方向づけた事件として、1959 年のキューバ革命と 1973 年のウルグアイの軍事クーデターが挙げられる。これらの歴史的事件に遭遇して一文学者としての彼がどのような思想的傾向を持ち、どのような政治姿勢を取り続けるようになったのかを明らかにする。そのため、特に革命キューバに対する思い、パディージャ事件との関わりとその見解、バルガス・リョサとの政治論争に着目して論述する。

第3章では、彼の周辺で起きた歴史的出来事やその見聞情報を素材にして書き上げた特徴的な7つの作品を取り上げて、それぞれの創作のねらいに迫る。都市生活に漂う単調さ、停滞感、ペーソスをモチーフとした『オフィス詩集』や『休戦』を発表して一躍脚光を浴びた彼が、俄然1950年代末から政治意識を高めるようになった。そのことによって、作品の中にどのように政治性を反映させようとしたのかを探っていく。

最終章「研究のまとめ」では、ベネデッティの文学における普遍的価値を再確認するとともに彼の思想的立場を整理する。また、彼の訃報に接し、「戦友」である元大統領ホセ・ムヒカらが弔辞を寄せているので、それらを紹介しながら、その人となりを振り返る。そして、ベネデッティが遺書に託した後世への夢を展望しながら、締め括りとして、私自身がこのベネデッティ研究を通して学んだことを今後どのように活かし深めていくのか、その研究の見通しについて示しておきたい。

第1章　マリオ・ベネデッティの生涯と文学的軌跡

第1節　生い立ちから下積み時代まで

マリオ・ベネデッティは1920年9月14日、父ブレッノ・ベネデッティと母マティルデ・ファルヒアの長男として、首都モンテビデオから約300km離れたタクアレンボ県パソ・デ・ロス・トロスに生まれた。ベネデッティの父方の家系には、19世紀末イタリア中部ウンブリア州フォリーニョからの移民である祖父母との間に、父ブレッノを含め三人の子供がいた。祖父は化学者、ワイン醸造研究家、天文学者として三つの仕事に従事していた。一方で母方の家系には、薬学の勉学のために渡仏したウルグアイ出身の曽祖父とフランス人曽祖母がいた。その二人の血をひく祖母とマドリード生まれの祖父との間に生まれたのが、母親マティルデである。19世紀末、イタリア系移民はモンテビデオ市居住者の約3分の1に及んでいたと言われ、父親はイタリアの習慣にならって、息子の洗礼名に多くのファミリーネームを持つマリオ・オルランド・ハムレット・ハーディー・ブレッ

ノ・ベネデッティ・ファルヒアと命名した。

薬局従業員として働いていた父親に店舗経営の話が持ち上がり、2歳の時にタクアレンボ県タクアレンボ市に移った。住まいは比較的大きな庭付きの木造家屋であったという。しかし、知人を介して知り合った元薬局の店主から薬の空箱を売りつけられるといった詐欺の被害に遭った。その結果、一家は多額の借金を背負うことになり、4歳の時に父親の働き口を求めて首都モンテビデオ市コロン地区に移り、以来市内を転々とする[1]。しかし、この引っ越し先の都市空間が、後々彼の多くの作品の舞台となるのである。

定職の見つからない父親に代わって、母親が子供服店でミシン掛けをして働いたり、大切に収集していた切手や結婚祝い品などを売ったりして糊口を凌いでいた[2]。この経済的に苦しい時期、大学出の父親と初等学校未修了の母親との価値観の違い、さらには父親と隣人女性との怪しげな関係が重なって口論が絶えず、子供心に大変辛かったと後年回想している。そして、その後やや関係を持ち直した夫婦間に8歳年下となる弟ラウルが生まれている。終生仲の良い兄弟であったといい、後述するようにこの弟が亡命期間中の兄を支えることになる。少年期の思い出として、二人で海辺にいた時、たまたま上空を飛行していたドイツのグラーフ・ツェッペリン号を目撃して興奮したというエピソードも残されている。

1928年には、世俗で無償のドイツ系学校ヒンデンブルク・シューレの小学部に通い始めた。体罰指導など厳格な校風の中、反発心も芽生えたが、そこで学んだ生活規律がその後の人格形成の基盤となる。家庭内でドイツ語を話す子弟のA組とスペイン語を話す子弟のB組に分けられるといった差別的環境の中にありながらも、B組の学友と団結して仲良く過ごしている様子は残された写真から推察できる。学業成績はドイツ大使から賞をもらえるほど優秀だった。この学校を選択したのはドイツ人の科学的精神に心酔していた父親だったが、1933年にナチス式敬礼が導入されたと聞くや、その方針に反発して学年末に息子を退学させている。その頃から徐々に浸透してきたナチズムのことについて何も知らなかったので、父親の取った

行動に困惑したと苦笑交じりにインタビューで回想している。

内向的で臆病な性格は早い時期から読書の世界へと向かわせた。特に、7歳の時に読んだフランス人作家ジュール・ヴェルヌの『2年間の休暇』（邦題『十五少年漂流記』）が印象に残ったという。詩に興味を覚え、12歳の頃からはドイツ語で詩を書き始めてもいる。

1934年に中等学校の学籍をエクトル・ミランダ第2リセー校に置いたものの、経済的理由により14歳から働かざるを得ず、1年半程度履修しただけでほぼ自宅学習となり、この学校を卒業することはなかった。自動車部品や絨毯などを扱うウィル・エル・スミス株式会社に勤め、会計補助や営業などあらゆる仕事を任された。この青少年期からの苦労人としての経験は、労働価値の認識や規律的態度の獲得に大いに影響している。

仕事の合間には専ら読書に親しみ、練磨されたドイツ語能力は後年ウルグアイで初めてフランツ・カフカ（1883-1924）の作品を翻訳する際に活かされる。カフカの影響は、短編集所収の「消防士」[“Los bomberos”]、「ミス健忘症」[“Miss Amnesia”]、「表現」[“La expresión”]、「屋根裏部屋」[“El altillo”] などの不条理な作品に見て取れる。

その他の欧米作家ではウィリアム・フォークナー、マルセル・プルースト、ジェイムズ・ジョイス、ジョルジュ・デュアメル、アーネスト・ヘミングウェイ、ギ・ド・モーパッサン、アントン・チェーホフ、アントニオ・マチャード、イタロ・ズヴェーヴォ[3]、ギュンター・グラス[4]などから、自国の作家ではオラシオ・キローガ[5]やフェリスベルト・エルナンデス[6]などから大いに感化を受けたと語っている。フランス語や英語の原書にも浸りながら多くの作品から様々な表現方法を学んだが、特に凡庸な登場人物の生き方を皮肉まじりに描く軽妙な筆致は、のちに都市生活を舞台にした数々の作品で思う存分発揮される。

幼少期には親族の勧めもあって聖体拝領を受けていたが、周囲の世俗的な雰囲気の中ではさほど信仰心は深まらなかった。しかし、1934年からロゴソフィアの支部であるウルグアイセンターに、教義に傾倒し始めた両親に連れられて出入りするようになった。このロゴソフィアとは、思想家

カルロス・ベルナルド・ゴンサレス・ペコーチェ（別名ラウムソル 1901-1963）によって 1930 年にアルゼンチンで創設され、精神科学に基づき人格・能力の陶冶を目指すとした、神智学の系譜を引くとも言われるスピリチュアルな「教育団体」であった。その集会を通じて、家族ぐるみのつきあいとなった画家兼楽器職人のロペス家の娘で、後年妻となる当時 13 歳のルス・ロペス・アレグレと出会っている。

1938 年には速記の腕を買われ、このラウムソルの秘書として働くために本部のブエノスアイレスセンターに向かった。手紙の処理や機関紙の出版を担当して夜遅くまで低報酬で働き、休みの日曜日にはサン・マルティン広場で一日中詩作に没頭して過ごすことが多かった。この頃に当地の詩人バルドメロ・フェルナンデス・モレーノ（1886-1950）[7] の作品に惹かれた。その理由は、当時書かれていた詩にはなじみのない風物が登場したり難解なものが多かったりして全く魅了されず、それに対してモレーノの作品は日常を題材とした簡潔な作風でわかりやすかったからだという。この詩人へのあこがれとともに、自分も詩人になりたいと決意する。

1941 年には、欺瞞に満ちた師ラウムソルへの不信感からモンテビデオに戻り、ロゴソフィア財団からは徐々に離れていった [8]。この財団に対する幻滅が無神論者になっていく一因と考えられる。本人が語るように常に宗教を意識しながらも、超越的存在とされるイエス・キリストはどちらかと言えば信仰の対象ではなく、尊敬すべき歴史上の人物として映っていたのである。

国家財務局会計監査部の職員として働き始めた頃であろうか、チフスに感染して 2 か月間の休業を余儀なくされ、さらにはその後遺症で生涯にわたり喘息を患うようになってしまう。それでも働き詰めの日々は続き、午前の財務局の仕事のほかに、午後はバスケットボール協会や旧友の父親が経営する貿易会社で事務に携わるなど、一時は三つの仕事を掛け持っていた。

1945 年には、処女作となる詩集『消すことのできないイブ』［*La víspera indeleble*］を世に出した。観念的な詩や恋愛詩の寄せ集めであったため、

注目されないどころか本人も不出来と評して、以後再版や再録されることは避けた。その後の初期六作品も分割払いの借金をしての自費出版という有様で、鳴かず飛ばずの状態がしばらく続く。

そしてこの年から、金曜日発売の週刊新聞『マルチャ』の編集メンバーに加わり、一時期編集長との意見対立により距離を置いたこともあったが、軍事クーデター後の1974年の廃刊まで健筆を揮い続けた[9]。これによって、「45年世代」「マルチャ世代」に属する作家と呼ばれるようになる。

1939年6月23日創刊の『マルチャ』は、アルゼンチンの日刊紙『ラ・オピニオン』[*La opinión*]と並び称せられる反ファシズム・反帝国主義を編集方針に掲げた週刊新聞であった[10]。ラプラタ圏の文化活動を牽引し、政治・文学・映画批評・歴史・経済・芸術などの幅広いジャンルを取り扱った、進歩的知識人たちに開かれた交流の場として存在感を際立たせていた。編集長にはジャーナリストであり弁護士、経済エコノミストでもあるカルロス・キハーノ（1900-1984）が就き、編集スタッフにはフアン・カルロス・オネッティ（1909-1994）やウゴ・アルファロらを擁し、内外の著名な執筆陣を多数迎えて紙面の充実を図るとともに、エドゥアルド・ガレアーノ（1940-2015）、エミール・ロドリゲス・モネガル（1921-1985）、アンヘル・ラマ（1926-1983）、アルフレド・シタロッサ（1936-1989）[11]など多くの知識人を輩出することになる。ベネデッティは、「ダモクレス」（Damocles）というペンネームを使ってユーモアに富むコラムで貢献する。その名になぞらえているところからすると、身の危険を常に感じながら緊張感を持って執筆する覚悟を匂わせているものと思われる[12]。

約5年間勤めた財務局の仕事を辞めた後、ブドウ酒関連のフランシスコ・ピリア製造株式会社[13]で会計の仕事を得て、1946年3月23日ルスと結婚式を挙げた。形式的にカトリック教会での挙式を考えたようであるが、洗礼証明書の入手が困難だったため、憲法通りにあるメソジスト教会で祝福を受けている。モンテビデオ市内のマルビン地区に居を構え、妻の両親を連れ立って大西洋横断ヨーロッパ周遊の船旅に出た。

スペインのガリシア州ビーゴに寄港した際はベネデッティに一時下船の

許可が下りなかったため、義父母とは別行動を取り、妻と共にフランス北西部の港町シェルブールで下船してパリに向かった。すでに『マルチャ』の編集に携わっていたという理由で、ウルグアイのスペイン大使館ではビザを取得できていなかったからである。この後まもなくして、義父が突然の心臓発作で亡くなるという悲運に見舞われる。二人は投宿先のパリのホテルでその訃報を聞き、列車を乗り継いでマドリード経由でビーゴに舞い戻った。この時、不思議なことにパリのスペイン大使館ではすんなりとビザが下りたという。このことは、フランコ体制の監視ネットワークにも穴が見られ、警戒の目はまだウルグアイ国内だけにとどまっていたということだろうか。当地で義父の埋葬を済ませた後、三人は悲痛な面持ちでイタリア、ドイツ、フランス、オーストリアを回り、帰国の途に着いた。

1948 年 11 月から文芸誌『マルヒナリア』[*Marginaria*][14] を主宰した。このタイトルはエドガー・アラン・ポーの『覚書マルジナリア』に倣ったもので、自身の作品のみならず無名のウルグアイ人作家らに活躍の場を提供するとともに、ゲーテ特集を組んだり、フランツ・カフカや T・S・エリオットの作品の翻訳を掲載したりした。しかし、すぐに資金難に陥ったため 6 号で廃刊となってしまう。

1949 年からは、ウルグアイのアルファ書店発行の文芸誌『ヌメロ』[*Número*][15] に加わる。この雑誌は、ベネデッティと同じく「45 年世代」に属するエミール・ロドリゲス・モネガル [16]、マヌエル・アルトゥーロ・クラップス (1920-1999)、イデア・ビラリーニョ (1920-2009) らによって創刊された。ライバル誌と目されたロマン主義的・理想主義的・田園主義的な傾向を帯びた文芸誌『アシール』[*Asir*][17] とは異なり、都市文学を目指した作家たちが力量を競い合う場としての役割を果たし、専ら目を向けている先は欧米の文壇の動きであった。

この二誌に関わり始めた 1950 年前後は、公教育省の賞を受けた初の評論『どんでん返しと小説』[*Peripecia y novela*] (1948 年)、初の短編集『今朝』[*Esta mañana*] (1949 年)、愛と孤独をテーマとした詩集『その間だけ』[*Sólo mientras tanto*] (1950 年)、『最後の旅行とその他の短編』[*El último*

viaje y otros cuentos］（1951 年）、プルーストをはじめウィリアム・フォークナー、ヘンリー・ジェイムズらを取り上げた『マルセル・プルーストとその他の評論』［*Marcel Proust y otros ensayos*］（1951 年）といった作品をコンスタントに発表したが、売れ行きの方はさっぱりだった。

ただ幸いに、この上記の評論を献本したことがきっかけでフアン・カルロス・オネッティとは生涯の友と呼べる関係を築き、しばらく断続的に書簡のやりとりをする。彼からの 1951 年の最初の書簡では、短編集『今朝』に厳しい評価が下され、どちらかというと文芸批評家としての能力の方を活かしたらどうかとの助言を受けている。それに対して本人は、「批評もしたいが、それ以上に短編の創作に力を入れたい」と将来への決意を返信している[18]。

また、この頃から彼の中では徐々に政治意識が芽生え始めていた。1952 年、ウルグアイ政府が社会主義陣営への対抗策として米国との軍事協定締結を進めていたが、その反対運動に積極的に参加したのである。学生や組合が中心となったこの反対運動は頓挫したが、ビラ配布やデモ行進など、彼にとって初めての政治参加と呼べるものであった。

ところで、ベネデッティを含め多くの民衆がこのように政治活動を活発化させるに至るウルグアイの歴史とは一体どのようなものであったのだろうか。ここではひとまず、建国から 1950 年代までのウルグアイ史の概略を示しながら、ベネデッティの青壮年期につながる時代的背景を整理しておく。

ウルグアイの独立は苦難に満ちている。スペイン、ポルトガル、アルゼンチンの勢力圏争いに巻き込まれながらも、1811 年に「建国の父」と称されるホセ・ヘルバシオ・アルティガス将軍（1764-1850）指揮する対スペイン独立運動が開始された。連邦制を構想していた彼は、スペイン軍を撃破するや、前年にブエノスアイレスで誕生していた中央集権的な革命政府にも反旗を翻し、モンテビデオを中心とした東方州（バンダ・オリエンタル）を一時期支配した。しかしながら、最終的には 1820 年のポルトガル軍との戦いで敗北を喫し、パラグアイへ亡命する。しばらくして彼の夢を

継いだ「33 人の東方人」と呼ばれる者たちがその地の帰属を巡り、1825 年からラプラタ川諸州連合（アルゼンチン）側に立って、すでにポルトガルからの独立（1822 年）を達成し同地を支配していたブラジル帝国軍と戦った。このシスプラティーナ戦争と呼ばれる戦いはイギリスの調停によって成立した講和条約で決着を見る。その結果、この二つの大国間の緩衝地帯という形で 1828 年に「ウルグアイ東方共和国」が誕生するのである。

独立後はコロラド党（赤・自由党）とブランコ党（白・国民党）との対立が激化し、内乱状態が久しく続いていたが、20 世紀初頭に「近代ウルグアイの父」と称されるホセ・バジェ・イ・オルドニェス（1856-1929）が大統領に就任し、優れた政治手腕を発揮する。ウルグアイでは畜産業の近代化を基軸として、英国資本をもとに 1870 年代から工業発展の萌芽が見られていたが、これを民族資本の手により一層推進しようとしたのがバジェであった。一期目（1903-07）には政教分離、離婚法の成立などの世俗化を推し進め、任期終了後は欧州に滞在して労働運動の高まりを目撃した。その経験を活かして、大統領に返り咲いた二期目（1911-15）には、民主的な社会経済政策、工業のインフラ整備を積極的に進め、「南米のスイス」と呼ばれるほどの福祉国家を築き上げた。8 時間労働制の施行、「老齢年金法」「労働災害法」の制定、電力・水道・郵便・電話といった公共サービスの国有化などの一連の社会改革を、彼の名をとって「バジスモ」という。

この政策は 1929 年の世界大恐慌後も継続され、ベネデッティの少年期から青年期にかけてのウルグアイは、政情不安にあった隣国アルゼンチンやブラジルに比べて、ラテンアメリカ諸国の中では比較的安定的な社会を形成していた。その礎を築いたバジェの国家経営について、ベネデッティはインタビューや作品の中で再三にわたって高く評価している。

1939 年に第二次世界大戦が勃発し、当初中立国の立場をとっていたウルグアイは最終的に連合国側にまわり、1945 年 2 月にはドイツ・日本に宣戦布告した。直接の参戦がなく、すぐに終戦となったために甚大な経済的打撃は免れたが、1950 代半ばに入ると、農畜産物を主体としたモノカ

ルチャー経済に依存した産業構造の脆弱性が露呈する。特に朝鮮戦争後に、農産物の国際価格の暴落、畜産物需要の低下、新しい製造技術導入の遅滞などの問題に直面し、高いインフレ率を招き、経済状況の悪化が深刻になり始める。その結果、次第に国全体に停滞感が漂い始め、1960 年代後半の政情不安、さらには軍部台頭へとつながっていくことになる。

第 2 節　「オフィス」作家とキューバ革命の衝撃

1953 年は初の小説『我々のうちの誰が』［*Quién de nosotros*］[19] と、初の戯曲『例えば、あなた方』［*Ustedes, por ejemplo*］という二つの新しいジャンルへの挑戦で始まったが、どちらも反響は乏しかった。このような創作活動や 1954 年に就いた『マルチャ』文芸欄編集部長としての仕事は、本業のフランシスコ・ピリア製造株式会社に勤めるかたわらでなされており、この会社での責任が重くなるにつれて益々多忙な日々を送るようになっていた。

そのような二足の草鞋を履く中、1956 年に発表した『オフィス詩集』［*Poemas de la oficina*］がヒットに恵まれ、「オフィス詩人」と呼ばれるようになる[20]。それまでラプラタ圏の文学で多く見られた牧歌的な農村を舞台にしたガウチョ文学ではなく、都市での日常の仕事風景を題材にしたことでサラリーマン読者の共感を呼んだのである。会話体を採り入れるなど伝統的な形式にとらわれない簡潔な自由詩は新鮮味に富んでいた。当時詩集が売れるというのは出版業界としては珍しいことであり、『マルチャ』編集長のカルロス・キハーノから職場に祝福の電話がかかってきた時には、改めてプロの作家を意識して身震いしたという。本人としては八作目の作品でようやく日の目を見たわけだが、長い下積み生活を知らない人からは、いきなりヒットに恵まれた作家として勘違いされたと苦笑交じりに語っている。これで得た収入は出版時の借金の返済に充てた。

1950 年代半ばからは映画や演劇の世界にも関心を持ち、日刊紙『ラ・マニャーナ』［*La Mañana*］で映画批評を手掛けるようになった。そして、

1957 年にはその夕刊紙にあたる『エル・ディアリオ』［*El Diario*］[21] の特派員と『マルチャ』の特派員を兼ねて、約 8 か月間にわたりヨーロッパ諸国を訪問し、現地から記事を送り続けた [22]。この時、妻のルスを帯同している。帰国後の 1958 年には、戯曲としては二作目となる喜劇『ルポルタージュ』［*El reportaje*］を『マルチャ』編集部から発表した。

1959 年及び 1960 年には、ベネデッティにとって作家人生の転機をなす二つの出来事があった。一つはキューバ革命の衝撃である。1959 年 1 月、フィデル・カストロ率いる革命軍がフルヘンシオ・バティスタを打倒し革命政権を樹立した。1953 年 7 月 26 日のモンカダ兵営襲撃から実に 5 年半を要したこの革命の成功はベネデッティの魂を揺さ振り、この革命の熱気を受けて、作家、芸術家、政治家からなる「キューバ革命支援知識人委員会」の創設者の一人として名を連ね、政治への関わりを深めていく。折しもキューバ革命の勝利から間もない 5 月 3 日に、カストロがブエノスアイレスで開催されたラテンアメリカ経済会議後にウルグアイを訪問し、洪水被害に見舞われた農村部を視察するなどして約 44 時間滞在している。ウルグアイ市民の熱狂的な歓迎の中、直接カストロの姿を目に焼き付けたであろうか。

もう一つは、作品の大ヒットである。都市生活者をテーマとする短編集『モンテビデオの人々』［*Montevideanos*］（1959 年）と、そのテーマを日記形式で描いた小説『休戦』(1960 年)[23] とが一躍脚光を浴びることになった。まさに作家人生における「革命的出来事」と言ってよく、これによって文学者としての地位が確立する。知名度も上がってきたことで将来の見通しがついたのだろう、また以前から妻のルスも税関で働いて収入を得ており、これを機に 1960 年早々、約 15 年間勤めた会社を退職して執筆活動に専念する。

中産階級にあたる都市生活者をテーマとしたこの『休戦』は、プチブル的な生活が横溢するモンテビデオを舞台にした、定年を前にした男やもめとうら若き女性とのはかない恋愛物語となっており、単調で物憂い日常の中で話が進行していく [24]。作品の着想はベネデッティ自身が働いていたオ

フィスの現場から得たもので、お役所仕事的な日常に埋没している無自覚な市民に対して覚醒を求める内容となってはいるが、政治色は薄いものだった。20 か国語ほどに翻訳され、のちに映画化もされる。

1959 年 5 月にこの作品を脱稿した後、年末までの 5 か月間米国に滞在している。これは、1955 年にすでに執筆を終えていた二幕物の作品『往復』[*Ida y vuelta*][25] が、1958 年にモンテビデオで上演されて好評を博したことにより、アメリカ教育評議会から奨学金を給付されての招聘であった。しかしながら、キューバ革命直後で極度に緊張感漂う中での米国への安易な渡航は批判され、またこの喜劇も、港湾労働者に扮する二人の役者が荷物を運ぶ滑稽な演技だけをもって、一部の共産党員からは労働者を侮辱しているブルジョア作品と見なされた。

そして、出発間際にはちょっとしたごたごたに巻き込まれた。彼の『オフィス詩集』の一部がアナーキスト系新聞に取り上げられたことで、要注意人物として一時ビザの発給停止措置が取られ、旅行が見送られたのである。しかし、詩の内容は米国批判のようなものではなく、結局 3 か月後には再び招待されることになった。ただし、テロなどとは一切関係ないという誓約書を提出させられた上での許可だった。この不当な仕打ちに対しては、担当者に皮肉をちくりと浴びせている。大統領を暗殺しようと考えている米国人たちにこそ誓約させたほうが良いのではと。数年後、ケネディ暗殺（1963 年 11 月）が現実のものとなった時には、やはり自分の見立て通りだったではないかと語っている。

滞在期間中はウルグアイの政治状況や演劇をテーマとした講演活動を含め、サンフランシスコ市やニューヨーク市を訪れた[26]。その時感じた黒人に対する米国人の偏見は短編『あとは密林だけ』[“El resto es selva”][27] で描かれ、大都会を行きかう人々や移民たちの仕事を目撃した時の心情は「マンハッタンでの誕生日」[“Cumpleaños en Manhattan”][28] という詩に詠われている。アラバマ州やバージニア州では、バスの乗降時に黒人差別の場面に直接遭遇した。このように「北の巨人」たちの生活の様子を観察し、貧困、物質主義、人種差別、社会的不平等にあえぐ資本主義国の現実

に幻滅したことで、以降、反帝国主義、特に反米主義の立場を鮮明にし、キューバ革命の関係者たちと広く交流するようになる。

奇しくも、オフィスを題材とした作品の成功によって一つのジャンルを確立したところで、キューバ革命によって次なる創作課題が湧き上がってくることになった。すなわち、倫理上の観点で市民の日常生活を描いた作品づくりから、次第に政治問題を題材に取り込んだ新たなジャンルの作品づくりに本腰を入れるようになるのであり、ある意味、啓示のようなものとして運命づけられていたと言えなくもない。

そして、この倫理と政治を融合させた形で結実するのが、1960 年 6 月に発表された評論『ストローテイルの国』[*El país de la cola de paja*][29] である。このタイトルには、「勇気を奮い起こせず、良心の呵責に苛まれている国」という意味が隠されており、「オフィス国家」[30] と賤称されるウルグアイの現状を憂え、国民全体に広がる精神的モラルの喪失や社会的停滞を描いた政治色漂う作品だった。特に、反バジスモを掲げるガブリエル・テラ大統領[31] によって引き起こされたクーデターへの抗議として、バルタサル・ブルム元大統領[32] が自宅前の通りで大勢の人々の見守る中、「バジスモ万歳」「自由万歳」と叫びながら拳銃自殺した過去の事件（1933 年 3 月）を取り上げた章がある[33]。その執筆の意図は、事件に対する自国民の反応の低さを嘆き、奥底に眠る政治的無関心さや権威主義体制への臆病な態度を指摘するところにあった。この作品に対する評価は大きく分かれ、道徳的過ぎるとか解決策の提示がないなどと仲間内からも手厳しい声が聞かれた。確かに厳密な政治理論に立脚しているものとは言えなかったが、中産階級にはびこる安閑とした個人主義に対して一石を投じたことは間違いなかった。この作品発表のあおりを受けて、『マルチャ』が当局の捜査を受けたという。これが編集長カルロス・キハーノとの不和の原因の一つでもあり、しばらく『マルチャ』から距離を置くことになる。

1961 年には、詩集『この頃の詩』[*Poemas del hoyporhoy*] と、ダモクレスの名で『マルチャ』に連載していた記事をまとめた時事評論『寝た子を起こせ』[*Mejor es meneallo*] を発表している。いずれも先の『ストローテ

イルの国』の延長線上にあり、社会批判を基調とした作品であった。

この年は、1 月のキューバと米国との国交断絶、4 月のキューバ社会主義宣言及びヒロン湾（ピッグス湾）事件といった極度に緊迫した出来事が続く。そのような情勢下で米国大統領ジョン･F･ケネディが発足させた「進歩のための同盟」（3 月）に基づき、8 月 17 日議長国ウルグアイで開催された米州機構（OAS）経済社会理事会の特別閣僚会議において「プンタ・デル・エステ憲章」が調印されている。民主的制度、経済開発、住宅政策、土地改革、識字教育、保健衛生、労働環境、税制、財政・金融政策、貿易などについて合意形成がなされたが、チェ・ゲバラを団長としたキューバは同盟自体が「米国の経済的帝国主義の手段」であるとして反対を表明した。その結果、翌年 1 月には米州機構から追放され、10 月のキューバ・ミサイル危機へとつながっていくのである。

この 17 日の会議を終えるや、ゲバラはモンテビデオのウルグアイ共和国大学を訪問しているが、ウルグアイにおける民主主義の進展に期待を込めた内容の講演を終えて車で立ち去ろうとした時、右翼と思しき人物に狙撃された。ベネデッティやチリのサルバドール・アジェンデ（当時上院議員、のち大統領）もその会場に居合わせており、一人の歴史学教授が銃弾に巻き込まれ命を落としている[34]。

1962 年には、1 月チリのコンセプシオンで開催されたラテンアメリカ作家集会に出席し、ウルグアイ文学の歴史と今後の方向性について発表を行った。そこではまた、聴衆の前で詩を朗誦するチリの詩人パブロ･ネルーダ（1904-1973）の姿に魅了されている。ただし、ラテンアメリカ現代詩の二大潮流を築いたとされるネルーダとペルーのセサル・バジェホ（1892-1938）とを比べた場合、どちらに感化されたかと問われたならばバジェホの方であるとしている[35]。そして、この年実施されたウルグアイ国政選挙で候補者リストの末端に名を連ねたベネデッティだったが、所属するウルグアイ社会党（PS）は国民党（ブランコ党）に敗北した。この選挙結果を受けて、左翼のバラバラな組織体質や現実と乖離した選挙運動について自己批判すると同時に、益々自国の将来に不安を募らせ、倫理観、創意、連帯

に基づく政治意識の形成の必要性を強く感じるようになっていく。

1963 年には、小説として三作目となる『火をありがとう』[*Gracias por el fuego*] が、ラテンアメリカ文学ブームを支え続けていたことで知られるスペインのセイクス・バラル社主催の第五回ブレーベ叢書賞[36]の最終候補作になった。しかし、選考の末に惜しくも受賞を逃している。同社はこの作品の出版を試みたが、国家・家族・名誉を傷つける内容を有するとの理由からフランコ体制下の検閲に引っ掛かった[37]。なぜならば、権威主義的・家父長主義的な伝統の残る社会状況を批判した作品であったからである。

不正や腐敗にまみれる大物実業家で、家庭では母親に暴力をふるう父親に対して殺意を抱いた息子が、計画を実行できずに最終的に自死でもって訴えるというストーリーであった。幼少時代の優しかった父親の幻影に惑わされるとともに、旅行代理店を起業するに際して経済的援助を受けてしまった自身の不甲斐なさに苛まれたために、立ち向かう意気地が失せた末の選択であった。最終場面では息子の死に打ちひしがれた父親が愛人の前で心情を吐露する。モンテビデオでは 1965 年にアルファ社から出版され、約五万部を売り上げるヒットとなったが、一方スペインでは、フランコ体制瓦解直前の 1974 年にバルセロナのライア社より出版されるまで待たなければならなかった。

また、戯曲としては三作目となる先述した『往復』と、文芸評論『20 世紀のウルグアイ文学』[*Literatura uruguaya del siglo XX*]、1950 年代の詩を編んだ『在庫』[*Inventario*] を発表した。この「在庫」というタイトルは文字通り「ストックされたもの」という意味で、最新の詩から古い詩へと遡りながら読んでほしいとの願いを込めて命名されたものである。さらには、スカンジナビア航空会社企画によるジャーナリスト対象のコンクールに応募して賞を獲得したため、ストックホルムやコペンハーゲンを訪れている。またこの 1963 年には、すでに 1955 年に廃刊となっていた文芸誌『ヌメロ』がカルロス・マルティネス・モレーノ（1917-1986）[38] やベニート・ミリャ（1918-1987）らによって 2 年間だけ復刊されたので、再び編集を支えることになった。

続く 1964 年には、隔週発行のユーモアコミック雑誌『ペロドゥーロ』［*Peloduro*］（1943 年創刊）[39]にも『マルチャ』と同じくダモクレスのペンネームで編集協力に加わり、さらに活動の範囲を広げていった。また、ルーマニアのロマン派詩人ミハイ・エミネスク没後 75 周年を記念してブカレストで開催された国際作家会議にも出席している。

この年、キューバから 7 月 17 日付の一通の手紙が届く。アイデエ・サンタマリア（1922-1980）からのもので、翌年開催が予定されているカサ・デ・ラス・アメリカスのコンクールでの小説部門審査員に関する依頼状だった。このカサ・デ・ラス・アメリカスとは、文学や芸術を奨励し顕彰するキューバの文化機関であり、彼女によって革命直後の 1959 年 4 月に創設されている。アイデエはモンカダ兵営襲撃事件の際、従軍看護婦として加わり捕えられた人物であり、フィデル・カストロの副官で事件後に虐殺されたアベル・サンタマリアの姉である。弟アベルの抉られた眼球を見せられるなどの拷問を耐え抜いた闘士であった。

しかし、開催予定の 1965 年はアイデエの招聘には応じることができず、その代わり次回の訪問については確約した。その理由としては、数年前から関わっていた日刊紙『ラ・マニャーナ』の文芸欄の担当（翌年にはやめる）に加え、わだかまりのあったもののカルロス・キハーノからの依頼で彼の主宰する『人民トリビューン』［*La Tribuna Popular*］の映画批評欄の担当をするなど、極めて多忙であったからだと思われる。この年には、先述した『火をありがとう』がモンテビデオのアルファ社から出版されたほか、詩集『近くの隣人』［*Próximo prójimo*］も発表されている。

キューバ共産党による一党独裁が確立されたのはこの年の 10 月であったが、その新体制キューバに翌 1966 年 1 月、約束通り文芸審査員の任を果たすべく初めて足を踏み入れ、五週間滞在した。自分の目で革命の地を見ることができる高揚感に包まれ、多くの人たちと信頼の絆を深めることができた。その時の心境は、「ハバネラ」［“Habanera”］という詩に残されている[40]。

4 月からはパリに滞在し、ユネスコ機関で翻訳兼速記を担当したり、ラ

ジオ局ではバルガス・リョサの代役としてラテンアメリカ向けニュース番組のアナウンサーを担当したりした。また、9 月には友人の招待を受け二週間程ハンガリーに、10 月から年末まではプラハ大学などでの講演のためチェコスロバキアに足を延ばしてもいる。この時には、よもや約 1 年 8 か月後にソ連率いるワルシャワ条約機構軍がプラハに侵攻しようとは露ほども思わなかったに違いない。この年には、ウルグアイ文学界の傑出した評論家を讃える評論『ホセ・エンリケ・ロドーの才能と人物』[*Genio y figura de José Enrique Rodó*][41] 及び詩集『跳ね橋に逆らって』[*Contra los puentes levadizos*] を発表する。

1967 年 1 月、今回は短編部門のコンクール審査員として招聘され、二度目のキューバ訪問となった。到着早々の 8 日にはフィデル・カストロと雑誌編集協力者との会合に出席し、16 日から 22 日までの期間中は、ハバナから東 140km に位置するバラデーロで開催されたニカラグア詩人生誕 100 年記念集会「ルベン・ダリオとの出会い」に参加し、ダリオの詩を朗読している。

2 月にはフィデル・カストロによって審査員たちが招集され、夜 11 時から朝 7 時まで胸襟を開いて様々な話題について語り合った。ベネデッティのほかに、フリオ・コルタサル、マリオ・バルガス・リョサ、アンヘル・ラマ、ロベルト・フェルナンデス・レタマール (1930-2019)、ロケ・ダルトン (1935-1975)、エドムンド･デスノエス (1930-)[42]、ダビット･ビーニャス (1927-2011)[43] など錚々たる顔ぶれが参集した。この時、ベネデッティがキューバの新聞のお粗末さを指摘したところ、情報収集は外国の新聞に頼っているとしたカストロから、キューバに残って新聞の刷新に協力してくれないかと懇願されている。

また、7 月下旬から 8 月上旬にかけて開催された「プロテストソング国際集会」では、後年親交を深めてリサイタルで共演することになるウルグアイ人音楽家ダニエル・ビグリエッティ (1939-2017) と知り合った。その後、ウルグアイに戻っていた 10 月にはチェ・ゲバラの突然の訃報に接し、憤怒と悲しみを抱えたまま第 2 回ラテンアメリカ作家会議に出席するため

メキシコに向かう。この年には、ルベン・ダリオ、パブロ・ネルーダ、カルロス・フエンテス、フリオ・コルタサルなど傑出した作家たちを取り上げた文芸批評『混血大陸の文学』［*Letras del continente mestizo*］や、詩集『夢すれすれに』［*A ras de sueño*］を出版している。

同年 11 月のキューバ訪問は、カサ・デ・ラス・アメリカス内での文学調査センター（CIL）[44] 開設を依頼されてのことだった。文学に関する広範な知識と鋭い批評眼を買われて、翌 12 月から初代センター長の座に就き、キューバの文化振興に貢献していく。そして、講演会、セミナー、討論会などの企画・運営、編集作業、資料収集、雑誌『カサ・デ・ラス・アメリカス』への助言 [45] などを通して文学に携わる人々と交流し、初めて天職と思える仕事にやりがいを感じながら、見識を深め経験を積んでいった。キューバに遅れて到着した妻のルスがセンター事務局で手伝い始めたことも喜びであり、仕事の励みとなっていた。

このセンターでの特徴的な企画として、文芸批評シリーズ『マルチ評価』［*Varolación múltiple*］の発行が挙げられる。これは、文学的テーマや文学界の動向を話題に取り上げたり、ラテンアメリカ作家を順繰りに分析したりするものであり、ベネデッティがセンター長の座を離れて以降も引き継がれていった。また、多くの文学者、芸術家、政治家の生の声を録音収集してまとめた「言葉のアーカイブ」［*El archivo de la palabra*］と、それをレコードやカセットテープに起こした『このアメリカの言葉』［*Palabra de esta América*］の制作にも取り組んだ。

1968 年 1 月に開催されたハバナ文化大会では、フリオ・コルタサルやバルガス・リョサなどの文学仲間たちはもちろんのこと、音楽、バレエ、絵画、映画、演劇など幅広いジャンルにわたる総勢約 500 人の知識人が世界各国から押し寄せた。この時、ベネデッティは「行動の人と知識人との関係」という演題で発表を行っている。また、ヨーロッパ文学や北米文学に関する文芸批評『芸術と仕事について』［*Sobre artes y oficios*］やサスペンス仕立ての短編集『死とその他の驚き 』［*La muerte y otras sorpresas*］を発表する。またこの年からハバナで、キューバのロベルト・フェルナンデ

ス・レタマール、ニカラグアのエルネスト・カルデナル（1925-2020）ら詩人 10 人へのインタビューを開始する[46]。これはのちに『コミュニケーション詩人たち』［*Los poetas comunicantes*］（1972 年）という作品にまとめられた。

このように精力的にカサ・デ・ラス・アメリカスで働いていた 10 月頃、奇妙なことに母国ウルグアイでは複数回にわたりベネデッティが自殺したという出所不明の噂が流されていたという。質の悪い文学批判でないなら、どのような動機でそんなことをするのかと疑問を投げかけ、忙しくて自殺している暇などないと、本人はそのデマを一笑に付している[47]。

1969 年 3 月、文学調査センター長の仕事を残したまま一度ウルグアイに戻る。6 月には、友人で文芸批評家のアンヘル・ラマの助言を受け、それまで『マルチャ』に寄稿していたキューバ関連の評論、詩、インタビューをまとめた『キューバノート』［*Cuaderno cubano*］を発表。7 月には 10 日間にわたって開催された第 1 回汎アフリカ文化フェスティバルへの招待を受けてアルジェリアを訪問し、サハラ砂漠以南の国々やアラブ諸国の文化人、政治家たちと親交を深めた。アルジェリア革命（1962 年）以後の様子を肌で感じ、またモザンビークやアンゴラなどの解放闘争や南アフリカのアパルトヘイトの現状についてインタビューを試み、その成果として、反植民地主義・反資本主義・反帝国主義の視点からまとめたルポルタージュ『アフリカ 69』［*África69*］[48] を発表している。

そして、1970 年 2 月から再びハバナに滞在して、小説『フアン・アンヘルの誕生日』［*El cumpleaños de Juan Ángel*］を翌月から約 9 か月間かけて書き上げた（1971 年メキシコのシグロ XXI 社発行）。この作品は、固有名詞にすら大文字を一切使わない韻文形式で綴られ、当時のウルグアイ社会の目まぐるしい変化を強調するために、敢えてストーリーの時間設定に斬新な工夫を凝らした実験小説であった。一人の人間がゲリラになっていく過程が短い時の刻みとともに描かれ、最終場面での下水溝をたどって逃走するゲリラたちの姿が話題を呼んだ[49]。革命を擁護するこの作品をきっかけとして、これまでの倫理的テーマを扱って都市生活を描いていた頃のペシ

ミズムに彩られた作風から、政治的テーマを扱いつつもオプティミズムな作風へと明らかに転じていったのである。この本の献辞は、後述するようにゲリラ闘争を展開し、刑務所に収監されていた友人ラウル・センディックに捧げられたものだった。

このように各地を往来している間に、キューバでは文学界を揺るがす出来事が進行していた。エベルト・パディージャ（1932-2000）の発表した詩集『ゲームの外で』[*Fuera del juego*] が、1968 年 10 月に国内の文芸コンクールで賞を受けたことをきっかけに、キューバ革命のイデオロギーに反する作品、人物ではないかという疑念が巻き起こり、最終的にキューバ政府から反革命分子として断罪され、1971 年 3 月 20 日に逮捕、38 日間の拘留措置がとられたのである。世にいうパディージャ事件の発生である。

この言論弾圧事件に対しては国内外から非難の声が上がり、ジャン・ポール・サルトルやバルガス・リョサらが署名入りの抗議文をフィデル・カストロに送りつけた。しかし、彼はパディージャが自己批判したとしてその抗議を一蹴した[50]。この騒動を巡っては左派知識人たちに動揺が走り、分裂の様相を呈することになる。バルガス・リョサのように革命キューバから決別・離反していく者、フリオ・コルタサルのように性急に反応して一度はカストロに対する抗議文に名を連ねたが、その後弁明に追われて擁護に回帰した者、ベネデッティのように情報を整理した上で判断を下し、最終的に支持を表明した者など、事件に対する認識の違いやその後の文学者としての政治的スタンスの違いがくっきりと色分けされるものだった。作品が物議を醸し出した頃から事態の推移を見守っていたベネデッティだったが、事件との関わりについての詳細は第 2 章第 2 節で取り上げることとする。

第 3 節　軍事クーデターと亡命

ウルグアイでは、ベネデッティが留守にしている間の 1966 年 8 月、立法議会によって集団指導体制[51]から大統領制への移行が承認され、11 月の

選挙を経て 1967 年 3 月、コロラド党の退役将軍オスカル・ディエゴ・ヘスティードが大統領に就任した。大統領制の復活がなされた理由は、活発化する都市ゲリラ「トゥパマロス」（正式名は国民解放運動 Movimiento de Liberación Nacional - Tupamaros、略称 MLN―T）などへの対策として、権限を大統領に一本化する必要性からであった。

そのヘスティード大統領就任直後、通貨ウルグアイ・ペソの歴史的大暴落によるインフレの加速に見舞われ、失業率悪化や賃金凍結を巡る労働争議、交通機関の運賃値上げに反対する学生運動、極左勢力によるテロ活動など社会的混乱が増大したため、政府は治安対策に乗り出す。しかし、その対策に追われている最中の 12 月にヘスティードは心臓発作で急逝し、短命に終わったその政権を引き継いだのが、副大統領職から昇格したホルヘ・パチェコ・アレコであった。非常事態を宣言した彼は即座に左翼組織を非合法化し、組合員の連行、教育機関への介入、出版物の差し押さえなどを断行する。このような一連の弾圧の中で、8 月リベル・アルセという学生活動家が警察の発砲による初の犠牲者となり、抗議活動のシンボルとなった。以後 1972 年まで続くこのパチェコ政権下では反体制派の投獄や拷問などの弾圧が苛烈を極め、それに比例するようにトゥパマロスによるゲリラ活動は先鋭化の一途をたどり、企業強盗や政治的誘拐などが多発する。

さて、ここでは少し時間を巻き戻し、このトゥパマロスについてベネデッティとの関連も踏まえて触れておきたい。朝鮮戦争後、ウルグアイでは主要産業だった農牧産品の世界的需要低下による輸出の激減や国内市場の狭小さによる輸入代替工業化の停滞の結果、インフレや財政悪化が深刻な状況にあったことは先述した通りである。それらの解決策を見出せずにいた伝統的二大政党、コロラド党とブランコ党に対して、この時期から労働者や学生の不満が高まり、工場や学校の占拠、ストライキが頻発していく。その中で特に際立っていたものの一つに、ウルグアイ社会党の過激分子で組合弁護士のラウル・センディック（1926-1989）[52] を中心として、1961 年 9 月に北部地域の農村ベジャ・ウニオンで結成されたアルティガス・サト

ウキビ労働者組合（UTAA）[53] の活動がある。1962 年 5 月 1 日のメーデーでは労働条件の改善要求を掲げ、参加者 200 人以上にのぼる首都へのデモ行進を敢行した。アルゼンチンやブラジルと国境を接する辺境の地で、このように農地改革と貧困対策のため組合活動に身を投じているセンディックの姿を思い浮かべたベネデッティは、「我々は皆共謀している」[“Todos conspiramos”][54] という詩を彼に捧げている。

1963 年 7 月末には、センディックら 8 人が南西部コロニア県にあったスイス射撃クラブを襲撃し、ライフル銃やカービン銃などを強奪する事件を引き起こした。その目的は広大な土地を占拠するための武装化にあったが、逃走車両 2 台のうちの 1 台が整備不良で横転し、積み荷は路肩の草むらに飛び散り、捜査の手が伸びた。以来、センディックは地下に潜行して戦闘訓練を積むなどしていたが [55]、共に組合支援にあたっていた「コーディネーター」（Coordinador）[56] と呼ばれる革命的左翼の寄り合い所帯の解消を図り、1965 年に新たなメンバー構成でトゥパマロス [57] を結成する。1967 年末に 50 人程だったゲリラの数も 1968 年から急激に増加し、1970 年から 1971 年のピーク時には 5000 人以上に達していたと推計されている。軍事部門、政治部門、奉仕部門（物資の調達・運搬や印刷を担当）の三つの組織で成り立ち、各部門はさらに 3 人から 5 人編成の部隊ごとに細分化されていた。また、別途シンパの若者たちからなる「トゥパマロ支援遊撃隊」（Comando de Apoyo Tupamaro）のような後方支援グループも出現するようになる。ゲリラ活動は、政府機関や外資系企業への襲撃、建物の破壊・放火、武器の略奪、要人誘拐、資金調達のための銀行強盗、都市の一時占拠（南部コロニア県パンド市）など、次第に過激さを増していった。

1970 年 7 月末には、ウルグアイ公安当局のアドバイザーとして拷問の方法を指南していたと言われる米国国際開発庁（USAID）職員ダニエル・アンソニー・ミトゥリオーネ（1920-1970）を誘拐するとともに、政府と結託した米国の違法介入を暴き、仲間 150 人の釈放を要求する。しかし、パチェコ政権がこの人質引き換え要求を受け入れず、リーダーのラウル・センディックを 8 月 7 日アジトで発見し逮捕したことで、その 3 日後の 8 月

10 日、仲間のゲリラたちは殺害したミトゥリオーネを車の中に放置した[58]。このことがリチャード・ニクソン政権下にあった米国の憎悪を益々掻き立て、ゲリラ殲滅ための軍政支援をさらに加速させることとなった。

このような弾圧政策を敷くパチェコ政権への抵抗に呼応するかのように、1971 年 1 月末（推定）[59]、ベネデッティはキューバからウルグアイに戻って「3 月 26 日独立運動」の立ち上げに加わる。これは、来る 11 月の大統領選挙・国政選挙を前にしてトゥパマロスが流血を伴う武装闘争とは異なる形、すなわち選挙という合法的手段によって大衆の支持離れを食い止め、動員力を高めるためにとった戦略の一つで、トゥパマロスの政治部門の責任者マウリシオ・ロセンコフ（1933-）[60] の構想によるものであった。ベネデッティは彼からの協力依頼を受けて創設に関わることを決めたのである。

この組織は、トゥパマロスの政治部門に属する構成員を含み、またロセンコフら幹部との会合を開くなどその強い影響下に置かれ、「選挙とゲリラ」といったダブルスタンダードの性格を帯びていたが、表向きは独立性・合法性を謳っていたことにより、支持政党を持たない市民層、学生、知識人、農民らの受け皿となった。独自の選挙立候補者を擁立せず、また投票行動に縛りを設けずに反政府運動を展開する特異な存在であり、1971 年 8 月の時点でモンテビデオ市に 130 グループ、内陸部に 74 グループ、総勢約六千から一万人のメンバーがいたと言われる[61]。

「3 月 26 日」という日は、1815 年に建国の父ホセ・ヘルバシオ・アルティガス将軍の旗がモンテビデオで掲揚された日とされ、士気を高めるためにこの名称を提案したベネデッティは 4 月 8 日の全体会で、人類学者のダニエル・ビダルト（1920-2019）[62]、労働組合の指導者ルベン・サッサーノ（1935-2005）[63]、キマル・アミール（1940-2014）[64]、大学職員のドミンゴ・カルレバーロ（1929-2016）[65] らと共に正式に幹部に選ばれる。そして、本人はあくまでも武器なき政治闘争を主眼とする立場を堅持し、この組織の代表として 2 月 5 日に結成されたばかりの中道左派連合「拡大戦線」（Frente Amplio）に合流し、その執行部の一員となった[66]。

この新たに誕生した政党組織は、パチェコ政権下での軍部を嫌って退役した将軍リベル・セレグニ（1916-2004）を中心に据え、社会党、共産党、キリスト教民主党、さらには伝統政党の進歩派の一部をも含む幅広い左派勢力を糾合したものであった。方針としてはゲリラ戦術を拒否し、憲法を尊重して選挙による政権奪取を目指していた[67]。これに対してトゥパマロスは、選挙期間中はゲリラ活動を一時停止しながら拡大戦線を「批判的に支持する」と主張し、「3 月 26 日独立運動」を介して影響を及ぼそうとしていた。要するに、ベネデッティが属していたこの「3 月 26 日独立運動」は、選挙のためにトゥパマロスと拡大戦線を結びつける中間的存在として機能していたということになる。

ベネデッティはこのように政治活動に関与するかたわら、同年 10 月には、諸外国での講演などによる度重なる不在によって任を果たせなくなっていた前任者のアンヘル・ラマ[68]に代わって、ウルグアイ共和国大学人文科学部中南米文学科長の職に就く[69]。独学で過ごしてきた彼が応募、審査を経て大学教育を担うことになったわけだが[70]、自治的に運営されていた当時の大学は政治闘争の拠点の一つでもあった。

チリでは米国の圧力に屈せず、アジェンデ社会主義政権が選挙によって 1970 年 10 月に誕生し、南米に左翼陣営の新しい橋頭堡が築かれていた。そのような追い風が吹く中、1971 年 11 月 28 日に実施された選挙で拡大戦線は全体の約 18% の得票率[71]で存在感を示し、第三政党として急浮上した。結果としては、パチェコ政権下で農牧業大臣を務めていたコロラド党のフアン・マリア・ボルダベリー・アロセナが国民党のウィルソン・フェレイラ・アルドゥナーテを破り、翌年 3 月大統領に就任した。

敗北を喫したとはいえ、ベネデッティは選挙戦の総括として国民意識の高まりにかなりの手ごたえを感じていた。一方、不正があったとして選挙結果に納得のいかないトゥパマロスは 1971 年 12 月末、しばらく控えていた戦闘を再開させ、1972 年 4 月 14 日には内務省の命令で動いていた「トゥパマロス狩り」と称される準軍事組織の構成員 4 人を殺害した。逆に、その報復措置として数時間後にはゲリラたちが殺害されるに至り、応酬合戦

に火が付いた。ついに政府は翌 15 日、国会での採決（拡大戦線は反対、国民党とコロラド党は賛成）によって内戦状態を宣言して、陸海軍と警察治安部隊との合同部隊を本格的に投入して鎮圧にあたらせる。

双方に多数の死傷者を出したこの内戦は 7 月に停止され、年末までにゲリラ組織は壊滅的打撃を受けて一掃された[72]。その決定的シーンは、プンタ・カレタス刑務所から脱走していたリーダーのラウル・センディックが 9 月に再逮捕[73]されたことである。包囲されても全く投降する構えを見せなかった彼は、激しい銃撃戦で顔面に重傷を負い、1985 年の民政移管までの約 12 年間にわたり獄中生活を送ることになる。また、この内戦下では共産党や「3 月 26 日独立運動」の施設なども急襲され、多くの反体制派の人々が逮捕されている。

このセンディックとベネデッティは、同じウルグアイ社会党に属していた頃からの仲だった[74]。センディックがサトウキビ工場で組合闘争を率いていた頃に起こしたスイス射撃クラブ襲撃事件後しばらくして、自宅に三週間程度匿ったことがある。また、キューバへの渡航の際は現地に亡命していた彼の家族に手紙や品物を送り届ける役を引き受け、指定された場所で密会していたこともある[75]。また、先述したように小説『フアン・アンヘルの誕生日』の献辞をゲリラのリーダーとなっていた彼に捧げたこと、選挙に向けてトゥパマロスと共闘関係を結んでいたこと、さらに「3 月 26 日独立運動」に属する若いメンバーたちの中にはゲリラにシンパシーを感じて過激な行動に走る者もいたことなどからして、トゥパマロスとの関係に疑念をもたれても不思議ではなかった。

しかし、本人は命懸けで闘う若者たちの気持ちを思い、センディックとの友人関係は認めつつも、決してトゥパマロスに加わったことはないと断言している[76]。それを裏付ける証言として、「3 月 26 日独立運動」の創設に共に関わったトゥパマロスのキマル・アミールが、「ベネデッティはトゥパマロスではない」と語っている[77]。

拡大戦線の中枢に身を置いてからのベネデッティは、ペンネームでの文芸記事ではなく実名での政治記事の執筆に力を入れ、ほぼ毎号『マルチャ』

に登場する。1973 年 1 月下旬から 1 か月程キューバに行くため留守にする旨の断り書きがわざわざ紙面に掲載されるほど、記事への読者の期待も大きかったようだ。この時期の政治への傾注は、評論『71 年の時報』［*Crónicas del 71*］や評論『地震とその後』［*Terremoto y después*］の形で現れる。

キューバでの仕事を終えて帰国後、まもなくして政局はさらに悪化する。議会と軍部との間で軋轢が生じ、支持基盤の脆弱だったボルダベリー大統領自身が 6 月 27 日、軍部の力に依拠して国会と地方議会を解散するといったクーデターを引き起こしたのである。これによって、形の上で民間人大統領を据えた「文民軍部権威主義体制」と呼ばれる軍部主導の政権が樹立され、1985 年の民政移管までこの体制は存続することになる。このボルダベリー政権下では、全国労働者協議会（CNT）[78] の解散、共産党や社会党などの非合法化、メディアの閉鎖がなされ、国際的共産主義活動に対する厳しい弾圧が実行された。拡大戦線のリーダーであるリベル・セレグニも、CNT が対抗策して呼びかけたゼネストで国内が騒然とする最中の 7 月に逮捕され [79]、一度は釈放されたものの厳重な監視下に置かれた。そして、1976 年 1 月にテロを扇動したとの理由で再逮捕、1984 年 3 月まで収監されることになる。

さて、クーデター後の陰鬱な国内情勢の中に踏みとどまり、パナマへの訪問や大学の仕事に明け暮れていたベネデッティだったが、週に数回自宅に匿名の脅迫電話がかかるなど身の危険が迫りつつあった。「投獄されるのは無駄な犠牲を払うことだ」との友達の忠告に不承不承従って、1973 年 11 月初め頃 [80]、ひとまずアルゼンチンへ出国した。この時のアルゼンチンは、隣国チリからの亡命者であふれ返っていた。アウグスト・ピノチェトによる 9 月 11 日のクーデター直後であったからである。

ただし、アルゼンチンも決して安全な地とは言えなかった。1973 年大統領選に勝利したフアン・ドミンゴ・ペロンが 10 月から三期目を果たそうとしていたが、翌 1974 年 7 月心臓発作で急逝する。後任として副大統領職にあった妻イサベル・マルティネス・デ・ペロンが昇格したものの、

その強権的な政治手法は国民からも軍からも支持されず、政情不安に包まれていたのである。

ブエノスアイレスに滞在してまもなく、ウルグアイでは「3 月 26 日独立運動」の一人のメンバーがトゥパマロスであるとの嫌疑をかけられて逮捕され、所持していた手帳からベネデッティの電話番号が割り出されていた。ウルグアイの自宅に押し掛けた当局から居場所を問い質された妻ルスが、「夫は今アルゼンチンにいる」と答えると、大晦日までに本人の出頭が命じられた。「罠かもしれない」という周囲の反対をよそに、危険を顧みずウルグアイにかけつける。この時の検察官は、のちに陸軍最高司令官を経て大統領となるグレゴリオ・アルバレス[81]の弟だったという。

本人の出頭は当局を驚かせ、尋問は 2 時間ほど続いた。出国した理由について問われると、「亡命ではなく、ブエノスアイレスで小説『休戦』の映画撮影が行われているからだ」と巧妙に切り返している。まんざら嘘をついているわけではなく、実際に映画化は進行していた。加えて、小説の噂を耳にしていた担当者がいたこと、逮捕されたメンバーがベネデッティの詳細な情報を語っていなかったことなどが幸いして、結果的には友人を救えなかったが、年明けの 1974 年 1 月 1 日に無事戻ることができた。それにしても大胆な行動である。この映画「休戦」はアルゼンチン人監督セルヒオ・レナンによって制作され（8 月封切り）、受賞は逃したものの、翌 1975 年のアカデミー外国語映画賞ノミネート作品となる[82]。そのことによって、ベネデッティの名は益々広く知れ渡っていった。

ブエノスアイレスを亡命地としている期間は、友人の経営するクリシス社、リネア社といった小さな出版社や日刊紙『ラ・オピニオン』紙に協力したり、小説の審査員としてキューバを訪問したりしている。クリシス社の雑誌は、歴史的評論『収奪された大地』で知られる「60 年世代」に属するウルグアイ人亡命作家エドゥアルド・ガレアーノが主宰しており、ベネデッティも協力を惜しまなかった。このような過酷で切迫した環境下にありながらも、詩集『緊急事態の歌詞』[*Letras de emergencia*]（1973 年）のほか、評論『ラテンアメリカ作家と可能な革命』[*El escritor*

latinoamericano y la revolución posible]、二つの詩集『ここまで』[*Hasta aquí*] と『他人の詩』[*Poemas de otros*](1974 年) を立て続けに世に出した。

この亡命期間中は身辺の警戒を怠ることなく、友人たちの好意でいつでも使用できるようにと複数のアパートの鍵を渡されていたが、アルゼンチン反共産主義者同盟[83]（ トリプル A、「死の部隊」 とも称せられる ）の脅迫からは免れ得なかった。1975 年 2 月、48 時間以内に出国しなければ殺害される恐れがあるということを知るや、大急ぎで飛行機に搭乗しペルーへ脱出する。この時、当局から危険分子と目を付けられた者たちへの出国勧告がラジオニュースで流され、それを対岸のモンテビデオで聞いて急遽駆けつけてきた弟ラウルの助けを得ている。

友人を頼って約 6 か月間リマに滞在。ペルーのジャーナリスト、フランシスコ・モンクロア・フライ (1922-1984) の推薦のおかげで、日刊紙『エスプレッソ』[*Expreso*] で週に 3 本のコラム欄を担当した。この時のペルーも変動の最中にあり、経済危機に見舞われたフアン・ベラスコ・アルバラード政権に対して、軍事クーデターを企てたフランシスコ・モラレス・ベルムデスが 1975 年 8 月に大統領に就任する。そして同月 22 日夕刻、ベネデッティをマークしていたペルー捜査警察 (PIP)[84] が突如滞在先のアパートを訪れる。パスポートや『エスプレッソ』紙との契約書類の確認のため署に同行を求められ、出国勧告を言い渡された。この発足当初の政権内では進歩的な軍内左派が右派より優位にあって幾分の寛容さを残していたからか、または滞在中の活動が文芸面に限られていただけからか、国外追放処分までには至らなかった。『休戦』で名を馳せた作家ということもあり、ある程度紳士的対応で遇されたようだ。

脱出先としてキューバを希望したが、あいにく航空便がなかった。そこで、陸路でのエクアドル行きかピノチェト政権下にあるチリ行きかという選択肢を提案されたが、危険を承知でトリプル A の跋扈するアルゼンチンに戻ることを決意し、翌 23 日朝の便に搭乗した。電話を受けた弟ラウルと妻ルスがブエノスアイレスで待ち受け、その後翌年の 1976 年 1 月まで身を潜めていたところ、どういうわけかペルー当局の誤解が解けたという

連絡が友人から入り、さらに国立図書館での仕事の誘いもあった。そこで再びペルーに舞い戻るも、到着後の政権内の急変やそれに伴う周囲の不穏な動きを察知したため、3 月 19 日アイデエ・サンタマリアに受け入れを頼む電報を送った。22 日の返信ですぐに出国するよう指示を受けた結果、翌日の飛行機でキューバへと向かう[85]。

この時ペルーでは軍内左派が権力の中枢から追放されて右派の優位が確定しつつあり、その影響で前回の滞在時よりもさらに厳格な措置が取られることを恐れたのではないかと推測される[86]。亡命候補地としてはスペインも挙がったが、経済的事情を考慮して断念している。出てきたばかりのアルゼンチンも 3 月 24 日には、ホルヘ・ラファエル・ビデラの軍事クーデターによってイサベル・マルティネス・デ・ペロンが打倒されており、いずれの出国もきわどいタイミングでなされていたことになる。

忍び寄る暗い影に不安を抱く彼の脳裏には、1939 年にスペイン内戦の戦火から逃れてフランスで客死したアントニオ・マチャードの顔がよぎっていたに違いない[87]。その簡潔な詩風に大いに感化を受けていることを著作物や後年のインタビューでしばしば語っているほど、内面的なつながりを持ったあこがれの詩人だったからである。

キューバに無事たどり着いて数か月後の 1976 年 6 月 12 日、祖国ウルグアイでは急進的に全政党の廃止を目論んだボルダベリー大統領と、政党の意義や国民投票の有効性までは捨て去っていなかった軍部との間に齟齬が生じ、今度はボルダベリー自身がその地位を追われる状況が現出した。その後任として 3 か月間の暫定大統領を挟んで、軍の任命によるアパリシオ・メンデス[88]が大統領となる。こうして軍部が完全に実権を掌握するに至る 1970 年代には、経済的理由も含めて国外へ脱出した人々は実に国民約 300 万人のうちの約 25 万人から 30 万人近くにも及んだというから、いかにすさまじい圧政、国難だったかがわかる。

もし仮に、この一連の脱出行に成功していなかったならば、友人の忠告は現実味を帯びたものとなっていたかもしれない。なぜなら、国家安全保障ドクトリンに基づき、米国中央情報局（CIA）が暗躍する左翼弾圧のため

の秘密ネットワークが組織され、その実行計画「コンドルプラン（コンドル作戦とも呼ばれる）」[89] の魔の手が伸びていたからである。

この国境を越えてコノ・スールに張り巡らされた準軍事・準警察組織は、ウルグアイのトゥパマロスのみならず、チリの革命的左翼運動（MIR）、アルゼンチンのモントネーロス（ペロニストゲリラ）や人民革命軍（ERP）など多くの武装グループの監視や捕縛を進め、次第に人権侵害に異を唱える政治家や知識人たちをもターゲットとするようになっていた。この作戦は先述したアルゼンチンのイサベル・マルティネス・デ・ペロン政権の転覆などにも関与しており、1970 年代半ばから 1980 年代初頭にかけて、ウルグアイのフアン・マリア・ボルダベリー、アルゼンチンのホルヘ・ラファエル・ビデラ、チリのアウグスト・ピノチェト、パラグアイのアルフレド・ストロエスネル、ボリビアのウゴ・バンセルなどの軍事政権を支え、拉致・拷問・虐殺・幼児誘拐[90] などの人道に対する罪を犯している。

特に、ベネデッティのアルゼンチンからの脱出が間一髪であったことを示す事件がある。コロラド党から離脱して拡大戦線の結党に関わった政治家セルマール・ミケリーニ（1924-1976）とは、亡命先のブエノスアイレスでも政治談議や会食を通して親交を深めていたが、1976 年 5 月にこのコンドル作戦の餌食となり殺害され、彼の亡骸が路上に遺棄されたのである。まさにウルグアイ人亡命者が他国で標的にされた象徴的な事件[91] であった。ハバナの短波放送でこの訃報を聞いたベネデッティの胸中は張り裂けんばかりであったろう。

トリプル A が作成した脅迫対象者名簿に掲載された人物は相当数に上ると言われ、その中には 15 人の外国人名簿も存在し、その筆頭にこのミケリーニの名が記されていた。そして、7 番目にリストアップされていたのがベネデッティであった。いかに危険な状態だったかが、これからも推測できる。同月ミケリーニの亡骸がモンテビデオに戻った際には、厳しい軍政下にありながらも、ベネデッティが捧げた追悼詩「セルマール」[“Zelmar”] が回読されている[92]。

一方、軍事クーデター後にウルグアイからの脱出に遅れたフアン・カル

ロス・オネッティは、1973 年『マルチャ』主催のコンクール審査員の一人として、猥褻で反軍的な短編小説[93]を最優秀賞に選定した廉で投獄され、釈放後の 1975 年にスペインへ亡命していた。同じく、編集長のカルロス・キハーノも投獄され、釈放後はアルゼンチンを経てメキシコへ亡命し、『マルチャ』は 1974 年 11 月をもって廃刊に追い込まれていた。

これまでのキューバ滞在とは違って、今回は亡命という覚悟を強いられたものであったため、ベネデッティには重苦しさがのしかかっていた。さぞかしラテンアメリカ各地に根を張る軍事独裁の脅威を暗澹たる思いで見ていたことであろう。このような包囲網をかいくぐり、安住の地を求めてペルーからキューバへ行くことを決意したのは、やはりアイデエ・サンタマリアをはじめとする多くの友人の存在が大きかった。こうしてキューバへ亡命してから 1980 年スペインのパルマ・デ・マジョルカに移るまでの約 4 年間、カサ・デ・ラス・アメリカスの評議会で働くことになる。当時の思い出を後年ハバナ・ラジオ局のインタビューで次のように語っている。

> **「亡命中の数年間、カサ・デ・ラス・アメリカスで働くことは私にとって名誉なことだった。とても有能な組織で、チームで様々な問題の解決にあたる場所だったからだ。グアテマラ人作家のマヌエル・ガリチを除けば、すべてキューバ人で構成される幹部会をまとめ、キューバにおいてどのように文化組織が機能するのかを内部から学んだのである」**[94]

この期間ハバナから約 15km 離れたキューバ東部の海沿いのアラマールに住み、バスと徒歩で片道約 2 時間かけてカサ・デ・ラス・アメリカスの仕事場まで通っていた[95]。住居は一般市民の動員による編成チーム「ミクロ・ブリガーダ」によって建設された亡命者用の無料アパートで、家具、冷蔵庫、テレビ、ラジオ、食器付きの 8 階の部屋が提供された。ここでは、ラテンアメリカ諸国、特にウルグアイからの亡命家族を多数見かけている。親族あての手紙は友人に託すか、数か月もかかる郵送でやりとりしていたが、しばらくして妻ルスが親の介護を知人に任せて合流した。

1977 年 6 月にはブルガリアの首都ソフィアで開かれた国際作家会議に

出席して、「平和への厳しい道のり」と題する演説を行った[96]。「軍政に対する自由・平和のための闘いでは作家や芸術家たちも象牙の塔に籠って無傷ではいられず、たとえ微力であっても、真実を覆い隠そうとする帝国主義に騙されないよう大衆を啓蒙するという役割を果たさなければならない」と呼びかけた。またこの年には、詩集『家とレンガ』[*La casa y el ladrillo*]と短編集『ノスタルジアの有無』[*Con y sin nostalgia*]を発表している。後者に含まれている軍政批判の色濃い三作品については第3章で取り上げる。

1978年には新たな活動領域を見出し、アルゼンチンやフランスに亡命していたダニエル・ビグリエッティと「二つの声で」[*A dos voces*][97]という初のリサイタルをメキシコシティーで開いた。彼のギター演奏に合わせてベネデッティが詩を朗読するといったコラボレーションを実現させ、その後も二人でデンマーク、オランダ、スペイン、アルゼンチン、キューバなど各地で公演活動を続けるようになる。

1979年のキューバは革命20周年にあたり、第6回非同盟諸国首脳会議の主催国でもあった。この頃のベネデッティの関心はキューバ独立に命を懸けた英雄であり、キューバ革命の根本精神と崇敬されるホセ・マルティ(1853-1895)に向けられ、汎アメリカ主義や反帝国主義の観点から彼に関する研究に没頭していた。ウルグアイ駐米領事を一時期任じられていたマルティとウルグアイ外交官エンリケ・M・エストラスラス(1848-1905)[98]との交流を調べる過程で、彼の思想の中にウルグアイが真の自由を得るために必要な祖国愛を強く感じていたからであった。「マルティとウルグアイ」[“Martí y el Uruguay”]という評論[99]がその研究成果の一つである。

そして、ベネデッティはニカラグアを訪問する。7月にサンディニスタ民族解放戦線(FSLN)の武力革命が起き、大統領アナスタシオ・ソモサ・デバイレが米国へ亡命し、43年間に及ぶソモサ体制が瓦解したのを自分の目で確かめるためである。すでにキューバで親交を結んでいた詩人で「解放の神学」の司祭、そしてサンディニスタ政権で文化大臣に就任したエルネスト・カルデナルの住居に滞在し、彼がニカラグア湖のソレンティナー

メに設立していた芸術・文化コミュニティーを視察している。

またこの年には、拷問者と被拷問者との心理戦を描いた戯曲『ペドロと大尉』［*Pedro y el capitán*］と詩集『日常』［*Cotidianas*］[100] を発表。この『ペドロと大尉』は刊行前からすでにカラカス、ハバナ、ボゴタ、キト、マドリードなどで上演されていたが、高い評判を得るやたちまち各国語に翻訳されている。一方の『日常』は、他者との信頼関係を育みながら共に避けられない死と闘う日々の中で、一瞬一瞬の生きる喜びや先への希望を見出すことを表現した作品であった。

このようにキューバを拠点として過ごしていた4年間も終わりに近づいていた。ウルグアイにいる家族や同胞と連絡を取り合う不便さに加えて、悪化する喘息疾患によって医師から湿気の多いキューバを離れるよう勧められたという理由などが重なり、以後用事があればしばしばキューバを訪問することはあっても、次なる亡命地で活動の幅をさらに広げようと決意する。そして、自分を温かく迎え入れてくれたことに感謝し、恩人アイデエ・サンタマリアに別れを告げる。当初、メキシコのクエルナバカで妻ルスと一緒に新居を探してはみたものの、最終的には友人のいるスペインのパルマ・デ・マジョルカへ二人で移り住むことに決めた。フランコ総統の死後、民主主義の道を進んでいたスペインには数多くのウルグアイ人亡命者がいて心強かったとはいえ、60歳にもなろうかという年齢でのさらなる転居である。

これには、メキシコでヌエバ・イマヘン社（Nueva Imagen）を経営し、ベネデッティの作品を手掛ける亡命アルゼンチン人編集者ギジェルモ・ウィリー・シャベルソン（1945-）の援助も少なからずあった。アリアンサ（当時）、ビソール、アルファグアラの各社に出版契約の口利きの便宜を図ってくれていたという。また、コロンビアのテレビ局から支払われるドラマ化された小説『休戦』の放映権料を当て込み、到着当初の借家暮らしを切り上げ、安価で購入できた中心部のアパートに移り、島での生活不安が解消している。当時、政治的活動に加担しているという理由でウルグアイではもちろんのこと、アルゼンチンやチリでも著作権が凍結されていた

ために資金繰りも大変だったようだ。パスポートについてはウルグアイ当局が更新に応じないため、これまでも各地を移動する際には、弟ラウルの手続きを通して入手していたイタリア政府発給のパスポートを利用していた。父方の家系がイタリア移民であったことが幸いしていたと言える。

第 4 節　祖国帰還と晩年

スペインのパルマ・デ・マジョルカでの生活を始めた矢先の 1980 年 7 月、ベネデッティの許に突如一本の電話が入った。長年うつ病を患っていたアイデエ・サンタマリアが自宅でピストル自殺したという悲報である。未来への希望を照らす革命を唱導してきたはずの彼女の自死は国内外に反響をもたらし、特にキューバ政府に敵対する者たちの格好の批判材料となった。数年前の自動車事故の後遺症や肺癌などもその理由に挙げられているが、真相は彼女がフィデル・カストロに宛てた手紙に秘められたままであるという。親身に接してくれた彼女の支えとはなり得なかったことに、得も言われぬ後悔の念を抱いたことは想像に難くない。と同時に、自分の死に場所はどこであろうかと思い巡らした時、その場所は間違いなく祖国ウルグアイであったのではないだろうか。

仕事に没頭することで少しでもその悲しみから逃れるかのように、10 月から小説『角の壊れた春』［*Primavera con una esquina rota*］の執筆に取りかかり、1 年かけて上梓した。ウルグアイの軍政によって引き裂かれた家族を描いた作品であり、その内容は第 3 章第 6 節で取り上げる。また、この作品と併せて、1981 年に先述のヌエバ・イマヘン社から詩集『亡命の風』［*Vientos del exilio*］を発表している。亡命者の悲哀や孤独感がしんみりと伝わってくる詩集であり、これはまさにヤシ（palma パルマ）の木を揺らす島の風を肌に感じながら自身の心情を詠い上げたものであった。

さて、祖国ウルグアイでは新たな政治状況の変化が見られた。アパリシオ・メンデス政権では、社会主義や共産主義を標榜する政党をはじめとする左派陣営の壊滅を目論み、軍が事前承認する形で自分たちの息のかかっ

た大統領を選べるような新憲法を準備して、1980 年 11 月に国民投票を実施した。しかし、軍の思惑通りに事は運ばず、その結果は大方の予想を覆して、57.8% の反対多数で否決された[101]。マジョルカ島にいたベネデッティも BBC 短波放送のニュースに耳を傾けて、これは民衆一人一人の政治的自覚の勝利の賜物であると感涙にむせび、希望の光に包まれた[102]。

1980 年代の米国では、人権上の問題からウルグアイ軍政への支援を停止していた大統領ジミー・カーターに代わり、ロナルド・レーガンがソ連をはじめとする共産主義陣営への圧力強化のため、「レーガン・ドクトリン」に基づく覇権主義的な対外政策を推し進めていた。それに対抗する形で、ラテンアメリカの左翼知識人たちは各地で連帯の輪を広げる活動を展開している。ベネデッティは、1981 年 9 月にキューバで開かれた数百人規模の「我がアメリカの人民主権を求める知識人会議」に参加したり、1982 年 3 月にはマナグアを拠点としたニカラグアのサンディニスタ支援の輪に加わったりした。前者にはガルシア・マルケス、エルネスト・カルデナル、エドゥアルド・ガレアーノらラテンアメリカの作家ばかりでなく、スペインのアントニオ・サウラ（1930-1998）、マヌエル・バスケス・モンタルバン（1939-2003）、ホセ・アグスティン・ゴイティソーロ（1928-1999）らが集まり、後者には同じくガルシア・マルケスのほか、フリオ・コルタサル、チリ人画家ロベルト・マッタ（1911-2002）、ブラジル人シンガーソングライターのシコ・ブアルキ（1944-）らが集まった。また、同じ 1982 年には、文化功労者としてキューバの革命宮殿でカストロから直接フェリックス・バレラ勲章を贈呈されている。同じ受章者であるガルシア・マルケス（同年ノーベル文学賞受賞）の隣で笑みを浮かべている写真姿は印象的である。さらには、国内外の作家に関する文芸批評をまとめた評論『判断力の練習』［*El ejercicio del criterio*］[103] が刊行された。

この 1982 年には、英国と軍事政権下のアルゼンチンとの間でフォークランド紛争（マルビナス戦争）が勃発し、敗北したアルゼンチンでは翌年、ラウル・リカルド・アルフォンシン大統領の下で、ウルグアイよりも一足先に民政移管が達成されている[104]。また、亡命の地スペインでも政局に大

きな変化が生じた。スペイン社会労働党（PSOE）が選挙に勝利し、フェリーペ・ゴンサレス率いる左派政権が誕生したのである。革新の気運が盛り上がる中で、ベネデッティはこの年の10月からの約2年間、毎週月曜日『エル・パイス』紙で、主にラテンアメリカをテーマにした社説欄を担当するようになる[105]。その結果、打ち合わせやインタビューの頻度が増したため、翌年5月末、パルマ・デ・マジョルカからマドリードに移り住むことになった[106]。今回の引っ越し費用には、コロンビアのテレビ局によってドラマ化された小説『火をありがとう』の放映権料を充てている。島よりも乾燥している首都は、喘息を患う者にとってさらに好条件であっただろう。

また、近所には亡命中のフアン・カルロス・オネッティが住んでおり、ウルグアイで暮らしていた時よりも会う機会が増えていた[107]。

「オネッティとは良好な友好関係でしばしば会っていた。マドリードではお互い近くに住んでいたが、彼は出不精で、私に来てくれというものだからこちらから会いに行ったものだよ。亡命中の方がウルグアイにいた時以上に親しい間柄だった。ウルグアイでの関係が悪かったということではなく、ほとんど会っていなかったからね」[108]

このようにジャーナリズムの最前線で国際情勢をキャッチしながら、祖国の趨勢を見守り続けていたベネデッティだったが、ある人物との論争が世間の注目を集めることになった。それは、1984年の1月から6月までの期間にわたりスペインの『エル・パイス』紙上で繰り広げられた、かつての盟友バルガス・リョサとの論戦である。キューバ革命以来、16歳という年齢差がありながらもお互いに肩を並べて歩きながら談笑する間柄だったが、パディージャ事件をきっかけに革命を巡る立場や認識の違いから袂を分かつようになり、以後それぞれの信ずる道を歩んでいた。この応酬合戦は、過去の出来事を振り返りながらラテンアメリカの知識人たちの思想的立場の相違を知る上での参考となるため、第2章第3節で詳しく取り上げることとする。

その後のウルグアイでは、国民投票で新憲法案に「NO」を突きつけられたアパリシオ・メンデス大統領の退陣を受けて、グレゴリオ・アルバレス

大統領が就任する。彼は伝統政党であるコロラド党、国民党との対話に臨む一方で、依然として左翼陣営に対する警戒を緩めることをしなかった。しかしながら、国家経済は対外債務の肥大化によって益々悪化の一途をたどり深刻な不況に陥ったため、不満を持った国民は 1983 年 11 月 27 日、民政移管を求めて 40 万人規模の前例のない大行進に打って出る。この大衆運動に抗し切れなかったアルバレスはついに、翌年の大統領選実施を約束せざるを得なかった。

その下準備として 1984 年 8 月には軍部とコロラド党、拡大戦線、市民連合との間で対話がなされ、民政移管への合意（海軍クラブ合意）に至った。その内容は 11 月の選挙における条件として、独裁政権下で行われていた過去の軍による犯罪を一切免責にするというものだった。結果は、国民党（海軍クラブ合意に不参加）に勝利したコロラド党が第一党となり、フリオ・マリア・サンギネッティが移行期の大統領として選出される。このような政変の中、ベネデッティは釈放されていた拡大戦線のリーダー、リベル・セレグニとマドリードで劇的な再会を果たし、今後の政局のなりゆきと帰国のタイミングについて確認し合った。

このセレグニに捧げる作品として、マジョルカ島で執筆した『地理』［*Geografia*］をこの年に発表している。この作品は短編一つと詩一編を 1 ユニットとし、地理学の用語（例えば、浸食・子午線・湿地・氷河など）をタイトルに当てはめ、全 14 ユニットで構成したものである。冒頭の「そう言われているね」［“Eso dicen”］のような、望郷の念と喪失感がないまぜになった心の不安定さを抱える亡命者たちに寄り添った詩もあれば、深刻さの漂う状況下にありながらも意外性やユーモアの要素を忍ばせた短編も織り込まれている。例えば、「ジュールとジム」［“Jules y Jim”］[109] という短編では、ベネデッティ自身も体験したような、脅迫電話につきまとわれる主人公の底知れぬ恐怖心が巧みに描かれている。

1985 年には、民政移管への扉が開かれたことを知った多くの亡命者たちが帰国の準備を始め、ついにベネデッティも 4 月、65 歳を前にして祖国の地を再び踏みしめた。「異邦人」としての約 11 年半の亡命生活に終止

符を打つことができ、親族や仲間の待つモンテビデオに戻れる喜びはひとしおであっただろう。収監されていた多くの政治囚[110]も3月に承認された恩赦法（No.15.737）に基づき次々と釈放されていき、ラウル・センディック[111]、マウリシオ・ロセンコフ、エレウテリオ・フェルナンデス・ウイドブロ（通称ニャト、1942-2016）[112]らとの再会も果たすことができた。彼らは、逆説的な名称を持つ「自由刑務所」（Penal de Libertad）などの独房で約12年間も耐え抜いた、「人質」と名付けられた代表的なメンバーだった。もし、トゥパマロスの活動が再開されれば処刑される運命にあったのである。

その一方で、祖国の民政移管を見ることなく亡くなった者もいる。その一人が、『マルチャ』編集長であったカルロス・キハーノであり、1984年6月にメキシコの地で客死した。キハーノとは過去の一時期、意見の対立で不和が生じていたことはすでに述べたが、お互い亡命者の身になってからはたびたび顔を合わせるほどに良好な関係を結んでいたようで、彼の亡くなる20日前にもメキシコで会っていたという。彼の遺志を受け継ぐかのように、ベネデッティは早速、『マルチャ』の後継紙と言われる週刊新聞『ブレチャ』の編集に加わる。編集長は序章でも紹介した『マルチャ』時代からの友人ウゴ・アルファロである。

そして、帰国直後の5月2日モンテビデオで開催したダニエル・ビグリエッティとのリサイタルは熱狂をもって人々に迎えられたが、いざ目の前にする祖国はいろいろな面で以前とは違ったものに映り、順応していく難しさに複雑な心境を抱いたと語っている。このような祖国帰還者の心理状態については、第3章第7節で取り上げたい。

政局の大転換としては、内政面において報道の自由、労働組合や共産党の合法化などが実現し、外交面において革命政権であるキューバやニカラグアとの緊密な関係構築が図られていった。他方、軍政期の人権侵害に対する扱いはその後どのように推移したかというと、まず1986年12月に公約通りサンギネッティ政権下で、恩赦を与える「免責法」（「失効法」とも言われる）が議会承認された。しかしながら、この「免責法」に対する

国民の反発は強く、憲法で規定されていた有権者の 4 分の 1 を超える約 55 万人の署名が集まり、その法の是非を問う国民投票の実施が 1989 年 4 月と決定される。ベネデッティはエドゥアルド・ガレアーノと共にこの国民投票委員会のメンバーとして尽力したが、「免責法」に賛成 57%、反対 43% という結果に終わり、この意外な敗北を受けた左翼陣営は次の大統領選挙での巻き返しに期待をかけなければならなかった[113]。

さて、帰国が実現して以降もスペインとの深い関係は続く。喘息のために湿気の多いウルグアイの冬季（6 月から 9 月）を避け、乾燥したスペインに滞在するといった北半球と南半球を使い分けた二股生活を続けることになる。滞在中は、亡命者支援の感謝の印としてユネスコの友好クラブに出席したり、バエサにあるアンダルシア国際大学アントニオ・マチャードキャンパスでの夏期講座講師を引き受けたりして、スペインでもその知名度は確実に高まっていった。毎年春にマドリードで開かれるブックフェアにも顔を出し、サインを求める読者との交流を楽しむようにもなる。

1986 年 1 月から再び『エル・パイス』紙に月一本ペースで文芸記事を中心に寄稿し始めた。また、『ランダムな質問』［*Preguntas al azar*］（1986 年）[114]、『昨日と明日』（1987 年）［*Yesterday y mañana*］、『この世の歌』（1988 年）［*Canciones del más acá*］ などの詩集を続けて発表し、多くのアーティストたちに詩を提供する[115]。この数年間は、審査員としてサン・セバスティアン国際映画祭に招かれたり、カナリア諸島でスペインのカミロ・ホセ・セラ（1916-2002）が主宰した作家会議に参加したり、さらにはメキシコ、ブラジル、アルゼンチン、キューバに滞在したりと多忙であったが、1988 年に旅先で母危篤の報を受けた際には、急遽ウルグアイに戻って最後を看取っている。

1989 年には短編や詩などの寄せ集めである雑記集『うっかりと率直』［*Despistes y franquezas*］を発表し、短命に終わったマドリードの日刊紙『インデペンディエンテ』［*Independiente*］（1989 年創刊、1991 年廃刊）で社説を担当する。また、キューバ国家評議会からこの年制定されたばかりのアイデエ・サンタマリア賞第 1 回受賞者に選出され、4 月 28 日の表彰式に

臨んだ。一番彼女と親交が深かったとの理由からであった。

偶然にも同日遠いパリの地で、同じく親交の深かったトゥパマロスのリーダー、ラウル・センディックが亡くなっており、後日モンテビデオで葬儀が営まれた。先述したように銃撃戦で顎を負傷して以来、重度の神経疾患に苛まれていた上に、長年の獄中生活で健康を損ねていたからである。「数々の過ちも犯したであろうが、他の革命家とは違って、常識とバランス感覚を持った謙虚で裏表のない性格の闘士であり、ウルグアイの歴史に残り得る忘れがたい人物である」と、彼の思い出を振り返っている。

11 月には国民党のルイス・アルベルティ・ラカジェが大統領選を制し、拡大戦線は再び第三政党に甘んじることになるが、のちに大統領を二期務めることになる医師のタバレ・バスケスが 1990 年からモンテビデオ市長の職に就き、党勢の拡大を窺っていた。

1990 年 5 月、「ラテンアメリカ現代詩の特徴と危機」と題する講演会を開くために初めてスペインのアリカンテ大学を訪問した。それ以降次第に緊密な関係を結んだ同大学を拠点としてラテンアメリカ文学の普及に努め、各地で講演会の開催や講座の担当をしていくことになる。また、カディス出身の詩人で共産主義者のラファエル・アルベルティ（1902–1999）[116] と一緒にコンプルテンセ大学の夏期講座にも関わっている。そして、11 月にはマドリードで開かれたアルファグアラ社創立 35 周年記念パーティーで、のちにポルトガル初のノーベル文学賞に輝く、キューバ革命擁護派のジョゼ・サラマーゴ（1922–2010）[117] とも親交を深めた。

1991 年には 2 年ぶりにキューバを訪れてカストロと会談したのち、妻とブエノスアイレスに滞在して、メランコリックな 80 以上の詩からなる『バベルの孤独』［*Las soledades de Babel*］と、評論『現実と言葉』［*La realidad y la palabra*］を発表した。現実問題に立ち向かう際の言葉の有用性を説くこの評論は、上記のコンプルテンセ大学の講座内容をまとめたものである。

続く 1992 年には、自身の少年期を主な題材にしたノスタルジックな小説『コーヒーのかす』［*La borra del café*］[118] をウルグアイのアルカ社から発

表。そして、5 月に封切られたエリセオ・スビエラ監督によるシュールレアリスム映画「心の暗黒面」［*El lado oscuro del corazón*］（カナダ・アルゼンチン共同制作）に船長役としてカメオ出演し、自らの詩をドイツ語で朗誦するなど映画批評にとどまらないチャレンジ精神旺盛なところを見せている。また、この年は新大陸発見 500 周年にあたり、スペイン各地で記念イベントが開かれたが、「収奪されたラテンアメリカ」からすれば一方的な見方であり、両大陸間での相互理解が不足しているとして、エルネスト・カルデナルやラファエル・アルベルティらと結束して真っ向からそのような動きに反対を表明している。

1993 年には、帰郷以降に様々な出版物へ寄稿していた記事をまとめた評論『世紀末の困惑』［*Perplejidades de fin de siglo*］を発表したり、スペインのアリカンテ大学において「文学と都市空間」というテーマで討論会を開催したりしている。

1994 年には、詩集『在庫』（1963 年）の続編となる『在庫 2』［*Inventario Dos*］を発表。これは 1986 年から 1991 年までの期間に創作された詩を編んだものである。また、それまでの短編を網羅した『短編全集』［*Cuentos completos*］がアルファグアラ社から出版された。この作品の配列は執筆年順ではなく、テーマ別にまとめられている点に特徴があり、作品の意図がよりわかりやすくなっている。序文ではメキシコ人作家ホセ・エミリオ・パチェコ（1939-2014）が、「あのモーパッサンのような作家でも高々 10 年程度の経歴であり、またラテンアメリカの短編作家でも二作品が精一杯なのに比べて、例外的に息の長い驚嘆すべき作家だ」と、その業績に賛辞を贈っている。

一方で、悲しい気持ちに打ちひしがれる知らせもあった。11 歳年長であり、尊敬の念を抱いていた無名時代からの知友フアン・カルロス・オネッティが数年間にわたる病床生活の末、5 月に亡くなったのである。小説『造船所』［*El astillero*］、『屍集めのフンタ』［*Juntacadáveres*］で知られるウルグアイを代表する作家であったが、民政移管後も祖国には戻らずにマドリードでその生涯を閉じた。

1995 年、ベネデッティは、彼がしばしば好む撞着語法[119]で名付けた詩集『忘却は記憶に満ちている』［*El olvido está lleno de memoria*］を発表した。そして、サレルノ、ナポリを回り、ベネチア大学では学生に向けて講演会を開くなど、イタリアの地でも歓待されている。

1996 年には、キューバの映画フェスティバルに行く前にメキシコシティーに立ち寄った際、メキシコで活動していたペルー出身の女性歌手タニア・リベルター（1952-）と知り合った。この出会いによって、ベネデッティの詩集『人生その括弧』［*La vida ese paréntesis*］とタニアの歌声が融合して生まれた同名タイトルの CD が制作される（1998 年発売、ジョゼ・サラマーゴの紹介文付き）。また、詩の朗読を披露したブックフェア会場では、サインを求めて長蛇の列ができるほどの人気ぶりで、メキシコでも多くのファンに愛されていたことがわかる。この年にはまた、亡命からの帰還をテーマとした小説『足場』［*Andamios*］がアルゼンチンで刊行された。

1997 年 5 月には、5 日間の日程でスペインのアリカンテ大学を会場にして「マリオ・ベネデッティ国際大会」が開催される。多くの研究者が分科会ごとにベネデッティの作品に関する研究成果を発表し合い、約 400 人の参加者が訪れた。講演会、本人による詩の朗読、映画上映、ダニエル・ビグリエッティとのコンサートなどもプログラムに盛り込まれ、ベネデッティを丸ごと堪能できる企画であった[120]。大会 4 日目には、アリカンテ大学名誉博士号の授与式も執り行われている。序章でも述べた通り、大会後には研究発表をもとにまとめた論文集『共犯による在庫』が同大学から出版されている。そして、1999 年には「マリオ・ベネデッティ　イベロアメリカ文学研究センター」が同大学内に設立された。

このような彼の功績に対する顕彰は、ガブリエラ・ミストラル（チリの女流詩人でラテンアメリカ初のノーベル文学賞受賞者）の名を冠した賞を受けた 1995 年頃から、亡くなる前年まで毎年のように行われている。その主なものを挙げてみると、スペインのレオン・フェリーペ賞（1997 年）、バジャドリー大学名誉博士号（1997 年）、キューバ・ハバナ大学名誉博士号（1997 年）、ソフィア王妃イベロアメリカ詩賞（1999 年）、ホセ・マルティ・

イベロアメリカ賞（2001 年）、モンテビデオ名誉市民（2002 年）、ウルグアイ共和国大学名誉博士号（2004 年）、メネンデス・ペラーヨ賞（2005 年）、フランシスコ・デ・ミランダ勲章（2007 年）、アルゼンチン・コルドバ名誉博士号（2008 年）などである。このことは取りも直さず、彼の文学的価値が人々の間で確実に認識されていった証である。

スペインのソフィア王妃から賞を受けた時の受賞挨拶では、「詩、それは世界の魂である」と多くの聴衆の前で力強く語っており、またホセ・マルティ・イベロアメリカ賞で得た賞金は、軍政による被害者の遺族で結成された「ウルグアイ人被拘禁者・行方不明者の母親と家族の会」へ寄付している。

この 1999 年のスペイン滞在期間中に、短編集『時のポスト』［*Buzón de tiempo*］と詩集『俳句の片隅』［*Rincón de Haikus*］を発表。この『時のポスト』所収の短編として、「19 番」［“El diecinueve”］がある[121]。これは、コンドル作戦で捕まえた囚人を飛行機から川や海に突き落としていたアルゼンチン海軍の残虐行為を題材にしたものである。一方、訪日の経験や日本語の知識はないものの、俳句へのチャレンジはフリオ・コルタサルやオクタビオ・パス（1914-1998）から影響を受けたものであり、形式上スペイン語での 5・7・5 の 17 音節で整えた、季語にこだわらない詩としての実験的試作であった。自身の感情や風景などを題材にとり、句数として 224 点が詠まれている。

80 歳を迎えた 2000 年には、マドリードで読み聞かせ、討論会、歌の披露、写真展示などベネデッティの功績を讃えるイベントが催され、愛好家たちに熱狂をもって迎えられた。喘息が悪化して入院していたこともあったが、21 世紀に入ってもなお執筆活動に衰えは見られず、『私が呼吸する世界』（2001 年）［*El mundo que respiro*］、『不眠とうたた寝』［*Insomnios y duermevelas*］（2002 年）、『在庫 3』［*Inventario Tres*］（2003 年）[122]、『自己防衛』［*Defensa propia*］、『いまだ存在する』［*Existir todavía*］（2004 年）、『別れと歓迎　84 の詩と 80 の俳句』［*Adioses y bienvenidas 84 poemas y 80 haikus*］（2005 年）[123] など、詩集をコンスタントに発表し続ける。短編の方では久しぶりに、

『私の過去の未来』［*El porvenir de mi pasado*］(2003 年) が刊行された。

2004 年に拡大戦線創設者のリベル・セレグニが亡くなったことは、ベネデッティにとってショッキングなニュースであったが、その 3 か月後の拡大戦線の選挙戦勝利によって翌年にはタバレ・バスケスが大統領に選出され、待望の左翼政権が誕生した。3 月の国会議事堂で行われた大統領演説に招待された数少ない列席者の中に、政権交代の瞬間を静かに見守るベネデッティの姿があった。軍政によって翻弄され命を落とした多くの友を思い、それまでの自身の苦難の道のりを振り返りながら新生ウルグアイの将来に期待を抱いていたに違いない。

2006 年には悲しい別れが訪れた。数年前からアルツハイマー病を患っていた妻ルスが 4 月に亡くなったのである。それを機に、マドリードの自宅に所有していた 6000 にものぼる膨大な蔵書や資料をアリカンテ大学の「マリオ・ベネデッティ　イベロアメリカ文学研究センター」に寄贈し、完全にスペインを引き払うことにした。押し寄せる孤独感に浸りながら、『歌わない人の歌』［*Canciones del que no canta*］という詩集を書き上げている。

2007 年には、軍政期に短期間勤務していたウルグアイ共和国大学において、ウルグアイを歴訪したベネズエラ大統領ウゴ・チャベスから、先述したフランシスコ・デ・ミランダ勲章が直接授与された。チャベスの両手が肩に添えられた時の写真には、控え目で幾分はにかんだ表情が捉えられている。この年には短編集『パリの話』［*Historias de París*］、雑記集『故意に生きる』［*Vivir adrede*］を発表した。

2008 年には、入退院を繰り返しながらも最後の作品となる詩集『自身の証人』［*Testigo de un mismo*］を発表。2009 年 5 月 17 日自宅で亡くなり、亡命期間中でもポジティブに支えてくれた妻ルスが待つ、モンテビデオ市南東ブセオ地区の中央墓地に埋葬された。享年 88 歳、奇しくもキューバ革命 50 周年にあたる年であった。遺作となった詩集『私に出会うための伝記』［*Biografía para encontrarme*］は翌年刊行された。

第 2 章　マリオ・ベネデッティの政治的スタンス

第 1 章では、ベネデッティの生涯を歴史的事象と作品創作の両面から時系列で記述してきた。そこで明らかになったことは、キューバ革命を機に作品の中に次第に政治性が反映されていったことであった。この章ではさらに詳しく彼の政治意識や政治姿勢を探るために、特に革命キューバへの思い、パディージャ事件との関わり、バルガス・リョサとの政治論争の三点を取り上げる。

第 1 節　革命キューバへの思い

フロリダ半島から目と鼻の先で起きたキューバ革命は、冷戦構造の中にあった全世界に衝撃を与え、特に米国にとっては地政学的脅威となった。ベネデッティが、1960 年代と 1970 年代のそれぞれの時期にキューバに滞在していたことは先に見てきた通りである。約 3 年間滞在した前者は、革命後の内部状況を自分の目でみたいという楽観的な気分に包まれていた時期であり、約 4 年間滞在した後者は、ウルグアイの軍事クーデター後の亡命という重苦しい気分を抱えていた時期であった。

キューバを自らの精神的支柱として終生一貫して擁護の姿勢を貫いており、そのきっかけとなったキューバ革命の衝撃を次のように語っている。

> **「1959 年という年は決定的だった。私だけでなく、すべてのラテンアメリカ人、左翼にとっても右翼にとっても。その年に力関係、物の見方、人間の態度を変えることが起きた。それがキューバ革命だった。･･･ヨーロッパの出来事に眩惑されていた我々知識人にとって耳を本気で引っ張られたような意義のあるものだった。その日は根本的に自分自身に向き合う必要性を感じ、その意味では、その時まで取ってきた態度に関して自己分析や自己批判をするまさに一つの段階が生じた。キューバ革命はまた、これまでとは異なる見方で私と祖国ウルグアイを結びつけるのに役立った。その結果、文学の中で占める順位に明ら**

かにある変化をもたらしたのである」[124]

このように、キューバ革命の意義は、ヨーロッパを意識していた者たちの目を自分たちのラテンアメリカに転じさせたことであると強調している。特に、祖国ウルグアイの現状に向き合い、文学者としての自分の足元をしっかり見つめることの必要性を痛感し、作品に政治的要素を取り込もうといった意識変革を触発してくれたものだったと、自身の革命的態度への影響を記している。

「キューバとは常に私にとって、とても重要な一つの単語であった。この国を訪れる前からも含めて、キューバ革命は多くのウルグアイ人にとって一つの警鐘をならすものであった。我々は揺さ振られた。なぜなら、米国の政治、経済、軍事、文化的圧力に何らかの方法で対峙しうる可能性を見たからであった」[125]

そして、革命的な人間の理想像を実感するために、肉体労働を意識してキューバ防衛委員会のメンバーとして夜警をしたり、2か月間動物科学研究所で初めての農牧業体験に参加してみたりした。炎天下でのジャガイモの収穫、アメリカ里芋のカット、トウモロコシの皮むき、家畜用スペースの建造、囲いの補修、畑の雑草取り、井戸掘りは48歳の体には相当堪えたようだ。夜間に読書をしてみたが、8、9時間の労働の後ではあまり読めず、頭脳を使うのは仲間とドミノゲームをするぐらいしかないと知って、こういう生活実態では文化が農村に浸透するのはなかなか難しいのではなかろうかと実感している。その時の体験から生まれた詩として、「畝」[“El surco”]がある[126]。

ケネディ政権下で1961年に提唱された「進歩のための同盟」のあおりを受けていたキューバではあったが、ベネデッティが滞在していた1968年は砂糖生産「1000万トン計画」に向かって総動員体制が敷かれ、国家全体が高揚感に包まれていた時期にあたる。結局、約850万トン止まりでこの目標値達成はかなわず、カストロ自ら1970年のモンカダ兵営襲撃記念日に理想主義の過ちを認める自己批判の演説を行うこととなった[127]。これに対して、ベネデッティも人的配置上の管理運営に誤りがあったのでは

ないかとその失敗の原因を探り、食糧難にも陥った大変苦しい年であったと述べている。しかし、それでも当時は、人民と共に低開発から立ち上がろうとするキューバ政府の気概を十分肌に感じていたのである[128]。

さらに、革命キューバに寄せる思いが人一倍強いのは、彼を取り巻く人たちとの信頼関係が大きく作用していると考えられる。特に三人の指導者、フィデル・カストロ、アイデエ・サンタマリア、チェ・ゲバラとの直接的・間接的な絆はいつも心に深く刻まれていた。

まずはフィデル・カストロの印象であるが、第1章で紹介したように1967年2月、他の作家らと彼を囲み、徹夜でざっくばらんに話し込んだ時のことを次のように述懐している。

「・・・知的で人当たりの良い、不屈であるが繊細な人物で、自国民のみならずラテンアメリカの人々の幸せを本当に願っている。・・・（我々作家たちは、）キューバの現状に違和感を覚えること、理解できないこと、ある意味で落胆していることに言及したが、各質問の真意を捉えて回答する能力、相容れない進言に対する受容的態度、ドグマに全くとらわれないところに感銘を受け、特にその率直さに印象付けられた。・・・」[129]

さらに時代は下って1995年10月、カストロがアルゼンチンで開催予定のイベロアメリカサミットに出席する際、ウルグアイに立ち寄るとの報道を受け、到着一週間前にベネデッティが発したコメントも残されている。

「カストロは今日、アメリカ大陸にとって最も重要な人物である」

「・・・知識、経験、バイタリティー、忍耐力、人生そのものを国民に奉仕する、彼のような政治家は見当たらない」

「（経済・政治分野では過ちがあったとしても）社会的分野、つまり保健衛生や教育分野での支援や保障においては過ちを犯していない」[130]

キューバ革命が昔日の面影となった20世紀末にあってもなお、他者から「カストロ主義者」と見られてもおかしくないほどに、キューバの最高指導者に対して敬意を抱き続けていたことがよくわかる発言である。

それでは、カサ・デ・ラス・アメリカスを率いていたアイデエ・サンタマリアについての印象はどうであろうか。

「・・・私はその評議会でキューバ人と盛んに議論していた。・・・その当時、革命を最も称賛する人物の一人アイデエ・サンタマリアとはとても仲の良い関係にあった。彼女とは一番議論したし、何回も私の主張はきっぱりと否定された。それなのに、時々彼女の言っていたことに沿って決定を下している自分に驚いたものだった。・・・」[131]

ベネデッティにとって良き理解者であり、常に刺激を与えてくれる存在だった。亡命者の身である自分を支え、カサ・デ・ラス・アメリカスでの仕事を任せてくれた恩人でもあり、お互いに革命路線に心血を注ごうとする深い信念で結ばれていた仲であった。先述したアイデエの急死を受け止めるまでにおよそ５年の歳月を要し、ようやく書き上げたのが次の追悼詩である。パルマ・デ・マジョルカの西に位置するゴミラ広場に隣接した借家で、一報を受けた時のショックを思い起こして詠んだ、「私は対岸にいた」[“Yo estaba en otro borde”]の一節は次の通り。

・・・
私は対岸にいた
救いを求める電話のベルが　三度うめいた
口ごもった　遠く離れた声
きのう死んだよ　アイデエが
繰り返されたその声
信じられないよ　たぶん
みんなが本当だと信じても

きのう死んだよ　アイデエが
聞き取りにくい耳元での声
五年前のあの広場
つらかったよ　その知らせ
突然いなくなるなんて　まったく

十四、五年　いっしょにいたのに
私の運命の中　日常の中にいたのに
アイデエよ　残された道なき道
アイデエよ　失った喘息の友
アイデエよ　あの家も　あなたのアメリカもなく
アイデエよ　やすらぎの場も　陽の光もなく
・・・[132]

不穏な知らせを予感させる、唸るような電話のベル。遠隔の地からかすかに聞こえる耳を疑う知らせ。心の整理がつくまでなかなか詠むことができなかったことが十分に察せられる詩である。アイデエも同じく喘息を患っていた。下線部はカサ（家）・デ・ラス・アメリカスを思い出しての表現であろう。

続いて、チェ・ゲバラをどのように見ていたのだろうか。ベネデッティがキューバを訪れた時には、ゲバラはすでにコンゴでのゲリラ活動のため出国しており[133]、直接の対話はなかったものの、先述したウルグアイ共和国大学での講演会で彼の雄姿を目に焼き付けており、弟のラウルと同じ8歳年下とはいえ、ベネデッティにとっても英雄の一人であった。ゲバラの唱える個人個人の意識変革を迫る「新しい人間」の創造に共鳴し、第1章で紹介した1968年1月のハバナ文化大会において、「革命のダイナミックな局面では、道を切り開くという点で行動的人間が知識人にとっての前衛であり、対して芸術、思想、科学研究の推進役を果たすという点で知識人が行動的人間にとっての前衛である」という主旨の演説[134]を行っている。そして、まさにゲバラこそが行動的革命家と理論的革命家の両資質・能力を十分に体現した特異な人物であると評するほどであった[135]。

一心に闘争を続けている理想的な革命的人物に尊崇の念を抱き、ゲバラを賛美する「チェの合図」[“Señas del Che”][136]を1967年4月のハバナで書き記していたが、その後まもなくウルグアイに戻っていたベネデッティに悲報が届く。レネー・バリエントス軍事政権打倒を目指して「ボリビア民族解放軍」(ELN-B)を率いていたゲバラが、10月にボリビア山中で

捕らえられ、処刑されたというフィデル・カストロのラジオ放送である。その衝撃は計り知れないものであり、「怒りで茫然自失」［“Consternados, rabiosos”］[137] という哀悼の詩を残している。おそらくこの怒りと悲しみで包まれた時、同じような喘息症状に苦しむ姿を重ね合わせながら自分はペンで闘い続けることを彼に誓ったのではないだろうか。

このようにウルグアイで軍事クーデターが起きる前のキューバ滞在においては、多くの友人との交流や信頼関係に支えられて、社会主義の行く末に明るい希望を抱いていた。しかしながら、クーデター後に亡命地となってしまったキューバ暮らしの中では、常に脳裏から離れなかったのが軍部独裁で虐げられている祖国ウルグアイの状況であった。温かく迎え入れてくれたキューバに感謝しつつも、キューバは所詮キューバであり、祖国ではないと自覚していた。それゆえ、ただ祖国の暴政を傍観しているわけにはいかず、燃えたぎる愛国心と使命感をもって、キューバ、スペインを拠点として抵抗の意志を示し続けるのである。

第 2 節　パディージャ事件との関わり

この節では、いくつかの参考文献を手がかりにして事件の経緯を整理し、ベネデッティがどのように事件を捉え、向き合っていたのかを探る。そのためには、週刊新聞『マルチャ』や書簡などでの発言を追い、実際の対応の流れを整理してみたい。

エベルト・パディージャは 1962 年に新聞『革命』［*Revolución*］の特派員としてモスクワに派遣されて以降、ソ連型社会主義の現実に失望し、さらにそれを模倣しているキューバに不安を覚えながら少しずつ詩集『ゲームの外で』を書き始めていた。キューバに一度戻り、外国書籍を扱う組織クバルティンペックス（Cubartimpex）の長に任じられたが、続く任地として貿易省代表の肩書でプラハへ派遣された。こうして、社会主義諸国やスカンジナビア諸国の情勢に接したことでカストロ体制への批判の目が益々養われていき、作品の方も 1966 年に帰国した頃にはだいぶ仕上がってい

たのである[138]。

そして1968年10月、キューバ作家芸術家連合（UNEAC）が毎年開催する文学コンクール「フリアン・デル・カサル賞」に出品した。フィデル・カストロは結果発表前からこの作品を問題視していたが、結局は外国人審査員を含めた5人全員一致の判定で、この『ゲームの外で』が選ばれた[139]。UNEAC側はその場では審査員の責任において決定されたものとして賞の授与を認めてはいたが、手続き上はよしとしてもイデオロギー上は疑義ある望ましくない作品であるとした。なんとも後味の悪い判定結果であった。

規定の賞金や副賞のモスクワ旅行は与えられないまま、とりあえずこの作品は出版される運びとなったが、カストロ以下革命指導部の考えに沿ったUNEACの11月の声明に基づき、授賞には不同意であるとの異例の付帯意見が序文に掲載された。それと同時に、革命軍機関誌『ベルデ・オリーボ』［*Verde Olivo*］がパディージャに対する激しい攻撃を展開し、ついに反革命的作品の烙印を押されるに至ったのである。併せて、演劇部門で受賞したアントン・アルファトの戯曲『テーベに反抗した7人』［*Los siete contra Tebas*］も、フィデルとラウルのカストロ兄弟を揶揄しているのではとの疑いをもたれ、反革命的作品の扱いを受けた。

このように体制への批判的な動きに対してキューバ政府は非常に神経をとがらせていたが、その姿勢を物語るものとしてよく引き合いに出されるのが、次のフィデル・カストロの演説である。表現の自由と機会に関して芸術家や知識人に向けて発した1961年の言葉、「革命内部のものはすべてよし、革命への反対は認めず」である。つまり、革命側につくものはすべて正しく、反革命的態度は全くの誤りだという、白か黒かの単純かつ恣意的な判定基準が定式化されていたのである。

実際に、このタイトル「Fuera del juego」からしても、「ゲーム」（juego）を「革命」（revolución）と置き換えてみるならば「革命の外」とも読み取れ、いかにも革命に参加していないというニュアンスを醸し出す挑戦的なものであったし、当局からすれば所収のいくつかの詩は集団主義よりも個人主義に傾斜し、革命精神に水を差す雰囲気が漂っているように感じ取

れるものであった。

さらに、その背景にある事象もしっかり押さえておかなければならない。1968 年は、内政面では砂糖生産「1000 万トン計画」に向けて国民の一致団結が求められ、外交面ではソ連軍のチェコスロバキア侵攻を巡って社会主義諸国の結束が強調された年であった。そのため、革命が目指す歴史的進展性に反するものは一切許されないという状況下では、パディージャの作品は革命指導部の路線を逆なでするものでしかなかった。

この作品の扱いを巡って、バルガス・リョサをはじめ数名の知識人たちはアイデエ・サンタマリアに対してパリからの電報で、カサ・デ・ラス・アメリカス支持を表明しつつも、「中傷に満ちた告発に落胆している」と懸念を示すメッセージを送った。しかし、まだ双方共に腹の探り合いのような状態で、一線を越えた言葉のやりとりまでには達していなかった[140]。

その後、火種を残したままパディージャの言動は監視の対象となっていたが、抜き差しならぬ事態を招くきっかけとなったのは、1970 年 12 月に在キューバ・チリ代理公使としてアジェンデ政権から作家ホルヘ・エドワーズが派遣されてきたことであった。キューバの革命政権に期待を寄せる彼であったが、身内に保守派を抱えたブルジョア知識人と目されていた上に、すでにパディージャと親交を結んでいたがために、赴任当初からキューバ政府に冷遇されていた。そして、パディージャ自身からも「何も話すな。誰も信じるな。私のこともだ。その気になれば私からだって情報を引き出せる連中だから」と忠告を受けていた[141]。

そのような重苦しい空気の中、パディージャが 1971 年 1 月の UNEAC 主催の朗読会で詩集『挑発』[*Provocaciones*] を得意満面に披露したことや、フィデル・カストロを揶揄しているのではないかとされる小説『私の庭で英雄たちが草を食む』[*En mi jardín pastan los héroes*][142] をスペインで出版しようと計画したことが、完全にデッドラインを踏み越えた策動として当局に見なされ、3 月 20 日朝突然逮捕された。一方のエドワーズはその依頼を受けていたとの理由で「ペルソナ・ノン・グラータ」扱いとなり、あわただしい引っ越しの最中であった 21 日深夜、カストロから呼び出され、

日をまたいで約 3 時間にわたって対峙する[143]。そして 22 日、当初の予定通りキューバを後にして次の任地であるパリ大使館へ向かった[144]。

この逮捕劇に対して真っ先に反応したのが、メキシコのペンクラブのメンバーであった。4 月 2 日、サルバドール・エリソンド、ビセンテ・レニェーロ、カルロス・フエンテス、オクタビオ・パス、エドゥアルド・リサルデ、マルコ・アントニオ・モンテス・デ・オカ、ホセ・エミリオ・パチェコ、カルロス・ペリィセール、ホセ・レブエルタス、フアン・ルルフォらがメキシコの『エクセルシオール』[*Excelsior*] 紙において、革命路線は支持するとしつつも表現の自由からは納得いくものではないとの反対表明を出し、カストロに遺憾の意を伝える手紙を送った[145]。

その 7 日後、フランスの『ル・モンド』[*Le Monde*] 紙はカストロが知識人との関係を破壊していると派手に論じ、当時パリにいたフリオ・コルタサルとフアン・ゴイティソーロが中心となって作成したカストロ宛ての抗議文を掲載した。

「下記に署名した者たちはキューバ革命の主義や目的に連帯する者たちですが、この書簡を送り、詩人であり作家であるエベルト・パディージャの収監による我々の不安を表明し、その逮捕が生み出した状況の再検討を求めます。・・・チリでの社会主義政権樹立、そしてペルーやボリビアでの新しい状況によって、米帝国主義によるキューバに課せられた犯罪的封鎖を容易に断ち切れる現在、革命内部で批判する権利を行使してきた知識人や作家たちに対して抑圧的な方法を使用することは、全世界の反帝国主義勢力の間で、そして特にラテンアメリカにおいて、キューバ革命を象徴かつ旗印とする人々に対する極めて否定的な反響をもたらすだけであります。我々の訴えに注意を払っていただくことに感謝しつつ、シエラ・マエストラでの戦いを呼び起こす原理原則、カストロ首相やチェ・ゲバラ司令官はじめ他の多くの革命指導者たちの言葉や行動を通してキューバ革命政府が何度も述べてきた原理原則への、我々の連帯を再確認するものであります」[146]

署名者 33 人の内、先の発起人を除く主な顔ぶれは、ジャン・ポール・

サルトル、シモーヌ・ド・ボーヴォワール、イタロ・カルビーノ、マルグリット・デュラス、アルベルト・モラビア、オクタビオ・パス、カルロス・フランキ、カルロス・フエンテス、ホルヘ・センプルン、ルイス・ゴイティソーロ、マリオ・バルガス・リョサ、ガブリエル・ガルシア・マルケスらであった[147]。

パディージャによる4月27日のUNEAC本部での自己批判、続く30日のカストロの激高した反論演説を受けて、5月4日にバルセロナの自宅でバルガス・リョサが中心となって作成した二通目の抗議文は倍近くの署名を集めて、20日付で直接カストロに送り付けられた。その文面には、キューバ革命も結局はスターリニズムに堕する道を歩むのではないかという不安が示され、一通目よりも厳しい言葉が並んだ[148]。

「私たちはあなたに対して、恥ずかしさと怒りを伝えるのが義務であると思っています。エベルト・パディージャが署名した哀れな告白文は、革命の合法性と正当性を否定するやり方で引き出されたものでしかあり得ません。パディージャ自身や彼の仲間ベルキス・クサ、ディアス・マルティネス、セサル・ロペス、パブロ・アルマンド・フェルナンデスらが自己批判という痛々しい茶番に屈したあのUNEAC主催の行事で見られた通り、馬鹿げた告発と常軌を逸した主張を伴ったその告白の内容と形式は、スターリニズム時代の最も下劣な時期、出来合いの判定、魔女狩りを思い起こさせるものです。人間尊重や解放闘争の模範と思えるようなキューバ革命を初日から擁護してきたと同じくらいの熱情をもって、教条的な反啓蒙主義、外国文化排斥、社会主義諸国にスターリニズムを課す抑圧システムを回避するようキューバ政府に勧告します。・・・私たちは、キューバ革命が社会主義の中の一つのモデルであると一時期思わせたところに立ち戻ることを希望します」

また別途、バルガス・リョサは個人的に5月5日カサ・デ・ラス・アメリカスのアイデエ・サンタマリアに以下の書簡を送っている。

「私は1965年以来所属していたカサ・デ・ラス・アメリカス雑誌委員

会に辞表を提出いたします。そして、この前キューバを訪れた時に約束した1月の講義には行かないと決めたことをお伝えします。お分かりだと思いますが、このことは、フィデルが我々ヨーロッパで暮らすラテンアメリカの作家たちを激しく非難し、キューバ入国を無期限禁止にした演説の後で私のできる唯一のことであります。エベルト・パディージャの状況をはっきりさせるよう求めた我々の手紙がフィデルをそれほどいらつかせたのでしょうか。なんとも時代は変わってしまったのでしょうか。4年前彼と共に過ごしたあの夜をとてもよく思い出します。その時にはフィデルも喜んで、我々外国の知識人たちの見方や批判を認めてくれていたのに、今ではろくでもない連中扱いとなっています。・・・人間の尊厳に反する方法で仲間たちに架空の裏切り行為を白状させ、警察的とすら思える文章構造で書かれた書面に署名させることは、キューバ革命初日からその大義を私に抱かせたことを否定するものであります。その大義とは、個々人への尊敬を失うことなく正義のために闘う決意のことです。この件は私が自国に望む社会主義の模範ではありません。この手紙によって私に対する激しい非難が巻き起こるのは了解しています。それは、私がキューバ擁護に対する反動に値したというほどのひどい非難ではないでしょうが」[149]

これに対するアイデエの返信は5月14日付で現れる。冒頭でバルガス・リョサのような人物は委員会から外すことが望ましいと言い放った後で、次のように書き連ねた。

「・・・長年共に、あなたが帝国主義的な政治意識へ次第に傾斜していることに関して議論してきました。そのような残念な態度にもかかわらず、あなたのように若くて、価値ある作品を書いてきた作家は過ちを正し、その才能をラテンアメリカの人民に奉仕することがなおも可能だと我々は思っていました。・・・一人の作家が逮捕されました。もちろん作家であるからではなく、彼自らが罪を犯したと語った革命への反逆行為によるものです。・・・1968年9月に雑誌『カレタス』で、チェコスロバキアの事件直後に、フィデルの演説に関して馬鹿げた意

見をあなたが表明した時にも厳しい非難を受けてはいなかったし、パディージャの本『ゲームの外で』への批判直後に、ヨーロッパに居住する別の作家たちと一緒になって我々に送ってきた海外電報の中で、詩人エベルト・パディージャに対する中傷的な告発に仰天したと表現し、知的自由の防衛であるカサ・デ・ラス・アメリカスが取り組む連帯、支援、あらゆる行動をあなたが卑劣にも再確認した時でさえ非難は受けませんでした。まさにその時私がしたのは、あなた方のうちの一人に海外電報を送ったことでした。文面は、『そんな遠くにいるあなた方が、パディージャに対する告発が中傷なのか否かが分かるとはなんと不可解なことでしょう。カサ・デ・ラス・アメリカスの文化路線は我が革命、キューバ革命路線であり、カサ・デ・ラス・アメリカスの代表である私は、常にチェが私に望んだ通り、銃を構えて周囲に砲火を放っているのです』というものでした。・・・バルガス・リョサよ、(今回の)あなたへの非難は自身の恥ずべき手紙にあります。・・・個人的な卑しい関心を優先するあなたのような人たちは、この革命プロセスでははみ出し者です。・・・私はあなたのためを思って、いつの日かあなたが永久に不名誉となる公開書簡を書いたことを後悔することを望みます。ベトナムの我が同志たちやチェのような我が同志のように、この島キューバで満ちあふれる人間の尊厳を守るために犠牲を払ってきた、また払おうとする人々の敵に加わったことを後悔する日が来ることを」[150]

このように、以前はバルガス・リョサの1968年の電報やチェコスロバキア侵攻への批判に対して静観していたアイデエだったが、今回は容赦なく反革命分子の仲間入りをしたと、完全に見切った発言を投げ返したのである。

それでは、ベネデッティは『ゲームの外で』についてどのような見方をしていたのだろうか。パディージャ逮捕以前の1968年12月7日時点では、「キューバ文化の現状」と題した見解を長文で記しており、同月27日付『マルチャ』No. 1431で次のように読者に向けて心の内を披歴した。

「・・・間違いなく文学的に質の高い作品であり、その上、反革命的と評価されうるものではないと私は思う。確かにあいまいで論争を呼びそうなとげとげしい本ではある。・・・いずれにせよ、まさしく残念なのは、パディージャという明らかにランクの高い詩人がキューバ革命のような揺さ振られるほどの政治・社会現象によりよく通じていなかったということだ。若くて才能があり感受性に富む人物が、より理解ある態度で革命に向き合おうとしていないのを見ると、ある種のがっかりした気分は避けられない。・・・」「さて、その本が批判的な詩を含んでいるという事実は、パディージャに対するそのような連鎖的な攻撃を解き放つのに十分な動機となるのだろうか。いずれにしても数年前にフィデル自身が〈知識人への言葉〉で、キューバにおける芸術的自由を定めた規則を示した。〈革命内部のものはすべてよし、革命への反対は認めず〉と。正確にはどのあたりが境目なのか。パディージャとアルファトは内なのか外なのか。チェは、キハーノに宛てたすでによく知られた手紙〈キューバにおける社会主義と人間〉[151]の中で、具体的に知識人や芸術家たちに言及しながら暗に知識人の批判的役割を鼓舞していた。『我々は公式見解に従順なサラリーマンをつくるべきではない』と。最近、あるキューバ高官が数名の外国人審査員に対して〈我々は革命の中での批判は完全に認める。しかし、その権利を実行するには、それを勝ち取るべきことがまずある〉と多かれ少なかれ表明していた。それでは、パディージャの件で本当に重要なのは作家の態度であって、詩の言葉の意味はあまり関係がないということなのだろうか。その態度とは結局何なのか。

はっきり言っておく。その問いを発している（また自問している）私が、読者の皆さんに気付いてほしいのは、流布したニュースを通してヨーロッパにいる知識人たちの何人かが理解したと思える程度の単純な問題ではないということだ。特にUNEACのコンクールで始まったものではなく、数か月前に始まっているのだから、そんな単純な話ではないのである。1967年の終わりと1968年のはじめに、『髭もじゃワニ』

［*El Caimán Barbudo*］の内容でとげとげしい論争が発生した。そこでパディージャは、よく知られた小説家で国家文化審議会の副会長であるリサンドロ・オテロに対して論争をしかける一方、その雑誌の発行を当時主宰していた若手知識人チームに対しても論争をしかけた。すべてはオテロの小説『ウルビーノの情熱』［*Pasión de Urbino*］に関する調査で始まった。その回答の中で、パディージャは小説を過激に攻撃するだけではなく、役人としてのオテロを攻撃したり、・・・その時はまだ馬鹿げた下品な意見を発していなかったギジェルモ・カブレラ・インファンテを・・・擁護したりするためにその機会を利用したのである。・・・個人的にはっきり言っておこう。ベルデ・オリーボのコラムニストたちによる操られた用語や概念の多くには同意できない。また私の意見では、パディージャの本は反革命としてみなし得るものではないと確認しておく。しかしながら、知識人とは現実主義者であるべきで、現実主義に基づいて出来事を判断しなければならないと思う。・・・」

「・・・厳しい国家的局面の中で、パディージャの件はさらに中途半端ではあるが、現在ではその論争はより解明される段階に近づきつつあるようだ。しかしながら、指摘しておこう。今の時点では、私がここで述べたようないかなる個人的な意見も仮のものでしかない。なぜなら、日々対立を増幅させる新しいデータや要素が現れると同時に、あらゆる予想を困難にしているのである。いずれにしても、異なる傾向のものを認めたり広めたりすることに関して、芸術的自由がなんらの制限を受けるものではないことは明らかのようだ」

「・・・この段階で予想できるとしたら、知識人たちが革命に加わるように、もしかするとこれから先、より強い社会的圧力があるかもしれないということだ。・・・」[152]

この記述を読む限り、作品そのものは反革命的なものではないと明言している。また、チェ・ゲバラや政府高官の発言に触れたりベルデ・オリーボを強く批判したりと、表現の自由に関する点では作家の権利を主張する

面も見られ、芸術の自立性よりもひたすら革命を優先させる「社会主義リアリズム」の枠内にすんなりと収まるものではなかったと言える。この時点ではまだ2年数か月先の逮捕までは読み切れず、パディージャの言動を含め、これからより詳細な事実が次々に明らかにされていくだろうとするにとどまり、事の成り行きを注視しながら疑問点を整理している段階にあった。「内か外か」の境界の見極めの難しさを実感しながら、「自問している」という言葉がそれを端的に物語っている。そして、どちらかというと作品そのものよりも革命に対する不遜な態度にあるのだろうと、争点の背後の方に重きを置いている。後半の記述で、パディージャが以前から他の知識人や政府高官、国家組織に対して攻撃的な言動を繰り返したり、政府から「虫けら」(gusano) 扱いされていたキューバ人作家カブレラ・インファンテ (1965年亡命) を支持したりしていたことを話題に挙げているところからもよくわかる。

先述した内政面・外交面において緊迫度が高まった1968年を、小倉英敬も「純粋なイデオロギー論争だけで路線を決定することは困難な状況にあったわけであり、事態の進展に応じて臨機応変に対応する現実主義的な路線の操作が必要とされた」年であったと述べている[153]。1月の親ソ派旧人民社会党グループ「ミクロフラクション」に対する粛清と8月のチェコスロバキア侵攻への支持と、相矛盾しているかのように見える大国ソ連へのキューバ政府の向き合い方に注意を払うならば、いずれも指導体制を揺るがしかねない重大事であったため、現実的な対応として革命勢力の結束強化を優先させる措置を取らざるを得なかった、とする小倉の言説は首肯できる。

ベネデッティもこれと近い文脈で、キューバ革命指導部がパディージャの作品を格好の材料にして反革命的な動きに釘を刺したと判断していたのであろう。つまり、国内外の政治情勢を勘案すれば、文学作品云々や表現の自由というだけの単純な問題ではなく、「キューバ革命の独自性」確保との兼ね合いで考える必要性があるという捉え方である。知識人は現実主義者に基づいて出来事を判断しなければならないとか、今後の予測として

知識人たちを革命に参加させるために、彼らにより強い社会的圧力が加えられるかもしれないと述べているのは、政治との関係次第で事態は自在に変わり得るものだ、と認識していたことを窺わせるものである。

それゆえ、しばらく慎重な姿勢を取っていた節がある。パディージャの作品が物議を醸し出していた頃はすでに1年近く文学調査センター長を務めていたが、第1章で記した『マルチ評価』の当初の編集計画を見直し、キューバ政府の考えに沿わない作家たちの扱いを差し控える対応を迫られていたように見受けられることである。例えば、キューバ政府によるソ連軍への支持やホモセクシャルに対する人権侵害を批判していたバルガス・リョサの特集が立ち消えになっているのである。実はベネデッティ自身もバルガス・リョサと同様にソ連軍のチェコスロバキア侵攻には批判的であったわけで、この計画変更がベネデッティ自身によってなされたものか否かは不明であるが、いずれにしても微妙な立場に置かれていたことを暗示してはいないだろうか[154]。

こうしてまだ事態の帰趨が定まらない中、関係修復の余地を信じるベネデッティは、「近日中には『ゲームの外で』は出版の運びとなるだろう」とやや楽観的に記していた。そして、パディージャが牢獄に入れられているとしたラテンアメリカ諸国の放送各局のデマ報道を否定し、彼は通常通り外国プレスのインタビューにも応じていると伝えている。

その後ウルグアイに一時戻って受けていたインタビュー記事が「ベネデッティ：キューバの経験」というタイトルで『マルチャ』No.1449(1969年5月23日)に掲載され、そこでもほぼ同様の見解が示される。「社会主義リアリズム」という言葉を使って次のように述べている。

> **「キューバで明らかなことがあるなら、それはスターリニズムすなわち社会主義リアリズムには向かっていないということだ。当然その路線を支持する者もいる。しかし、我々はもちろん創造の自由を要求する・・・」**

さらに、雑誌『カサ・デ・ラス・アメリカス』No.54(1969年5-6月号)には「ロケ・ダルトンとの一時間」[“Una hora con Roque Dalton”]と

題するインタビュー記事が掲載され、パディージャの名前を出さないまでも、そこでは政治理念と純粋芸術の狭間で苦慮し、弁証法的解決策を模索しようとする姿勢が目を引く。

「・・・以前から知識人と社会主義、作家と革命との関係から派生する問題を心配している。・・・個人的には、真の解決策は（プチブル的予断やスターリニズムに関連した方法）それらの提起のいずれにもないと思う。おそらく我々は作家と革命との新しい関係を創造しなければならないだろう」

結局、1971 年 3 月 20 日にパディージャは逮捕されることになるが、その逮捕前つまり第 1 章第 3 節で記したように 1 月末（推定）、ベネデッティは 11 月の大統領選・国政選挙の近づく祖国で「3 月 26 日独立運動」の立ち上げに加わるためにキューバを去る。この前後の足取りは大変目まぐるしい。1970 年 12 月には父親の病状悪化に伴い、ひとまず妻ルスを残し実家に戻って、1 月 5 日の臨終に立ち会う。その後、19 日からの会議に間に合うようにキューバへとんぼ返りする。そして、文学調査センター長を辞任し、キューバ生活に別れを告げて妻と共にウルグアイへ帰国するのである。

しばらくして、雑誌『カサ・デ・ラス・アメリカス』の編集長[155]を務めていた詩人のロベルト・フェルナンデス・レタマールから 3 月 5 日付の韻文調の手紙が届く。そこにはベネデッティとルスとの別離を惜しむように、「カサ・デ・ラス・アメリカスは空虚感に包まれている」と書き綴られていた。

一方、エベルト・パディージャ逮捕を知ったベネデッティはすぐさま、3 月 25 日付の次の書簡をカサ・デ・ラス・アメリカス宛に送付している。

「（大新聞が叫んでいるように）圧力ましてや拷問があったとは左翼の誰もが考えていない一方で、関与した者（パディージャ）の誠実さは誰も信じることができない。まあ、パディージャを知らない人々の中では（圧力・拷問があったと）そういうことになるな。彼を知っている私も彼が誠実だとは思っていないよ。遠く離れたここ（ウルグア

イ）にいる私にはなぜだかわからないが、圧迫を加えられて強制された自白や自己批判として外部に受け取られるように、エベルトが暗に意図して供述した、という印象だな。彼が今主張していることは、ただ単に重大なかけひきを進めるといった別の問題であるかもしれない。・・・パディージャがこの新しいゲームを弄んでいる可能性はある。あまりにあいまいで、ひねくれた、理解しがたい人物であるので、キューバの現実よりもドストエフスキーの小説にずっとよく当てはまる人物である」[156]

この文面では、逮捕という切迫した状況であるにもかかわらず、もしかしたら何か魂胆があってのことで、これから別のことをしようとしているのかもしれないと推測しており、パディージャの真意は読めないとしつつ、とにかく人騒がせで信用できない人物であると指摘しているのである。

続いて出されたフェルナンデス・レタマール宛ての4月17日付の返信[157]では、彼に倣って韻文調でしたためられたキューバへの思いや友情への感謝に交じって、「その後の文学調査センターの様子はどうか」と探りを入れるような文言が見られる。この事件の余波について相当気を揉んでいたことがわかる。その後ベネデッティは、アイデエ・サンタマリアが5月にバルガス・リョサ宛に出した先の辛辣な返信内容をウルグアイの仲間たちと共有して、彼女の考えを支持する側についた。そしてついに、現実的対応から6月4日付『マルチャ』(No.1546) 紙上で「作家の優先事項」[“Las prioridades del escritor”] というタイトルを掲げ、革命あっての文学であるという、いわゆる社会主義リアリズムに沿った形で旗幟を鮮明にする。

「簡潔に言えば、革命と文学を選ぶ難局において我々は革命を選択した。もちろん文学を捨てたり放棄したりすることなしに革命を選ぶ。生きる理由として、衝動として、文学そのものの創造の原動力として革命を選ぶ。・・・革命は間違い、調整不足、逸脱、図式を伴うものであることを認める。しかし、表と裏、光と影、勝利と敗北、限界と広がりのある革命を我々は受け入れる。なぜならば、あらゆる失敗で

も、あらゆる不足でも、革命は我々人間にとって尊厳を取り戻し、自己実現する唯一の可能性であり続けるからである・・・」[158]

このようにはっきりと態度表明して以降のベネデッティは、1971年から祖国ウルグアイで変革の一翼を担うべく政治活動に邁進したが、第1章で詳述したように1973年のクーデター後、各地を流転して1976年にキューバに舞い戻る。一方、パディージャ事件後の1971年から1976年にかけてのキューバ言論界は、「灰色の5年間」と呼ばれる閉塞感に包まれる。この両期間がぴったりと一致しているのは全くもって偶然としか言いようがない。

補足として、バルガス・リョサは後年この事件を振り返り、米国プリストン大学での講演でパディージャの出所後の様子について、さらにはパディージャが仲間の反革命的姿勢を告発するといった信義にもとる行為に及んだ末、1980年に米国へ亡命したことについて憐れみの言葉を投げかけている。

「・・・刑務所から出てくると、明らかに脅しによって、自分はCIAのスパイであったというような馬鹿げた自白をし、見ていられないような自己批判を行ったのです」

「もう、彼には、書くものによって誰かに打撃を与えるような力はありませんでした」[159]

要するに、バルガス・リョサをはじめヨーロッパの大方の知識人たちの眼には、キューバがソ連で見られたような文学者・芸術家への大弾圧につながる恐れのある社会主義リアリズムへと進んでおり、表現の自由が脅かされていると映ったのである。対するベネデッティは、スターリニズムとは一定の距離を保ちつつ、キューバの独自路線のためなら社会主義リアリズムもやむなしと、革命勢力発展のために結束して米帝国主義に立ち向かう方針を優先的に評価したのであり、東側陣営が崩壊して国際的に孤立していく中にあっても、最後までキューバ擁護の姿勢は崩さなかったのだと言えよう。

第 3 節　バルガス・リョサとの政治論争

この節では、新聞紙上において双方が過去の出来事を振り返りながら繰り広げる論戦を見ていく。パディージャ事件から引き続く対立軸に沿って、改めてそれぞれの政治的認識、政治的立場を整理するのがねらいである。

まずは、この論争を見る前にバルガス・リョサの思想的変遷を確認しておきたい。彼は、大学生であった 1953 年にペルー共産党に入党し、1 年間だけ党活動した経験を持つ。その時の様子を自身で次のように語っている。

「・・・きわめてセクト主義的、教条主義的で、完全なスターリン主義者でした。・・・そして教義に関して激論が交わされました。私は党を支配していた、あまりに閉鎖的な教条主義を強く批判し、一年後には活動から身を引きました。しかし左翼的活動には立ち続けました」

「この最初の失望から数年後、キューバ革命の勝利が私の政治活動への情熱を再び呼び覚ましました。・・・私はすでにヨーロッパにいたのですが、そこにまでラテンアメリカにとっての新たな希望のうねりが押し寄せてきました。それは教条主義でも不寛容でもなく、意見の相違や自由を容認する開かれた革命になるであろうと、私たちは信じていました。・・・ラテンアメリカの作家たちは、左派であろうが中道、あるいは民主主義であろうが、キューバ革命に大いに共感している点でほとんど一致していました。・・・共産主義革命ではなく、7 月 26 日運動の若者たちから始まった動きだったため、ラテンアメリカにとっての新たな選択肢を示すものとなったのです。・・・」[160]

このようにベネデッティと同じような高揚感をもって革命キューバに期待を寄せていたが、1962 年にキューバを旅行した際に見た光景から幻滅を感じ、以後葛藤する胸の内を次のように披歴している。まさにこのことは、ベネデッティが米国を旅した時に幻滅を感じたことと対称性をなすものである。

「少しずつ現実の負の面が目に入ってくるようになりました」

「・・・革命は実り豊かで評価すべき点が多く、とても重要な変化をもたらしていたので、多少の行き過ぎは目をつぶるべきだと思っていました」[161]

そして最終的に、パディージャ事件を不信の沸騰点として、革命キューバに完全に背を向けるようになったことは前節で見た通りである。

さて、論戦が展開される時期は折しもウルグアイで民政移管の動きが活発化する頃であった。キューバ革命以後の社会主義の捉え方や民主主義についての見解の相違が改めて浮き彫りになる。ことの始まりは、バルガス・リョサが 1984 年 1 月に語ったイタリア『パノラマ』紙でのインタビューにあった。

「ラテンアメリカの知識人はパブロフの犬のように条件反射によって踊らされている」

このように揶揄し、その知識人とはだれかとの問いに、

「ガブリエル・ガルシア・マルケス、マリオ・ベネデッティ、フリオ・コルタサルだ。彼らは最も有名な人たちだが、中程度かやや劣る大多数の知識人たちもみんな完全に操られ、服従し、腐敗しているのだ。・・・」

と答えている。また、革命信奉者たちに対してやや下卑た物言いではあるが、「ゾンビ、（体制側の）ロボットないしは道具」などと悪意のあるレッテルを貼っている。

ベネデッティは、このインタビュー内容を友人から入手していたが、そもそもこの記事のタイトル「腐敗と満足」は、イタリア人ジャーナリストの扇情的な命名によるもので、それが結果的には二人の間に論争の種を蒔くことになったのである。このバルガス・リョサの発言を受けて、1984 年 4 月 9 日、ベネデッティは『エル・パイス』紙のコラム欄に「腐敗でも満足でもない」という打ち消した形のタイトルで、痛烈な反論を寄稿したのだった[162]。

「彼は、常に自由というものに特別に気を配っていることを示そうと努力していたのだが、1960 年から今日まで、政治的好みにおいて目

覚ましく路線変更をしてきた。確かに15年前は熱狂的にラテンアメリカの左派に支持されていたが、今では右派によって称揚され支持されている」

そして、左翼は熱情において過ちをおかすものだが、右翼はほとんどそのようなことはないとするバルガス・リョサに対して、そのような立場は少数派に属すると念を押している。さらには、左派知識人と称する輩が低開発と闘わずにおきまりの条件反射的なプロパガンダによって踊らされているという罵倒に対しては、バルガス・リョサこそ条件反射の理論に囚われているのではないかと切り返し、ラテンアメリカが悲惨な状態にあるのはユナイテッド・フルーツ社もしくはアナコンダ銅採掘会社のせいであり、カルペンティエールもしくはネルーダにその非があるなどとは決して思えないと見解を示した。そして、「腐敗」という言葉に対しては次のように述べる。

「・・・リョサがラテンアメリカ作家の大半が腐敗していると言う時には、モスクワからのお金のことを考えているのだろう。失望させてすまないね。モスクワからの割り当て金など当てにはしていないよ」

また、「腐敗」と並んでタイトルに示された「満足」という言葉への反論は次のように示される。

「ラテンアメリカでは、毎分飢餓や病気で子供が死に、グアテマラでは５分ごとに政治的暗殺が起き、アルゼンチンでは３万人が行方不明となっているのに、どうして満足でいられようか」

そして、バルガス・リョサのような高名な知識人に対しては仲間の誠実さを疑う時にこそ、最低限でも真摯な判断を期待したいと述べ、ロケ・ダルトンの殺害、ファン・カルロス・オネッティやカルロス・キハーノの投獄、マウリシオ・ロセンコフへの拷問など多くの知識人が政治的苦難に晒される世の中にあって、「腐敗と満足」という言葉を使って語ることは耐えがたく、軽薄な態度だと失望している。

「相容れない考えの知識人に向けたリョサの侮辱や攻撃には心底がっかりしたし、一読者としてリョサの作品を堪能していたのに、このよ

うな不当な毒舌を発するとは、おそらくリョサには及ばないとしても日々言葉でもって闘い、それをみんなの財産である文学に変えようとしている我々に対する尊敬の念が微塵もないということを示しており、悲しいことだ」

以上のように変質ぶりを嘆いているが、彼のこれまでの作品自体はまだまだ左派の人々に読み継がれるだろうと、エールとも言えぬ皮肉を交えながらバルガス・リョサの痛いところをついている。

これに対して、バルガス・リョサは1984年6月14、15日『エル・パイス』紙の「同名異人の間で」[“entre tocayos”]というコラムにおいて論戦に応じた[163]。タイトルの「同名異人」とは、マリオ・ベネデッティとマリオ・バルガス・リョサはマリオという名前では一緒だが、別人格という意味合いが込められているのであろう。1960年代には肩を並べて歩く良き仲間であり、ベネデッティの素晴らしい作品には相変わりなく愛着を持っていたとしつつも、政治的な考えで疎遠になってしまったことを残念がっている。冒頭、インタビュー記事の「腐敗と満足」というタイトルはイタリア人ジャーナリストがおそらく大げさに掻き立てたもので、自分は与り知らぬと語ってから本題に入っていく。

まずはベネデッティがネルーダを擁護している点について言及し、いくら詩の技法に革命をもたらした偉大な功績があるからといって、ネルーダがスターリンを礼賛する詩を書き、粛清や強制収容所などの硬直化したスターリニズムになんらの戸惑いを見せないのは信じられないことだとし、その影響力のおかげで若者たちが帝国主義や反動と闘うにはスターリニズムがふさわしいと信じてしまったのだと、その罪を問うている。また、カルペンティエールにしてもリスクを冒さずに、革命政府に奉仕する言辞を信心深く繰り返しているだけだとこきおろす。

そして、作家にとって創作面だけでなく政治面でも倫理面でも厳格さと正直さは欠かせないという点ではベネデッティに同意するとしつつ、ネルーダにしてもカルペンティエールにしても共産主義者であることはさておき、自らの責任において考え直すという作業を怠り、創造性や批判精神

を失っていると指摘する。だから、ラテンアメリカ作家間での政治論争は、罵倒や紋切り型の表現ばかりで不毛であると不満を漏らし、知識人としての第一の努めは何をおいても自由でいることだと強調する。

ベネデッティに対しては、現状に満足して勝利者気分でいるようだとし、作家の大半が蒙昧なイデオロギーに毒されていることに不安を覚えている。しかしながら、オクタビオ・パス、ホルヘ・エドワーズ、エルネスト・サバト（1911-2011）などは例外と考えており、このような作家が少ないのには二つの理由があるとする。一つは、軍事独裁への恐れから手っ取り早い解決策として教条主義を選択してしまうこと、もう一つは、左翼自体を批判すると仲間から排除されるのではと恐れ、自分なりの考えを捻じ曲げてしまうことを挙げている。

そして、ベネデッティがラテンアメリカの独裁下で暗殺、投獄、拷問を受けた詩人や作家のことを取り上げている反面、カストロ政権下でも投獄されたり亡命を余儀なくされたりした作家がいることに口を閉ざしているのはおかしいと批判する。また、1975年のロケ・ダルトン殺害の件に関しても、帝国主義の犠牲者のように祭り上げているが、彼はCIAの工作員と疑われて内ゲバの末、仲間に殺害されたのであり、独裁政権の被害者たちと同列に扱っているのは軽率だと事件の真相を告げている[164]。

右翼独裁政権に嫌悪感を覚え、いち早く終わらせたいという願いでは一致しているものの、それにとって代わる政府の形態は自分が望むような民主的政府なのか、それともベネデッティが擁護するキューバのような別の独裁政府なのか、どちらが適切な選択と言えようかと問題を突きつける。

バルガス・リョサは、ラテンアメリカの問題解決にあたる場合、たとえマルクス・レーニン主義による急進的な改革であっても、思想によって差別されずに選挙によって政党が選択されるならば、その結果は尊重するとした。しかし、国家が生産手段を独占するようなら早晩自由は失われていくであろうから、母国ペルーにはこの選択は望まないと本音を吐露している。

そして、チリ、ウルグアイ、パラグアイのような軍事政権と同様に、キュー

バの体制に反対するのは政策が国民抜きで上から決定されていくからであり、異なる見解であっても許容されなければならないと主張する。往々にしてラテンアメリカ諸国民にとってのイデオロギー上の選択肢は反動か革命かという二者択一なのであって、自分のように民主主義を志向する「真の革命的知識人」を邪悪な反動者扱いにしているのだと、その不当性を強調している。つまりバルガス・リョサに言わせれば、選挙を経ずに権力を奪取する革命的マルクス主義もネオ・ファシズムのいずれも独裁という点では同じく忌むべき対象であると言いたいのであった。

さらに、ベネデッティが発していた、「彼ら」の陣営に行ってしまったという批判に対しては、「彼ら」とは誰のことを指しているのかと問い質している。自分が本当に右翼側の人間であるというのならば悪人ということになってしまうし、「彼ら」という言葉で名指しすることはくずのような連中と自分とを一緒くたにするものだと憤慨している。ゆえに自分が反動を擁護し、ベネデッティが進歩を擁護しているという図式はおかしいと主張する。そして、ベネデッティこそ社会主義の名の下に行われている抑圧を問題視していないと指摘し、社会主義国でなされた人権侵害に対して非難や抗議の声を一度も上げたことがないのを見ると、もしかしたら社会主義の国ではそんなことは起きていないとでも思っているのか、と疑問を呈している。

社会主義思想がラテンアメリカに寄与することは大いに評価し、かつベネデッティの立場に理解を示しながらも、政治を信仰による行為としてはならず、誤謬性のない理論はないのだから対話を通して理論を修正したり強化したりすべきだと説く。さらには、イデオロギーに凝り固まった政治的内容ではなく現実的な手段こそが、ラテンアメリカが低開発から抜け出すために必要なことなのではないかとも訴える。

対して、3 日後の 6 月 18 日『エル・パイス』紙[165]で冒頭ベネデッティは、「どうやら『腐敗と満足』という最初のタイトルはバルガス・リョサの語る通り、イタリア人ジャーナリストが勝手に付けたものであって、『皮肉屋とご都合主義者』のような意味合いのものだったらしい」と述べている。

ただそれも正確な情報かどうかわからないとした上で、何はともあれ、しばらくぶりに相互に交流ができたことはよかったと素直に喜んでいる。

今回は単なる情報整理と修正程度にとどめ、論争を長引かせるつもりはないと断りを入れてから、改めてラテンアメリカの作家たちがキューバ革命やニカラグア革命を支持している理由に触れた。左翼連中は盲目的に革命イデオロギーに合わせていると解釈するバルガス・リョサに対し、自分たちは自身の判断で革命を支持しているのであって、腐敗でも厚顔無恥でも日和見主義者でもないと反論した。リスクのある考えや独創性を放棄していない左翼の仲間たちの前向きな姿勢に、自分自身は励まされているとも語っている。彼らはまさに抑圧、例えば投獄、拷問、追放、ビザ発給拒否、脅迫などの犠牲者なのであり、それに引き換え、偶々そのような苦悩の経験がないから軽々しく物事が言えるのだと反発している。

専らスターリンを礼賛しているというパブロ・ネルーダ批判に対しては、ネルーダ自身もリョサと同じようなプロセスをたどってスターリンに対する見方を修正しているのであり、そのことに触れていないのは不公平だとした。

また、エルサルバドル人作家ロケ・ダルトンを帝国主義の犠牲者としたのは間違いだとした彼の指摘に対しては、もちろんセクト間の争いで殺害されたことは十分承知しており、独裁政権下で被害にあった詩人や作家の中には元々含めてはいないと反論し、その上で革命キューバ政府は決して一人の作家も殺したことのない体制であると断言した。

さらに、バルガス・リョサが「彼らと我々」という言葉で不埒な連中と同一視されたと憤慨している点に関しては、彼をファシストとかサディストとかと混同して考えていることはないと誤解を解こうとしている。そもそもベネデッティはこの言葉をどのように使い分けていたのだろうか。彼の説明によると、「我々」という言葉は、「多少の欠点や誤りはあるものの自由解放の先駆者である革命の擁護者」を指すのに対して、「彼ら」という言葉は「無差別に革命を窮地に立たせ、理解もせずに偽情報で阻止しようとする輩」という意味であるとしている。よもやその範疇に入ってはい

ないだろうね、という警告のようなものであったのだろう。

「急進的なものであったとしても、改革というものは選挙によって誕生した政府によってなされるものだ」

と、選挙制度の優越性を主張するバルガス・リョサにとっては、もう革命自体は惹かれる対象ではなくなっていた。一方、ベネデッティからすると、そのような主張はフランス革命、ロシア革命、メキシコ革命、アルジェリア革命、キューバ革命など世界の名立たる革命の意義を無視することになるわけで、選挙だけでは達成できない場合もあるとの認識を持っていたことがわかる。つまり、選挙によらない革命の正当性を少なからず認めているのであった。

バルガス・リョサのように選挙を強く希望するとなると、ニカラグアのソモサ政権やパラグアイのストロエスネル政権のように選挙で誕生した弾圧政府も含まれてしまうし、また左派の排除をねらった 1981 年 3 月のエルサルバドルのケースも含まれてしまうと指摘する。このエルサルバドルの選挙は自由選挙と謳われてはいたが、戒厳令下で実施されたものであり、結局左派政党抜きのものであった。それでもバルガス・リョサにしてみれば手続き上は問題ないとするのに対して、ベネデッティにとっては今後の祖国ウルグアイの選挙を思い浮かべた場合に公正な選挙が実施されるのかどうかと、その行方に憂慮の念を抱かざるを得なかった。まさにこの時、1984 年 11 月の選挙が 5 か月後に迫っていたのである。実際に、ウルグアイでは軍部の過去の人権侵害を不問に付すことが選挙実施の前提条件とされ、この合意事項は本人にとって納得のいくものではなかったからである。

また、社会主義国での人権侵害に関して決して自分が言及していないわけではないと反論している。ハンガリーやチェコスロバキアへのソ連軍の侵攻については、『マルチャ』でも反対意見を表明している通り、キューバ政府の見解と自分の見解は異なるとした。また、ソ連軍のアフガニスタン侵攻に関しても否定的な意見はすでに述べてきているとしたものの、このアフガニスタンの問題は自分の中での優先事項ではないとして論評を差し控えている。

この辺りの発言からソ連への批判は明白であるとは言え、米国に対するほどの執拗さは感じられない。そもそも彼が常に敵視している相手は、直接的にラテンアメリカを苦しめている米国だということを念頭に置いておく必要がある。「北の巨人」の現実社会に嫌悪感を覚えて以来、根っからの反米主義者となったのであり、制裁で苦しめられている弱小国、つまりキューバをはじめとするラテンアメリカの味方に立とうとする人物であることを忘れてはならない。バルガス・リョサがキューバから離れていったのとは反対のベクトルが作用しているのである。

以上、過去を振り返りながらの平行線とも言える政治論争を見てきたわけだが、ここで敢えて党派性を単純に示すならば、キューバを抑圧体制と見るか見ないかの違いであって、キューバをスターリニズムによる独裁と見るバルガス・リョサは民主主義・自由主義（のち新自由主義）擁護の立場、一方キューバをソ連とは異なる独自路線を歩むものと見るベネデッティは社会主義（一部からは社会民主主義者とみなされた）擁護の立場に色分けされるのである。ただし、双方とも人格まで否定するものではなく、文学の才能においては認め合い、執筆活動を通してお互いに理想とするところである、非文明的なものからの人間の解放を目指す点では通じ合うものを多少なりとも残していたのであり、晩年における再会で遺恨を微塵も感じさせないのはそのためである。

第 3 章　マリオ・ベネデッティ作品に見る独裁・抵抗と亡命

ベネデッティがキューバ革命を機に、都市生活者への視点から政治への視点に重きを置いた作品の創作にシフトしていったことはこれまで見てきた通りである。彼を取り巻く環境の変化に従って積極的に政治に関わろうと決意し、文学作品を通して作家としての自らの立ち位置を明確に示そうとしていくのは必然であった。

そこで、この章では本論文のテーマに密接に関係した作品を 7 つ取り上げ、抑圧・拷問の実態、独裁者の悲哀、人間の尊厳、人間の弱さ、亡命の

悲壮感、帰郷における葛藤など、これらの題材をどのような場面設定で表現しているのか見ていくことにする。本人は作品自体をフィクションとして位置付けてはいるが、どれをとっても空想の産物とは言えない。場面や登場人物を見ればわかるように、歴史的事実やベネデッティ自身の個人的体験から着想を得たり、それらを織り交ぜたりしながら作品を仕上げている。そして、緻密なプロット構築力、簡潔で鋭い描写力、独特のアイロニーやユーモアに満ちた表現力は読者を十分にひきつけるものがある。

第１節　解題：短編『星座とあなた』[“Los astros y vos”]

1974 年に創作された作品で、1977 年に出版された短編集『ノスタルジアの有無』[*Con y sin nostalgia*] の中に収められている。ストーリーの中で「1973 年のクーデター・・・」と書かれてある通り、ウルグアイのボルダベリー独裁政権下で起こりうる、また起こっていたと想定される出来事を描いた作品である。一見平凡な男がクーデターを機に、人間性を徐々に喪失して体制側の抑圧的な人間に変貌し、哀れな末路を迎える姿を描き出した 7 ページほどの小品である。

主な登場人物は、警察署長オリーバとその手下、星占い関連の記事を書くジャーナリストのアロージョ、オリーバに無理な要求を押し通される妊婦とその夫、人権擁護派の弁護士ボルハ、産婦人科主治医である。ストーリーは次のように展開する。

識字率が高く、純朴で働き者の多いロサレス村には犯罪がない。オリーバは、たまたま警察署長にまでなったごくごく平均的な人間だった。アロージョとは、時々スポーツや国際政治を話題にして親しく議論を交わす仲であった。このアロージョは天文学に知識があり、新聞『バラの棘』の星占いコーナー〈星座とあなた〉を担当し、的確なコメントと高い的中率で人気を博していた。

しかし、1973 年のクーデターがオリーバの人格を急激に変えてしまう。まずは外見としてきっちり制服を着用し、表情や態度に権威主義的なとこ

ろが見られるようになる。この変貌ぶりを始めは信じられない面持ちで見ていたアロージョも、住民を厳しく取り締まるようになった彼の姿を見て、事態の深刻さを受け止めた。そこで、〈星座とあなた〉のコラム欄に不吉な予言を連載し、警鐘を鳴らすようになる。

ある日、クーデター、議会閉鎖、労働組合の閉鎖、拷問に反対して行進していた学生たちが一斉に拘束されるという事件が起きる。穏健な警察官たちはオリーバ署長に恐れをなし、学生の両親たちの釈放要求を見て見ぬふりをする有様。アロージョは益々陰鬱な気分になっていき、「村の生活を破滅させるような忌まわしいやり方に訴える者は血で贖わられ、最後には挫折するだろう」という刺激的な予言を掲載した。学生の両親たちは弁護士ボルハに相談したが、彼も学生を擁護する言葉を発した廉で刑務所に留置されてしまう。

そして、次の事件が起きる。部下を連れ立ってダンスホールに現れたオリーバは、あろうことか、その場に居合わせた妊婦にダンスを強要する。その横暴ぶりに抗議した彼女の夫は警察署に連行され、数か月間拘束される。ダンスで気を失いかけた妊婦は流産してしまう。妊婦の主治医が、知り合いの大物政治家にこの件について相談に行ったものの、「この件はかき回さない方がよいと私は思う。オリーバは政府が信頼を寄せる人物だ。もし、あなたたちが賠償や制裁を要求したならば、彼は復讐を始めるだろう。おとなしくしていることだ」と説得される。

しかし、アロージョは断じて許さなかった。その事件以来連日にわたり〈星座とあなた〉で、「すぐに誰かが代償を払う時が来るだろう」「弱者を前にして権力を誇示する者に悲惨な見通し」「権威主義者は万死に値する」「星座は無情にも独裁者の見習いの死を告げる」などと、オリーバの横暴を暗に批判する予言を書き続ける。それを知ったオリーバは、直接アロージョの自宅を訪れ、自分に都合のよい予言をすぐに書くように詰め寄る。身の危険を感じたアロージョは、すかさず至近距離から銃弾一発をお見舞いする。「星座は決して嘘をつかないよ、署長」という言葉を添えて。

こうして横暴な抑圧者の象徴であるオリーバの死によって話は終わる。

つまり、アロージョは星占いで予言した通りのことを自らの手で実行したことになる。実際にベネデッティの仲間が拘束されたり、暴行されたりする情報をもとに創作したと考えられ、軽妙なタッチながらもウルグアイ軍政下の重苦しい雰囲気が伝わってくる。まさに住民を恐怖に陥れ、傍若無人にふるまう官憲に対する抵抗へのメッセージ、悪辣な政権に対する批判を込めた作品である。

そしてまた、主人公オリーバのような普通の人間が権力を握った途端、傲慢で無慈悲な抑圧者に変貌していく可能性があるのだという戒めでもあり、権力が人間性を破壊し悪魔を産みだす装置として働くことを示唆している。ただし､権力者にも常に弱点があることも忘れない。オリーバが日々の占いに一喜一憂する姿であるが、これは不安に駆られて非科学的なものに頼らざるを得なくなるという、古今東西の統治者に共通して内在する心の弱さを指摘しているものと考えられる。

余談ではあるが、ロサレス (Rosales) 村で発射された一発の銃弾が、バラの棘 (La Espina de Rosales、ここでは新聞名) のように突き刺さり、オリーバを絶命させたということで、スペイン語のバラの茂み (rosal) による言葉の掛け合わせが見られる。このように言葉遊びを忍ばせ、ユーモアのセンスを生かす筆致は彼の得意とするところである。

第 2 節　解題 ： 短編『モーツァルトを聴く』[“Escuchar a Mozart”]

1975 年に創作され､上記で紹介した短編『星座とあなた』と同じように、短編集『ノスタルジアの有無』に収められている作品である。1990 年に内田吉彦によって日本語に訳されているので、会話体の部分を借用しながら紹介する。

この短編は表と裏の顔を持つ拷問者の二面性に題材をとり、タイトルからは予想もつかない展開が待ち受けている作品である。主な登場人物は、モンテス大尉、その上司、妻アマンダ、8 歳の息子ホルヘである。語り手がモンテス大尉に問いかける形で進行し、最後の場面では大尉が息子の矢

継ぎ早の質問に耐えられなくなって、ついに獣性を露わにするというストーリーである。

今では逮捕者の口を割らせることができた時に、微かに満足感を得るモンテス大尉であるが、拷問を始めた頃は悪夢を見続け、吐き気を催していた。もし退役を申し出たとしたら軍に対する忠誠心を疑われ、自身が制裁や左遷の対象になることを心配する弱さも持っていた。また以前に、「娘さんが地下にもぐったというのは本当ですか」と、うっかり上官の大佐に訊いたがために、立場上その事実を周囲に知られたくない大佐から睨まれることもあった。凄まじい拷問の後にはモーツァルトの交響曲を聴いて心を落ち着かせる大尉であったが、家族はその拷問の具体的内容までは知らなかった。ただ、軍隊の暴虐ぶりは噂で妻にも伝わっており、そのような軍に夫が関わっていることが息子の将来に影響を与えないかと不安を感じていた。

このような日々の暮らしの中、語り手の声が大尉に揺さ振りをかける。

「いまやっと息子のホルヘが帰ってきて、あんたにキスをしに近づいてくる、息子のことを考えると具合が悪くならないだろうか。時間が経てば、あんたの息子は、いまはまだ知らないでいることを赦すようになるとあんたは思っているのか？ 少なくともあんたは息子を愛している。・・・」

そしてある日、あどけない息子ホルヘからの質問に狼狽し、次第に怒りがこみ上げる大尉。緊張をはらんだ二人の会話だけを抜き出して、結末までの大尉の態度変化を見てみよう。

「パパ、パパが拷問してるってほんとうなの？」「おまえどこからそんなこと聞いてきたんだい？」「ぼく学校でそう言われたんだ」「ほんとうじゃないさ、おまえが聞いてきたようなことはほんとうじゃない。でもいいかい、坊や、おまえのパパや、ママや、それからおまえが好きな大勢のひとたちを殺したがってる、とっても、とっても危険な連中と、パパたちは闘っているんだってことを、おまえにもわかってもらいたいんだ。そういう連中がやろうと思ってるとんでもないこ

とを白状させるには、ちょっと脅かしてやるしか方法がないこともときにはあるんだよ」「わかったよ、でもパパが・・・拷問しているの？」「でもどういうのを拷問というんだい？」「どういうのかって？ 潜水艦のことだよ、パパ。それに電気棒とか、電話とか」「どのお友だちがおまえにそんなくだらないことを吹き込んだのか教えてくれるかい？」「どうしてそれを知りたいの？　その子を拷問にかけるため？」「いいかい坊や、気にすることはないんだ、あの連中はときどきとっても、とっても悪いことをするんだから。わかったかい？」「でもパパ」

この最後の息子の訊き返しは決定的だった。この瞬間、それまで息子の首筋を撫でていた両手が喉元を静かに押さえ、情け容赦なく締めていく。そして、次のセリフを吐く。

「わかったか、このガキは？」

ついに、愛する家族にまで手をかける鬼畜としての本性が現れる恐ろしい結末である。穏やかにモーツァルトを聴くことなど到底できないような精神状態に追い込まれ、「坊や」から「ガキ」へと言葉遣いも変化する。拷問を仕事としている父親の姿と家庭で優しげに振舞う父親の姿、この相矛盾する二面性はいずれ破綻するのだということを暴くことで、拷問者の非人間性を仮借なく描いている。

なお、この作品ではウルグアイ軍政下で実際に行われていた拷問の種類を知ることができる。例えば、高圧電気棒を口に突っ込む、頭を水につけ窒息寸前にさせる（通称「潜水艦」、糞尿などの入った汚水を使用）、耳を掌で殴打し鼓膜を破る（通称「電話」）、腎臓を殴打する、歯を抜く、睾丸を切り取るなどの拷問例が文中で示されている。その他の例としては、長時間立たせる、頭巾をかぶせる、トイレに行かせない、食事を与えない、性器に電気棒を当てる、裸で横木をまたがせる、薬物を注入する、犬を使って威嚇するなどが知られている[166]。想像すればするほど、耐えられずに死んでいった者たち、耐え抜いても肉体的・精神的に破壊された者たちの置かれた状況がいかに過酷だったかがわかる。

また、ここで噂として出てきた大佐の娘のように、父親が拷問者である

と知った子供たちが反体制側にまわり、ゲリラ闘争に参加していく例も少なからず実際にあった話であり、独裁体制が親子関係を引き裂くというケースについても作品を通して読者に伝えているのである。

第 3 節　解題 ： 短編『エクソダスについて』[“Sobre el éxodo”]

同じく短編集『ノスタルジアの有無』に収められた 1975 年の作品である。ラテンアメリカ文学史では、ミゲル・アンヘル・アストゥリアスの『大統領閣下』の系譜を引く独裁者小説と呼ばれるサブジャンルの隆盛が見られた。特に 1970 年代半ばに登場したアレホ・カルペンティエール『方法異説』[*El recurso del método*]（1974 年）、ロア・バストス『至高の我』[*Yo el Supremo*]（1974 年）、ガブリエル・ガルシア・マルケス『族長の秋』[*El otoño del patriarca*]（1975 年）が「三大独裁者小説」[167] と評されている。ベネデッティもこのブームを意識してか、1975 年に得意の短編で上記作品を執筆している。独裁者として君臨してきた大統領が一人取り残され追い詰められていく孤独な姿を、亡命者が続々と出国していく場面展開に沿って描いている。フィクション性を活かすことによって、実際には厳しい状況下にあったウルグアイ国民の亡命シーンをユーモラスな語り口で伝えている点に特徴がある。

ここでは、原文訳とあらすじを交えながら作品を紹介する。〈　〉の部分は、ベネデッティの意図を察してコメントとして書き入れてみた。書き出しは次の通り。

> **政治的理由による大移動が明らかに始まった。海外でジャーナリストたちが、その小さな国では窒息しそうな雰囲気が漂っていると書き始めた。本当に息苦しかった。外国人ジャーナリストたちは、その地での抑圧はおぞましいと書き続けていた。本当に極悪非道であった。**

他国のジャーナリストがウルグアイで情報収集をし、独裁者にとって都合の悪い情報を外電で流す。国民は国内の閉塞感に嫌気がさして出国し始める。大統領はその巻き返しのため、国民に向けて愛国心を呼びかけ、そ

の流れを止めようとするのだが、誰もラジオやテレビに関心を向けず、スイッチを切る。まず出国していくのは、反体制派の容疑者たちとその親族。次に続くのは飢餓にあえぐ人々。そしてある日、オーストラリアで労働者を大きく受け入れるという噂が流れると、妻や子供を連れた多くの労働者が出発する。さらに続いたのは、ウルグアイの主要産業である牧畜業関係者たちで、オーストラリアで家政婦募集という噂が流れると、家事を自分たちがしなければならなくなるのを嫌う貴夫人たちは夫に出国をせがむ。〈金持ち連中を揶揄している〉

次に、表現の自由が侵される。国内の交通事故件数が減ったという政府発表のニュースを見た外国人ジャーナリストが、出国者が多いのだから事故件数が減るのは当然だと指摘すれば、それは悪意のあるコメントとされ、それを転載した国内唯一の新聞も政府によって発行停止に追い込まれる。〈情報統制は独裁国家の常套手段〉

それまで残っていた将校たちも拷問相手を見つけることが困難となり、その存在意義を失ってしまう。そこで、資金提供を受けてゲリラ対策の訓練のためにパナマ米軍基地へ移動を開始する。上官が去ったことで解放感にひたる若い兵士たちはサッカーに興じる。

軍事広場でサッカーの試合をしようとしていた。しかし、祖国に忠実な者たちの全体数（サッカーの対戦人数）がFIFAの定める試合規則の２２人に達しないことに気付いた時、試合の中止が決定された。次の日、彼らは高速船で逃げ去った。

〈敢えてサッカーを話題にする着想に奇抜さが感じられ、さらに11人×2チームの22人と、わざわざ数字まで入れて滑稽さを増す描写は他の作品でもよく見られる〉

刑務所長が去っていく時には、監獄の扉は開けっぱなしのままだった。囚人たちはその状態に気づいたが、「我々を殺す罠かもしれない」「まぼろしだ」「心理的拷問だ」と言い合い、しばらく扉に近づこうとはしなかった。〈抑圧下の恐怖心に駆られた国民心理を表す〉

それでも一人の若者が勇気を出して脱獄したことで、受刑者全員が後に

続いた。めいめい道すがら、打ち捨てられていた拳銃やマシンガンを見つけて町の中心部に向かう。

広場には誰もいなかった。ブロンズのがっしりした馬に乗った祖国の英雄が、数年のうちで初めて楽観的な雰囲気を醸し出していた。また、初めてそのモニュメントは鳩の糞で覆われてはいなかった。たぶん鳩が去ってしまっていたからだ。

〈人がいなくなれば鳩も姿を消し、糞で銅像が汚れてはいないとは滑稽な描写である。この英雄とは建国の父アルティガス将軍であり、現在も独立広場に立つ騎馬像をイメージしている。ベネデッティは、歴史上ドイツのカール・マルクスよりも以前に農地改革に着手するなど人民のために尽くしていた人物として、この将軍の功績を事あるごとに高く評価している〉

以下、話の結末まで訳文を示す。

拳銃を持っていた者がゆっくりと大きな木の扉を押し、大統領府にそろりと侵入した。他の者も少し感動気味に後に続いた。なぜなら、その建物は少し近づきがたいものだったからである。上の階の部屋で大統領を見つけた。立ったまま黙って、黒い上着のポケットに手を入れていた。

「こんにちは、大統領」と年長者が言った。

そこに来る間に手に入れた拳銃を、ある一人がこっそりと年長者に手渡した。

「ごきげんよう」と大統領が言った。

「なぜ、逃げなかったのですか」と年長者が尋ねた。

「なぜなら、私は大統領だからだ」

「ああ、なるほど」

元受刑者たちは、次のたった一つの質問でお互いに顔を見合わせた。

「このいかれたやつをどうする」

しかし、だれも答えを見つけられずにいると、年長者が大統領に拳銃を渡した。

「閣下、お願いです。自分で撃ってください」

大統領は拳銃を受け取った。手が震えているのが見えた。しかし、何人かの者たちは、その震えはたばこの吸い過ぎのせいだとみなした。
「私がキリスト教徒だと君たちが知っているかはわからないが、キリスト教徒は自殺を禁じられているのだ」
「やれやれ」と年長者は言った。「そんなに型にはまる必要はありません。あなたの言うことはその通りですが、ある程度までです。閣下、あなたはキリスト教徒ですが、キリスト教徒のくずです。そんな程度の低いキリスト教徒には自殺が認められていますよ」
「そうかね」
「そうですとも、閣下」と年長者が言った。
大統領は鼻をかんで、ネクタイの結び目を整えた。
「せめて目隠しするのを許してくれないか」
年長者は他の者を見た。
「目隠しさせてもいいか」
「いいよ。目隠しさせよう」とみんなは言った。
大統領の白いハンカチは鼻をかんで汚れていたので、元受刑者の一人が机の上にあるナフキンを取り、それで彼の目を覆った。その時、大統領は拳銃を持った手を挙げ、右のこめかみに近づける前に、かすれた声で言った。
「さようなら、皆さん」
「さようなら」　冷淡な目つきでみんなが言った。喜びもせず。
奇妙な発砲音がした。腐った藁にめりこむ発射体のように。まだ轟音の重苦しい響きがこだましていた。その時、最初に戻ってきた若者たちの鳴らす太鼓の音が聞こえ始めた。

以上のように、大統領の悲劇的な死をもってストーリーは終わる。最後まで自国にとどまった大統領と脱獄した受刑者とが淡々と挨拶を交わす場面は、それが却って独裁的な大統領の孤独な姿を映し出す。そして、鼻をかんだハンカチではなく多少はきれいであろうナフキンで目隠しをする場面や、元受刑者たちが手を下すのではなく自ら死を全うさせようと大統領

自身に拳銃を差し出す場面は、皮肉交じりではあるが、悪逆な大統領といえども死に行く者への最低限の慈悲を示したと言える。独裁者も取り巻きに見捨てられれば悲しい末路が待っているのであり、作者ベネデッティは傲慢な権力基盤は脆弱なものだと憐れみの目で見つめているのである。

太鼓を打ち鳴らしながら若者たちが返ってくるという最後のシーンは、大統領の死亡による独裁体制終焉の報せを聞いて、亡命先からぞくぞくと帰国してくる人々の喜びにあふれた様子を想起させるものである。いつか祖国ウルグアイもそのような日が来ることを待ちわびる、ベネデッティの願いが込められていると言えるのではないだろうか。

第 4 節　解題 ： 戯曲『ペドロと大尉』[Pedro y el capitán]

亡命地キューバで執筆され、1979 年に出版された作品である。四つの戯曲のうちの一つにあたり、ベネデッティが頻繁に訪れていたメキシコで初上演された[168]。拷問者と被拷問者の心理戦を描いた四幕物で構成されている。人権蹂躙に対する抵抗作品として、1984 年にはメキシコ・ウルグアイ共同制作で映画化もされた。

この作品は当初は小説として構想し、タイトルも「足枷」(cepo) にする予定だった。しかし 1973 年 12 月、ウルグアイの批評家であり週刊新聞『マルチャ』でも活躍するホルヘ・ルフィネッリとのインタビューで話し合っているうちに構想を変更し、拷問を加える者と加えられる者との対話形式を採り入れることでより特徴的な作品になったという。肉体的拷問の場面をリアルに描写するのではなく、拷問後に尋問用の小部屋で展開される緊張をはらんだ心理戦にスポットを当てる。ベネデッティ曰く、舞台でのシーンが拷問と拷問の間で行われる尋問の時間であり、幕間のような設定で展開されているものと捉えることができる。つまり、別室で行われたであろう生々しい拷問の様子は二人の対話から推測させる設定となっており、それがむしろ読者や観客の想像を掻き立てる効果をもたらす。最後の場面で、尋問されるペドロと尋問している大尉との立場が逆転していくと

ころが、この作品の持つ妙味である。作品の序文は、まず次のように書かれている。

「私ならその作品を、拷問者の心理状態をドラマティックに探究するものと定義づけるだろう。なぜ、どういうプロセスを経て、普通の人間が拷問者になりうるのかという問いに対する答えといったようなものである。・・・作品はモンスターと聖人の対決ではなく、もろさと抵抗力とを持った生身の人間二人の対決である。互いの隔たりは特にイデオロギーにあり、おそらくそこには、そのほかの違いを解き明かすための手がかりがある。その違いとは、モラル、気力、人間的苦痛を前にした感受性、勇気と臆病との間にある複雑な道のり、犠牲を払う能力の多寡、裏切りと忠誠とのギャップを含むものである」

そして、ベネデッティは被拷問者を次のように捉える。

「拷問される者は、立ち上がれないほどの敗北もしくは密告を強いられる無防備の犠牲者であるばかりでなく、見かけ上の絶対的権力を負かす一人の人間、ほとんど盾のような沈黙と武器のような拒絶を使う人間、裏切りよりも死を好む人間でもありうる。・・・堂々とした、不屈で買収されない態度を守り続けるためでさえも、囚人は自身で迫真の防御を構築して、攻め落とされないという確信を持つはずである。実際にはもう死者であるという隠喩をペドロが考案した時、特に仲間や主義への忠誠を守る塹壕や要塞を築き上げている」

ここでの「死者である隠喩」とは、つまり、大尉に自分はもう死んだものと考えさせる戦術を指す。相手がどのような攻撃をしかけてきても、死んだと決め込んでいる者に対しては、拷問などはもはや何の意味もないのだということを知らしめるのである。このことにより、大尉は為す術を失ってしまい、張り詰めていた緊張状態が徐々に解けていく。逆に、突如不安感が増して、人間性の弱い部分が見え隠れし始める。もし自白させられなかったら自分の地位も危うくなると心配し出す。自分が直接拷問で手を汚せば家族からも見放されるという思いに駆られる。揺れ動くのは大尉の方であり、心の葛藤はピークを迎えることになる。

そして、次のように序文は閉じる。

「囚人においては、いずれかの政治セクトの一戦闘員を表現したくなかった。非常に厳しい弾圧は事実上ウルグアイの左翼のあらゆる範囲に及び、さらには教会もしくは伝統的政党などの別の反対セクトにまで達した。ペドロは、誰にも密告しない一介の左翼の政治囚で、死に瀕しながらも尋問者を打ち負かそうと、ある方法で屈辱を与える。四幕のどれも最後は「NO」という拒絶で締め括られる。さらに言えば、今日我々が耐えている敗北の渦中にあってさえ、私は文学（わずかな演劇）を通して、後悔や憐憫の情を呼び起こそうとする敗北主義者や泣き言を言う者ではない。我々は真実を取り戻す一つの方法として客観性を回復しなければならないし、勝利に値する一つの方法として真実を回復しなければならない」

次に、ストーリーを簡単に追ってみる。第一幕では、いくら大尉に問いかけられても、頭巾を被らされたままのペドロは一切話さない。大尉の独白が続くだけである。自白を説得されても沈黙を貫くペドロ。ここで、ペドロの別名ロムロという秘密組織での呼び名が大尉によって明らかにされる。そして、家庭状況を引き合いに出して、ペドロの弱みに付け込み、揺さ振りをかけていく。

大尉は自らを「善人」であると表明し、直接手を下す仲間とは違うことを強調する。さらに、立場の優位性を示すために、仲間のデータを寄こさなければ、ペドロの妻や子供も痛めつけられるだろうと警告する。また、仲間を売ったという疑念が持たれないように巧妙に細工をしてやるから、仲間の情報を提供しろと迫る。しかし、拒否の意思表示としてペドロの頭巾がかすかに動く。

第２場面は、かなり消耗しているペドロに対して、規則では通例被せたままにしておく頭巾を一気に剥いだ大尉が次のように問いかける。

「・・・（微笑みながら）初めましてだな。お互い顔を見合うのはよいなあ。麻布を被ったまま対話をするのは全く好ましくなかった。何らかの理由があって、逮捕者に顔を見られたくない仲間も何人かいる。

懲罰は怒りを引き起こす。将来我々がどうなるのかは決してわからない。いつかこの立場が入れ替わって、おまえが私を尋問するかもしれん。もしそんなことになったら、私はおまえよりちょっとは協力するぞ。しかし、そんなことは起きないだろうし、そんなことは期待するな。そんなことが起きないように私たちは抜かりないのだ。一方で、おまえが私の顔を知っても心配はしていないぞ。一番におまえが私のせいにできるのは質問攻めにしてきたことかな。しかし、そんなことでは怒りは生まれないと思っている。それとも怒りを生むのか。（間合いをとって）こうして頭巾なしでは、ちょっと話しづらいよな」

これに対して、初めてペドロが口を開く。

「そうだな」

この一言を聞いて大尉は一瞬喜ぶが、それも束の間、直接拷問していないからといって憎しみが湧かないわけではないとペドロが反撃し、大尉を侮辱する言葉を吐き始め、大尉の家族について触れ始める。

「・・・拷問されたばかりの者に尋問した後、妻や子にキスをするなんて、あなたにとって嫌なことにちがいない」

動揺した大尉は、反射的にペドロの口に拳骨を食らわしてしまう。

第３場面の大尉は、前回のような態度や気取った感じが少し失われて登場する。ペドロはまた頭巾を被せられ、服は引き裂かれ、たくさんの血の染みがついていて、拷問の後が痛々しい。椅子に固定された状態で不敵にも笑っている。この場面ではペドロは気が触れたか、または気が触れたふりをしている印象を与える。ここで本人確認が改めてなされる。ペドロなのかロムロなのかと。ペドロにとっては今更どうでもいいことであり、口を割るつもりはない。この段になったら死を覚悟している。それに対して大尉は、そんな芝居は通用しないと怒り出す。ペドロは切り返す。

「芝居ではない、大尉。俺は死んでいるんだ。死んでいると知った時、どんな平穏が訪れたかあなたにはわからない。だから今は、電流を流されようが、汚物に突っ込まれようが、立ちっ放しにされようが、睾丸をつぶされようが関係ない。死んでいるから関係ない。大真面目だ

し、大喜びですらある。俺が満足しているのがわからないのか」

「・・・俺は死んでいる、技術的に死んでいるんだ。わかったか、大尉。俺が気づいたとき、どんなに平穏が訪れたか、あなたにはわからない。すべては変わったんだよ。・・・」

この捨て身の戦術に、大尉は対話のトーンを変え、同情の念をやや示すが、その変化を察知したペドロは、もうそのような優しさは遅きに失していると請け合わない。その後しばらく嚙み合わない二人の独白が続くが、突如心理的変化をきたした大尉が無意識のうちにペドロを親称の tú（おまえ）から敬称の usted（あなた）で話しかけた。この瞬間から立場が入れ替わるかのように、敬称を使っていたペドロが大尉に対して親称を使うことを認めさせる。

そして、ペドロは大尉に向かって、どのような精神状態で拷問に臨んでいるのかと質問を投げかける。大尉は、自分は反共産主義者であり、フォート・グリックアメリカ陸軍基地[169]で拷問の仕方を学んだことを明かし、次のように答える。

「最初の拷問はおそろしい。ほとんどいつも吐いたものだ。しかし、明け方に吐かなくなると、その時はもうだめだ。なぜなら、4、5回朝を迎えると楽しみ始めるからだ。あなたには信じられないだろうが」

もう元には戻れないと語りながら、とにかく白状してくれと訴えるが、ペドロは頑として「NO」を突きつける。

最終第4場面では、自分のベルトを外した大尉が、瀕死のペドロの体が崩れ落ちないように椅子の背もたれに縛り付けるところから始まる。ペドロの死を覚悟した戦術は続く。二人の会話を抜粋してみる。

「もう、いい加減にしたらどうだ。もう、英雄のように振舞ったんだから。今、白状しても文句を言うような非人間的なやつはいないだろう」〈・・・〉

「死にたいんだよ、大尉、死にたいんだよ」

「しゃべらないで何の得があるんだ。痛めつけられたいのか」

「俺を痛めつけるのをやめてほしいからだよ」

「期待しないほうが良い。連中はやめるつもりはないからな」〈・・・〉

「大尉、どうして俺を殺さないんだ」

「気が狂っているぞ。私を狂わせたいんだな」〈・・・〉

そしてペドロが、大尉の名前もあだ名も、さらには奥さんの名前も知っていると明かすと、大尉は打ち負かされたような精神状態に陥る。ペドロを自白させられなければ、自分も拷問される側になるかもしれないと不安を口にする。

そして、ペドロの頑なな態度に観念し、次のような弱音を吐き始める。

「あなたは確かに我慢できるだろうよ。信じるものがあるし、しがみつくものもある。私にはないんだよ。〈・・・〉一つの名前も口にしないで死ぬのなら、私の完全な敗北だし、全くの恥だ。反対に何かしゃべってくれるなら、私が釈明する余地もあるだろう。あなたが目的を果たすからには、私の残忍さには意味がない。私が要求するもの、懇願するものはただそれだけだ。もう四つの名前ではなく、たった一つだけでよい。選べることができる。ガブリエル、ロサリオ、マグダレーナ、もしくはフェルミン。一人だけでいい。あなたにとってあまり意味のない人物、あまり愛着のない人物、あまり重要ではない人物一人だけでよい。私の言っていることがわかるか。ここでは体制を守るための情報ではなく、自分が助かるため、むしろ自分をちょっと守るためにあなたの仲間一人の名前をお願いしているんだよ。・・・さもなければ、すべてを失う。」

精神的敗北を喫した大尉は、ペドロの前に跪き懇願する。

「・・・ペドロよ、あなたにも私にもほとんど時間が残されていない。・・・あなたは死ぬが、私は残る。ペドロ、これは打ちのめされた男の頼みだ。あなたは薄情な人ではない。繊細な人だ。あなたは人を愛し、人のために苦しみ、人のために死ぬことができる。ペドロ、お願いだ。名前一つ苗字一つ、それだけでいい、言ってくれ。私のすべての要求はここまで下げた。おそらく勝利はあなたのものだろうな」

しかし、この最後の願いも空しく、消え入るペドロの「NO」に絶望した

大尉を残したまま幕が下りる。立場の逆転は抑圧者の悲哀を物語っており、抵抗者への賛歌でもある。

第5節　解題 ： 短編『ユーバーリンゲンでの手紙』[“Escrito en Überlingen”]

1984年に出版された短編集『地理』に収められている作品である。自身で訪問したことがあるのだろうか、ドイツ通であるベネデッティらしくドイツ南部のボーデン湖北岸の町をタイトルにしている。主な登場人物は、軍部で拷問に手を染める41歳の主人公アルベルト、ラプラタ沖海戦[170]で英国と闘ったナチス・ドイツの軍人で敗戦後ウルグアイに残った父親、その父親の方針に常に反発して共産主義者となった弟、ほんの短期間ではあるが恋仲となった未亡人セリアとその連れ子イネシータである。

アルベルトは幼少期から父親によって徹底的に狂信的なナチズムの考えを叩きこまれ、パナマにある米軍基地で講習を受けながら少佐の地位に就く。軍人精神を弱めるという理由から結婚願望はなく、女性関係は一過性のものでしかなかった。ただ一度だけ中尉であった時にセリアと恋に落ち、10歳前後のイネシータに「アルベルト」と親しく呼ばれ、なつかれるといった時期があった。しかし、その関係も自ら敢えて断ち切り、以来会うことを避けるようになる。それから数年後、セリアが再婚して子供を産み、二人の子供たちと仲良く暮らしていることを噂で知った。

日々の任務としては拷問を当然のこととして受け入れ、部下たちと罪の意識を感じずに実行していた。ある日の明け方、アルベルトは疲れていたので、一斉に検挙した5、6人の女学生たちに対する尋問を部下たちに委ねる。隣室からは悲鳴、号泣、殴打、侮辱の言葉が聞こえてくる。その後、一人の部下が現れ、「上官殿、最上の女を取っておきました。我々は一切その女には触れていません」とアルベルトに告げた。あまり気乗りはしなかったが、とりあえず立ち上がって、「ご苦労」と言葉を返し、頭巾を被せられたまま動けずにいた女たちの前に移動した。

中央には汚れた一枚のマットレスが敷かれ、その上には一人の女が縮こまっていた。アルベルトは規則に反して衝動的に頭巾を取る[171]。そこで見たものは、恐怖に怯え、大きく見開かれたイネシータの栗色の眼だった。「アルベルト」とつぶやく声。知り合いの女に対してどう反応するのかを期待する部下たちの気配。声に出さず黙っていることもできたであろうに、このような厄介な状況を招いたのはイネシータのせいだと言わんばかりに、部下たちに侮られないよう怒りに任せて凌辱してしまう。彼女は血だらけのただの氷の塊にしか思えなかった。彼女は処女だった。

その晩から夢の中で、「アルベルト」と呼ぶ声とともに巨大な硬い氷の上部にイネシータの顔が現れる。自分の性器が氷によって縮んで消えていく悪夢にうなされる。他の女性との性行為ができなくなり、軍医にもその経緯を相談することができず、ついには風邪と偽り、誰にも気づかれないように軍からの脱走を決意する。厳格な父親（すでにこの時点で他界していた）が生きていたら、この息子の逃亡を不名誉に感じたかもしれないと思いつつも。飛行機、車を乗り継いで向かった先は、父親が以前語っていたスイスと国境をはさむドイツ南部のユーバーリンゲンであった。

一週間ほど風光明媚なボーデン湖のほとりで精神的に落ち着いて過ごしていたが、再び同じ夢にうなされ、とうとう耐えきれないまでの精神状態へと追い詰められていく。そして、以前拷問について話した時、その任務に理解を示しつつもナチスによるホロコーストを知っていた父親が、そのような仕事には危険性すなわち「狂気」が宿っているのだと、ぼそりとつぶやいたことを思い出した。そうであるならば、狂人になるよりは自死した方がましだと一度は決意し、自身の財産の譲渡先を誰にするか（唯一の肉親の弟では決してない）を思案しながら遺書とも言えぬ気休め程度の手紙を書いてみる。憐れみや後悔からではなく、差し当たり宛名は今も生きているかどうかわからないイネシータとした。

しかし、「つきまとってやる。決してあなたを赦さない。」と詰め寄る彼女の声を初めて夢の中で聞き、腹に鋭利なナイフが突き刺さるような氷の冷たさを感じるとともに、驚きや疑念に満ちた冷淡な彼女の視線を強烈に

浴びて最終的に自殺を断念する。なぜなら、たとえ死んだとしてもあの世で再会するかもしれず、永遠にあの巨大な氷塊の上から監視され続けるのは避けられないと観念したのであり、すでに狂人になりつつあることを自覚していたからである。

この作品は拷問する側の心理状態を中心に描きながら、その忌まわしい所業から逃れるために誰も知らない場所へ移り住んだとしても、その記憶は決して消え去るものではなく、精神は破壊され、ひたすら狂人への道に転がり落ちていくのだと厳しく糾弾したものである。また、軍政下での陰惨な性暴力の一端を知らしめるものとなっている。加えて、ホロコーストの狂気を知りつつも死ぬまでナチズムを信奉し続けた父親、そして日々拷問を淡々と遂行するアルベルトのそれぞれが、共産主義組織に加入した弟と決裂する場面を描くことで、政治的・思想的立場の相違による家庭崩壊にも触れている。なお、この主人公アルベルトのようにトラウマを抱えて発狂していく拷問者もいれば、実際に自殺を選択した拷問者も少なからずいたであろうことは容易に推察できる。

第 6 節　解題 ： 小説『角の壊れた春』[*Primavera con una esquina rota*][172]

1982 年に発表され、1987 年には人権擁護に貢献した作品としてアムネスティ・インターナショナルから賞を受けた。亡命をテーマとしたこの作品では、独裁体制によって引き裂かれたある家族の一人一人の思いや立場の違いが描かれる。フィクションの章に挟まれてノンフィクションの章が立ち現れる対位法で構成されているところに特徴がある。ベネデッティをはじめとする亡命者に起きた実話に基づく体験をトピックのような形で挿入することで、フィクションに現実味を持たせようというねらいを感じる。

例えば、第 1 章でも記述した通り、1975 年にアルゼンチンのトリプル A による白色テロから逃れてきたばかりのベネデッティと、彼の滞在先に押し掛けてきたペルー捜査警察（PIP）との実際のやりとりを知ることができる章がある。そこでは、警察の対応を皮肉るとともに、再びアルゼンチン

へ戻らざるを得ない緊迫した状況が映し出される。

タイトルの「角の壊れた春」とは、縁が欠けて修復不可能な鏡のように、以前のような明るく幸せに満ちた生活を完全には取り戻せないのではないか、何かを失ってしまったのではないかという主人公の懊悩を象徴したものである。恩赦を受けて投獄生活から解放される時が近づき、他国へ亡命している家族に再会できる喜びにあふれる反面、お互いの心のすれ違いや新生活への順応に対して不安を抱く主人公サンティアゴと、そのような彼を迎える家族や仲間の心理描写を中心にしてストーリーは展開していく。その他の登場人物は、妻グラシエラ、娘ベアトリス、ラファエル（サンティアゴの父）、グラシエラの新恋人ローランド（サンティアゴの友人で元活動仲間）である。

サンティアゴは反体制活動により軍に捕まり、ウルグアイの監獄に5年間収監される。グラシエラ、ベアトリス、ラファエルはラテンアメリカの某国[173]に逃れ、サンティアゴとは検閲を通過した数少ない手紙のやりとりを通して、お互いの様子を伝え合う。手紙だけがサンティアゴにとっては生きる希望であり、失われたものへの郷愁、過去の幸せな瞬間の想起、理想化された未来の想像のためになくてはならないものであった。しかしながら、過去を思い出す作業には深い痛みを引き起こす危険性も内包されていると感じているため、ノスタルジーに浸るだけではいけないと覚悟を決めている。

一方、娘や義父と一緒に避難した妻グラシエラは、サンティアゴの思いとは別にすでに新しい道を歩み始めていた。新天地で付き合い始めた夫の友人であるローランドの存在が大きくなっていたからである。5年間という長い時間の重みに耐えられず、夫への愛情が薄れてしまっていた。国に命を捧げ自由のために闘う夫の姿に尊敬の念を抱き続けてはいる一方で、精神的にも肉体的にも我慢できるほど強くはない。もしも独裁が終わり、夫が出所すればどうなるのか、そのことを常に恐れるようになっていた。彼を傷つけ、人格を崩壊させるのではないかという恐れである。その胸中を打ち明けられた義父ラファエルも仕方ないと一定の理解を示したもの

の、果たして本当にそれでよいのかと悩み苦しむ。彼は彼で新たな女性と知り合い、また帰国後の生活の困難さを思い描くことができるため、ウルグアイにはもうすでに未練はなかった。

それでは、7歳の娘ベアトリスは自身や家族の分断された状態をどう見ているのだろうか。2歳の時に去ったため彼女には生まれた国の記憶がほとんどなく、一方で今いる場所は気に入っているが、まだ第二の祖国と呼べるものではない。アイデンティティは宙ぶらりんのままである。二つの国をつなぐのは父サンティアゴの存在があるからで、泥棒などの犯罪ではなく政治的理由によって刑務所に収監されている父親に対して誇らしさすら抱いている。覚えているはずのない出生地ウルグアイの動物園に連れて行ってもらうという不思議な夢を見る場面描写では、父親と精神的に結びついていたいという無垢な心情が垣間見える。また、少しずつ現実を直視できる年頃になりつつあるとはいえ、両親の間の愛情の希薄化、男女の機微については漠然とした感覚でしか捉え切れておらず、まだまだ幼さを感じさせる。それゆえ父親が戻ってくれば、母親は親しくしていたローランドに別れを告げるだろう程度にしか考えていなかった。

それでは、グラシエラの不義の相手であり、サンティアゴの親友ローランドの心境はどうであろうか。彼女と関係を持ったことをサンティアゴにどう説明したらよいのかと思い悩むが、グラシエラ本人から「自分が話す」と言われ、その修羅場を想像すればするほど不安で仕方がない。いよいよサンティアゴが入国審査を済ませ、スーツケースを持って現れた時、どのような顔をして向き合えばいいのかと自問する。とりあえず再会を祝ってサンティアゴと抱擁するであろうグラシエラが、こちらに目を向けた時にどう反応すべきか、あれこれと思案してしまう。サンティアゴとの関係を巡ってこの家族は今後どうなるのか、この物語の先は読者の想像に委ねるオープンエンドとなっており、サンティアゴがガラス越しに顔を見せたところで話が終わる。

この小説でベネデッティが描きたかったのは二つある。まず一つ目は、亡命や投獄によってばらばらにされた家族一人一人の不安定な心理状態

は、それぞれの置かれた立場ごとに異なること。二つ目は、しばらく共有できていなかった時間と空間によって一人一人の人間性が変えられてしまい、以前の状態を取り戻そうと思っても修復するのは大変困難になるということである。愛情は不変ではなく、往々にして変質してしまうという切なさを感じさせる作品であるとともに、多くの家族の絆がずたずたに引き裂かれていく悲劇の元凶は、本を正せば軍部による強権的支配にあるのだということを思い至らせる作品である。

第 7 節　解題 ： 小説『足場』[*Andamios*]

この作品は、ウルグアイに民主主義が再び定着し始めた 1996 年に発表された。亡命者である主人公ハビエルが、祖国に戻る際に感じる郷愁を帯びた期待感や集団的記憶から消えているのではないかという不安感、また一方で祖国に戻った後に感じる違和感や葛藤を描きながら、アイデンティティの置き場所を見つめ直す実存主義的な作品である。主な舞台はマドリード、パルマ・デ・マジョルカ、モンテビデオなど、ベネデッティゆかりの地である。

ベネデッティはこの小説をフィクションとしつつも、祖国の政治・歴史状況や自伝的要素を多分に取り込んでストーリーを組み立てており、登場人物の口を借りて自らの心情や政治的考えを吐露する場面が随所に見られる。ジャーナリストとしての主人公の姿はベネデッティそのものであり、置かれた生活事情や人間関係は異なるとはいえ、脚色を加えながらも自らを投影していることは明らかである。

亡命の地で祖国やかつての仲間たちの思い出に浸っていた主人公ハビエルは、いざ帰国してみると祖国の雰囲気や周囲の人々の変化に戸惑いを感じる。過去が元のままそっくり残っているはずもなく、また自分自身も変わってしまっていることに改めて気づかされる。そして、月日の経過とともに移ろいゆく国情や人間の心情に向き合うには、それまで引きずっていた安直な過去のイメージをやむなく仕舞い込み、新しい世界に飛び込むつ

もりで、改めて祖国に同化しなければならないことを悟る。この設定自体、ベネデッティ自身がまさに帰国に際して痛感したことを下敷きにしているのである。

主な登場人物は、主人公ハビエル・モンテスのほか、妻ラケル、娘カミラ、かつての同志であるロシオ、フェルミンたち、母ニエベである。

ハビエルは反体制活動家としてウルグアイを離れスペインへ亡命し、ジャーナリズムの職に就く。夫の行方を本当に知らなかった妻ラケルは、恐怖に駆られながらも官憲からの再三にわたる尋問をかわし、夫とスペインで合流して、その後生まれた娘カミラと三人で新生活を送る。しかし、軍部独裁が終焉し民政移管がなされると、ハビエルの望郷の念は強まり、帰るか残るかを巡って妻との関係は悪化する。結局、お互いの選択を尊重し、別れを決意したハビエルは一人祖国に戻り、対する妻ラケルはスペイン生まれの娘カミラと残る。そして、ハビエルは母親ニエベや、亡命の機会を逸して監獄で拷問に遭っていた以前の活動仲間との再会を果たす。しかし、政治に関する話題を極力避けながらの会話では、お互いの心のずれや変化、祖国の新たな雰囲気を感じ取る。それとともに自己と他者との関係の再構築や社会適応を模索することを迫られる。その過程で葛藤を繰り返し、将来への不安を抱きながら自らの居場所を求めざるを得なくなっていく。

帰国当初の場面で、妻や子供と別れて帰国を決意させるほどの「ノスタルジーが始まったのはいつからだ」と聞かれたハビエルは、「ノスタルジーには段階がある」と答えている。この場面では、一般的に亡命者が味わうと想定される心境の移り変わりがおおむね次のように示されている。

> ・・・亡命直後はすぐに帰れると思って荷を解くこともせず、周囲には無関心のままでいる。テレビニュースを見ても国際放送で自国の様子ばかりが気になるだけ。だが、次の段階に入ると、情報が届かないために仕方なしに今いる場所で起きていることに関心を持ち始める。また、日常生活に対応するには、会話で使う単語もラテンアメリカのものではなく、スペインで使われているものに置き換えざるを得なく

なる。しかしながら、時間が経って帰国を妨げていた自国の政治状況に変化が生じると、突如心がかき乱され、もしやこの亡命地に居続けたならばアイデンティティを失うのではないかという恐れに取りつかれ、歓喜をもってどころか絶対に帰国せねばと感じるようになる・・・

これと同じような心境の変化で、ついに 12 年間の亡命生活に終止符を打ち、帰国したハビエルは、首都から少し離れた海岸近くの家に住むことになる。どうしてみんなの近くに住まないのかと友人のフェルミンに問われ、「自分を見つめ直したいし、以前とは同じではなくなってしまった祖国に同化したいから、一定の距離をとる必要があるのだ。特に、どうして自分自身も以前の自分ではないのかを理解したくてね」と答えている。そして、まずは近所付き合いから始め、少しずつ親族や仲間との再会を果たしていく。帰ってきて後悔はないのかと母ニエベに問われ、期待感から後悔はないと答えてはみたものの、適応するには時間がかかることを認識していた。

すでに米国に移住していた兄姉が一時帰国した際には、奢侈な消費生活に浸かった二人との感覚のずれを感じる。また、昔の同志と対面した時にも以前とは違う感覚を拭えない。そのような不安定な心理的状況の中で、かつての女性活動家で 10 年間獄中に囚われていたロシオと男女の関係を結び、孤独感を少しでも埋めようとする。しかし、スペインに残してきた元妻や娘から近況を知らせる手紙が時々舞い込むと、ふとしたはずみで彼女らの面影が浮かび、言いようのない寂寥感に苛まれる。

最終場面では、知り合いの男の運転する車にロシオと同乗して不慮の交通事故に見舞われる。意識を取り戻した重傷のハビエルは病室のベッドの上で彼女の死を知り、この悲劇は夢うつつの中で見た魔女[174]の仕業だと吐き捨てる。結局は時間の経過をもってしても心が癒されることはなく、様々な苦悩にとりつかれたまま今後も出会いとすれ違いを繰り返しながら彼の社会生活は営まれていくであろう、と想像させて物語は終わる。

しかし、将来がそのように先行き不透明であるにしても、作者ベネデッティは主人公ハビエルに友人フェルミンとの対話の中で、「生き残る上で

最悪なのは忘却なのだ」と言わしめている。裏を返せば、悲しくて陰鬱な記憶もあるかもしれないが、絶望感に囚われないためにも過去のよき思い出を忘れないことが大切なのだという、明日への希望を抱かせる言葉とも取れる。まさに亡命を経験したベネデッティならではの切実な思いを読者に伝える作品となっている。

ところで、この「Andamios」を直訳すると「足場」となる。「足場」は文字通り、建物を建てたり補修したり、外壁や屋根の塗装をしたり、物の上げ下ろしの際に使われたりする仮設の台にあたる建築用語であるが、この小説においてはもちろん比喩として使われている。本人が「足場のシステムないしはコレクション」の体裁をとった作品と位置付けているように、一章一章を足場のように組み合わせ、75 章全体で作品を構成したところに特徴がある。祖国帰還に際して新たな気持ちで溶け込もうとするには、一つ一つの足場をうまく組み合わせて祖国の暮らしに再び適応できるように自分を作り上げていく、または作り直していくことが必要であるとの意味合いが込められているのである。

そしてまた、この小説で使われる「desexilio」、「desexiliado」という単語はベネデッティの造語[175]である。それぞれ字面では「亡命」(exilio)、「亡命者」(exiliado) の反意語であり、そのまま日本語に訳せば、「亡命を終えて帰国すること」「亡命からの帰国者」となろう。しかしながら、単に反対の意味を表す des- という接頭辞を付けただけの機械的な反意語ではないことに留意する必要がある。1982 年の小説『角の壊れた春』の中で初めて使用されたこの単語について、スペインの『エル・パイス』紙 (1983 年 4 月 18 日)[176] で本人が解説を加えているので、それに基づいて解釈してみたい。

亡命は政治的・宗教的・文化的な迫害や差別・偏見などから危険を回避し、自分の身を守るために半ば強制的になされるものである。一方でこの造語「desexilio」は、祖国に戻るか戻らないかを選択するのはその本人の意思如何であって、誰にも強制されないものであるがゆえに、祖国帰還を考える者、またそれを果たす者の苦悩や葛藤を内包したものなのである。

決して字面通りに、単にオプティミズムな亡命の終焉、待望の祖国帰還と捉えてはならず、光と影を有する語だと理解しなければならない。亡命を脱することのできた安堵感、亡命中に思い抱いていた望郷の念の強さが込められただけの語ではないということである。

この造語の裏には、帰還を果たしてもそこには祖国との乖離を実感する、ペシミズムな心情が隠されている。すなわち、以前のままの祖国のイメージを持って帰国したが、亡命期間中に風景ばかりでなく、迎えてくれる者たちも自分自身もお互いに変わっていることに気づき、ある種の違和感ないしは疎外感のようなものに苛まれることになる。「私は一体何者なのか」と。

また、国内に残留せずに亡命したことも、それが強制的であれ自主的であれ、逃げた者としてのレッテルを貼られかねず、自国にとどまって抑圧に耐えた者たちと再会した時には「臆病者」「弱虫」といった差別や偏見、批判や妬みなどに晒されるのではないかという不安をも抱え込む。元のようにすんなりと同化しようと思っていても、事はそう簡単ではない。すでにこの時代、手紙や電話などの通信手段があったとはいえ、異国の地で亡命者が祖国の変化を正確に捉えることができるはずもなく、亡命前でほぼ時間が止まってしまっている。いつまでもノスタルジーに囚われたままでいると、そのギャップに大いに戸惑いを抱かざるを得なくなる。帰郷は決して手放しで喜べるものではないのである。却って祖国喪失を感じるといった二重の苦しみを味わうことにもなりかねない。よって、「desexilio」という語を使う時には、敢えてノスタルジーに抗して、新しい世界に飛び込む覚悟で帰郷を果たさなければならないという緊張感が漂っている。「ノスタルジーに抗する」という意味合いを込めて、ベネデッティがもう一つの造語「contranostalgia」をも使用している所以である。

もしそうであるならば、たとえ祖国が民政移管を果たしたからと言っても、逡巡するケースも出てくるであろう。また、もしすでに亡命地で生活の基盤を築いていたとしたならば、それを敢えて壊してまで踏み切れるかどうか。こう見ていくと、帰郷するかどうかは誰からも強制されるもので

はなく、自身の判断でなされるべき難しい問題を宿していることが改めて理解できる。

適当な日本語訳をあてはめにくいこの「desexilio」は、洋の東西を問わず亡命者誰にでも通用する普遍的な概念として今では定着しており、この語の創造はまさに言葉に対して鋭敏な感性を発揮する詩人としての面目躍如と言ったところだろうか。そして、この単語の誕生から3年後の1985年、ベネデッティ自身も約11年半の亡命生活に終止符を打って帰郷することになるが、その際には自ら創り出したこの語の持つ意味の重さを痛感したことであろう。その心情は、詩集『バベルの孤独』所収の「遠い此処」*[Aquí lejos]*（1989年）に深く刻み込まれている。

最終章　研究のまとめ

これまでにベネデッティの生涯と政治との関わり、創作活動と作品の実際を見てきたが、ここでは彼が後世に残したメッセージをもとに、改めてその人物像や思い描いていた世界観・社会観を整理する。また、ラテンアメリカ文学史上忘れてはならない人物の一人として、その存在価値が広く認識されつつある現況に触れる。そして、本論文の締め括りには、今回の研究を活かした今後の課題を示しておきたい。

まずは、ベネデッティがキューバに終生愛着を持ち続け、擁護し続けていたのはなぜかということである。決してキューバ政府に盲従し無批判でいたわけではないことは見てきた通りだが、端的に言えば、キューバが苦しんでいるのは米帝国主義の介入や制裁によるものであって、キューバの社会主義路線に非があるわけではないという認識からである。そして、アメリカ教育評議会に招待されて米国の現実を見て以来、偽物の民主主義、奢侈で堕落した資本主義に幻滅して、その対極にある社会主義支持を選択したのだと考えるのが妥当な解釈であろう。

それゆえ彼にしてみれば、元々ヒューマニストの立場で革命を目指したフィデル・カストロが国際情勢上、反米主義の立場から社会主義に接近し

ていったことに理解を示すことができるのである。カストロが 1970 年に自己批判した砂糖増産計画の誤り、すなわち理想主義的な政策の失敗を目の当たりにしたとしても、教育面や医療面での質の高さは評価し続けていた。また、1989 年末から相次いで東欧諸国やソ連の体制が瓦解していき、資本主義の勝利、社会主義の敗北が叫ばれ、キューバの体制も硬直化しているといった否定的な見方がなされる中でも、彼のキューバに対する温かな眼差しにはほとんど変化は見られなかった。一方で、帝国主義や新自由主義に毒された米国に対する嫌悪感は最後まで拭いきれないままであった。

その嫌悪感については、2000 年のインタビュー時に語った次の言葉に如実に表れている。

> **「・・・米国は支配的超大国だ。我々ラテンアメリカでは、何年も前から米国が行使する圧力に気付いていたが、コソボ戦争以来最近のヨーロッパでも、命令するばかりで他の国が語ることに対しては全くお構いなしなのが米国だと気づき始めている。事態は明々白々であり、ソ連のようなかつてのライバルが消滅した後は、自国民が米国を打ち負かしている。・・・〈国内の混乱状況の例として、学校での銃乱射事件やネオナチなどに言及しながら〉米国は内部に問題を抱えている。だから、米国が自壊することを期待しているのさ」**[177]

それでは、武力闘争を容認する立場をとるのだろうか。キューバでも存続している死刑制度については一貫して下劣なものとして人道上反対の立場を貫いていた彼の口からは決して、「目には目を、歯には歯を」という過激で戦闘的な言葉が発せられたことはない。ゲリラ組織のように人を殺めることも正当化してはいない。トゥパマロスのリーダー、ラウル・センディックと親しい仲であったとはいえ、「3 月 26 日独立運動」の枠内にとどまっていたのはそのためである。自分は武器をとることは断じてせず、対話に基づく調整役を果たすという純粋さを持ち続けていたがゆえに、直接行動派や一部の批評家からは穏健派と見なされていた。

また、彼の描く作品の登場人物の多くが都市に生きるプチブルに属する

人々であり、共産党からは労働者大衆を描いていないという批判を浴びることもあった。こちらの指摘については至極もっともであるとし、育った家庭環境の違いために彼らの使う言葉を知らず、また思い切って彼らの輪に飛び込むほどの勇気も持ち合わせず、プロレタリアート文学のように労働者の生活の実相を描き切る自信がなかったと素直に認めている。

ただし、労働者たちから学ぶことは自分自身の人間性を豊かにするものであると認識し、彼らへの尊敬の念を忘れていたわけではなかった。それゆえにキューバの農場で肉体労働に加わったのであるが、体力が続かず、結局のところ自分の活動領域は文学の道だと自覚するに至る。それ以来、知識人という自分の領分をわきまえて革命を擁護しようと心に決めたのである。

そのことは 2005 年のインタビュー[178]で、「後悔していることは何か」と問われ、「3 月 26 日独立運動」のリーダーを 1971 年から 1973 年の一時期引き受けた経験を挙げていることからもわかる。ファシズムや帝国主義を阻止するためには、文学の世界だけに閉じこもらずに、ギブ・アンド・テイクの精神で教え学び合うことが必要と判断して政治の世界に関わったが、天職と思える執筆活動の時間を削りながら、資質もないのに政治活動のリーダーとなったことをしきりに反省している。時にはグループ内の圧力に押されて、やむを得ず自分の考えとは相容れない意見を受け入れなければならなかったことも苦痛だったようだ。

しかし、この言葉を額面通りに受け取ってもいけないだろう。もし都市生活をモチーフとした作品とは違う新たな課題に取り組んでいなければ、その後の数々の優れた作品は誕生するはずもなく、相応の政治経験があったからこそフィクションとノンフィクションの要素が絶妙に絡み合い、人々の心に染み入る作品を紡ぎ出すことができたのである。ある意味、この発言は本人の謙虚さからくるものと解釈した方がよいだろう。人々を激越にアジテートするような性格ではないことを自覚していたがために、慎ましく文学で後方支援していくことの方が性に合っているのだと自己分析しているわけである。

さて、それではこれほどまでに革命キューバを愛し、革命に未来を託すベネデッティをどのような社会主義者と見なしたらよいだろうか。彼のユートピア観は次の言葉に表れている。

「ユートピアを私は信じている。人類が全歴史においてすばらしい進歩を遂げてきたのは、夢想家たち、とりわけイエス・キリスト、フロイト、マルクスたちのおかげだ。予言していたことをおそらく完全には具体化していないけれども、多くの形で人類の進歩を助けてくれた。・・・私はみんなと同じように過ちを犯したけれども、闘ってきたことに対しては何ら後悔の念はない。私がとってきた立場は、当時私の意識が命ずることに合致したものだった。不眠症にはかからない。いつも穏やかに眠ることができた。ただし、左翼の人々が次第に集められ連行されていく時を除いては」[179]

つまり、過去の偉人たちが思い描いた夢を具体化し続けていく努力が大切なのであり、進歩を信じて闘い続けることが自分の使命だったと考えている点においては、彼の人生の歩みと照らし合わせても、史的唯物論に基づき社会変革を目指す科学的社会主義者（マルクス・レーニン主義者）ではなく、個人個人や国家・社会に対してモラル変革を求め続けた空想的な社会主義者と見なした方がよさそうである。

それでは、世界がよりよくなるように、どういう姿勢で臨もうというのだろうか。これについても、インタビューで語っている。

「・・・経済や政治のグローバル化が盛んに話題となるが、偽善のグローバル化、軽薄で陳腐なグローバル化の二つに注意が払われていないと思う。私は生来の楽天家である。そうあることが益々困難になってきているとしても。・・・しかし、決して希望を失わない。なぜなら、何度もぎりぎりの状態で、藁にもすがる思いで生き残ることができた。だんだん難しくなるけれど、生き延びることができると今では信じている。・・・老い先長くはないが、人類が生き残れるように、また人々がよりよく生きられるように、常にできるだけのことをしようと思う」[180]

ここでは、抑圧的な軍事政権と対峙している苦難の時こそ希望を捨てず前向きに生きてきたという自信と、今日的課題であるグローバル化の波や新自由主義的政策によって苦しめられているラテンアメリカの人々に寄り添い、命ある限り生存のために闘おうとする気概が感じられる。彼が示したこの姿勢は、これからを生きる我々に対して、困難な状況でも耐え忍び、自分の分野で地道に取り組めば道は開けるのだという勇気づけのメッセージを投げかけているようにも思える。

次に、文学と政治との関係の中で、自分の立ち位置をどう捉えていたのだろうか。「あなたにとって器（形式）よりも内容が重要だと考えますか」という質問に対してこう答えている。

> **「・・・素晴らしい政治的、社会的なイデオロギーを含んだメッセージを発するものの、形式がお粗末ならば、そのメッセージも台無しだ。だから形式と内容とがうまくかみ合っていなければならない。形式には大いに注意を払い、たとえ政治的なテーマを取り扱ったとしても、文学が優先であるということを決して忘れてはならない。まずは尊敬に値する文学作品であらねばならない。他のことは二の次だ」**[181]

つまり、政治的内容を含むものであったとしても単なる政治パンフレットと化したプロパガンダ作品であってはならず、精緻な構成を整えた質の高い文学作品に仕上がっていなければならないということである。しかし、その一方でパディージャ事件に揺れた 1971 年の時には、「革命あっての文学」という正反対の立場を表明していたことは先に述べた通りである。そもそもこの表明は、キューバを巡る緊迫した状況下やウルグアイの「3 月 26 日独立運動」に身を投じた状況下での判断としてなされたものと解釈すべきであり、ソ連の消滅とともに社会主義リアリズムが残影でしかなくなっていた晩年に語った上記の発言にこそ、文学と政治の狭間で葛藤してきたベネデッティの真の姿を見ることができるのではないだろうか。

ここで対比される「内容と形式」すなわち「表現の自由と枠組み」というものを、さらに「文学と革命」という言葉に敷衍して考えてみるならば、相克する二つのもののいずれを優先すべきか、非常に難しい思考・判断を

迫られていたということだろう。この世に絶対的な真理がないならば、揺らぎや葛藤を抱えながらも情勢に応じて文学と革命に挟まれた隘路を自分の信念に従って進むしかない。ゆえに過ちを犯してきたことを認めつつ、その時々で意識の命ずるところに従って闘ってきたのだと、先に示したユートピア観のところで率直に語っているのである。このことはまさに、一元的・排他的な「社会主義リアリズム」というフィルターにかけられ、政治的立場を色分けされた当時の多くの文学者たちに共通の、避けて通れぬ宿命と言えるようなものだった。

最後に、さらなる創作活動についての意気込みはどのようなものであったのだろうか。

「成功とは常に謎めいており、一級であるという保証はない。よい書き手でないのに大成功する作家もいれば、素晴らしい書き手なのに誰からも相手にされない作家もいる。私の場合はあまりはっきりしないな。思うに、ここ 10 年乃至 15 年の私の本の支持層は若者であるということだ。例えば詩のリサイタルを開いたりすると、観客の 3 分の 2 は若者なのだ。私には刺激的だよ。だって 80 歳にもなる老人が若者とつながりを持てるなんて満足この上ない。・・・きっといつも言葉の言い回しが簡潔だからじゃないかな。明瞭さという要素を得るのは難しいことだけれど。私だって読者の立場なら、とても謎めいた、ややこしい詩人たちは全く好きではない。常にマチャードやマルティのような詩人が好みだった。・・・」[182]

晩年になってから多くの若者へと支持が広がりつつある傾向に喜びを見出し、引き続きダニエル・ビグリエッティら音楽家とのリサイタルに積極的に参加するなど意気軒昂なところを見せている。

ベネデッティが亡くなったのが 2009 年の 5 月。祖国の自由解放のために共闘していた元トゥパマロス戦闘員ホセ・ムヒカが大統領に選出されたのが同年 11 月。つまり、彼はムヒカの大統領就任を見ることなく旅立ったわけで、もしその就任に立ち会っていたとしたならば、どのような言葉を交わしたことだろう。彼の訃報に接したムヒカをはじめ、タバレ・バス

ケス大統領ら政府関係者、多数の市民が遺体安置所となった国会議事堂にかけつけた。インタビューに応じたムヒカは、「我々の腐敗した姿や我々人間の在り様を皮肉交じりに描き上げた作家であり、ウルグアイ文化の重鎮の一人である」「ウルグアイで一時期不当に扱われ、多くの人々がこの小柄な男の重要性を推し量ることができずにいたことは残念なことだ」と、ベネデッティの功績を讃えている。また、バスケスも「マリオのような人物は決して死なない。その魂は種のように蒔かれるのである」と弔意を示した[183]。

ところでホセ・ムヒカと言えば、フランス・ドイツ・スペイン・アルゼンチン・ウルグアイの共同制作となるアルバロ・ブレッヒナー監督による映画「12 年の長い夜」[*La noche de 12 años*]（2018 年）を見れば、エレウテリオ・フェルナンデス・ウイドブロ、マウリシオ・ロセンコフらといかに壮絶な獄中生活を体験したかを想像することができる。このように国家テロリズムと闘い、牢獄生活を経て大統領にまで上り詰めた直接行動派のムヒカに対して、亡命生活を余儀なくされながら文学者としてペンで闘い続けたベネデッティ。アプローチの差こそあれ、祖国ウルグアイを愛し、人権擁護と平和のために尽力した同志として、いずれ劣らずウルグアイの民衆による抵抗の歴史に異彩を放っている。

ここで、もう一人の人物バルガス・リョサのベネデッティ観にも触れておきたい。2014 年 6 月にペルーの日刊紙『エル・コメルシオ』[*El Comercio*] で、大要次のように振り返っている。

まずは作家としての評価であるが、「当時としては斬新な短編と詩を書いていて、オネッティのような偉大な作家とは言わないけれども、作品に一貫性のある素晴らしい作家だ」としている。ある時点までは大変親しく、よく顔を合わせていたことを回想しつつ、お互い知り合った時には自分ほどは左寄りではなかったとし、極左グループから社会民主主義者だと見なされていたことを明かしている。そして、当時自分の方が急進的な左翼であって、その後の状況変化に従ってベネデッティが急進的な左翼へ、一方自分は左翼に対する批判者へと変わったのだと、二人の思想的立場の変遷

に触れている。そして、『エル・パイス』紙での論争後は長い間会うのを控えていたが、だいぶ経ってからマドリードで開かれた自身の本の発表会に立ち寄ってくれたベネデッティと、当時の論争をお互いユーモアをもって振り返ったと語っている。双方の確執は薄れ、懐かしさだけが残っていたようである。

「・・・マリオはとてもいい男だった。とても気持ちの良い男で、良き友人だ。・・・」[184]

思想的立場はどうであれ、ベネデッティの人間性には大いに惹かれていることがわかる。年老いた彼と最後に顔を合わせたブエノスアイレスの小さな飲食店で、別れ際に抱擁を交わしたとも語っている[185]。バルガス・リョサがノーベル文学賞を受賞するのはベネデッティの死の翌年であり、もしその報を耳にしていたら彼はどのようなコメントを発していただろうか。こちらも興味が尽きないところである。

それはさておき、死を題材にした作品の多いベネデッティ自身は、差し迫る死を前にしてどのような願いを抱いていたのだろうか。彼は遺書を残している[186]。そこに書かれてあったのは、自分の作品の保存・継承のための財団を設立し、文化の普及と人権擁護の取り組みを進めてほしいということであった。まさにヒューマニストの立場を彷彿とさせるものである。

まずは一つ目の願いを実現するために、詩人シルビア・ラゴ、音楽家ダニエル・ビグリエッティ、作家エドゥアルド・ガレアーノらが中心となってモンテビデオにマリオ・ベネデッティ財団を設立した。そして、スペインのアリカンテ大学の「マリオ・ベネデッティ　イベロアメリカ文学研究センター」と連携して作品の普及・研究をはじめ、作品の保存、再編集、アーカイブの整備に努め、財団内には博物館を設けた。そこを拠点として現在も、講演会やワークショップなどの文化活動の実施、若手作家への援助を精力的に行っている。

もう一つの願いである人権擁護については、この財団が軍政期に行方不明になった人たちの家族を支援するなどの活動を展開しており、その遺志は確実に受け継がれていると言ってよい。しかし、その遺志の完遂には今

なお難しい課題が山積している。なぜならば、ウルグアイでは民政移管以後の「移行期正義」が被害者にとっても加害者にとっても納得いくような解決に至っておらず、双方の和解への道のりは険しいからである。

そもそも民政移管に向けた合意が、軍政期に起きた人権侵害に対する免責を前提条件としていたわけで、被害者側からすれば、軍事独裁による罪を一切白紙にし、過去に目をつぶってしまえば、それで真の民主主義が取り戻せるのだろうかという不満や怒り、疑念は拭い切れなかった。また、時が経つにつれて人々の集団的記憶が薄れてしまうのではないかということも危惧されていた。一方で、ゲリラにこそ責任があるという見方や、双方とも加害者（「二つの悪魔」と呼ばれる）であると同時に、被害者でもあるという見方もあった。様々な思いの中、結局は当初の合意通り、1986年12月に免責法（No. 15. 848）が制定される。

続く1989年4月の国民投票でも、この免責法に対する支持率は57. 5%という数字[187]を示し、その有効性は民意の反映ゆえに担保され続けた。しかしながら、1998年に英国ロンドンでチリの元大統領アウグスト・ピノチェトが逮捕されたことをきっかけとして、人道に反する罪への国際社会からの厳しい目が注がれるようになった。その影響もあってか、2000年に誕生したコロラド党のホルヘ・ルイス・バジェ・イバニェス政権はそれまでの姿勢を見直すことを表明し、新たに「平和委員会」を立ち上げ、軍政期の失踪者に関する調査に乗り出すことになった。

しかしながら、2009年10月に拡大戦線のタバレ・バスケス政権下で再度実施された国民投票でも、直前に最高裁判所の違憲判決が出ていたにもかかわらず、1989年の結果と同様、民意は免責法を支持した。よってそれ以後、拡大戦線のホセ・ムヒカ政権、第二期バスケス政権、国民党のルイス・ラカジェ・ポウ現政権に至るまで決定的な変化は見られていない。

それでも真相をつきとめようとする人権団体の粘り強い活動は今なお地道に続けられている。ただし、個々の事例を詳細に調べあげていくには相当の年月と労力を要しており、たとえ証拠を挙げて容疑者を訴追する段階にまで漕ぎつけたとしても、拘留が却下されるケースも見られる。さらに

は世代交代が進み、問題そのものが自然に風化していく事態も懸念され始めている。

そのような先行き不透明な情勢の中、一つの発見がスクープとして報じられた[188]。日刊紙『エル・オブセルバドール』[*El Observador*] によると、2021 年 4 月 23 日、政治囚のための拘禁と拷問の場であった第 5 砲兵グループの倉庫で、部隊長が物品の入れ替え作業のための事前点検に訪れた際、偶然にも軍政期の文書を発見したというニュースである。これを受けてルイス・ラカジェ・ポウ大統領と国防相は、この文書を裁判所検察官と国家人権機関及び「ウルグアイ人被拘禁者・行方不明者の母親と家族の会」に引き渡し、時を置かずして公開に踏み切った。発見された箱からは 1650 にも及ぶ文書を含む二種類のフォルダと 5、6 冊の記録簿とが見つかっており、その内容は軍事クーデター前の 1970 年の軍事行動から 1985 年の民政移管までの活動記録である。今後、軍政期の犯罪や蛮行を裏付けるための貴重な資料の一つとなるであろう。

その中の「SECRET」の印が押された用紙には、軍部が諜報活動によって入手したトゥパマロスなどの組織情報、マークすべき人物の特徴や住所などの個人情報が記されている。「反政府組織 3 月 26 日独立運動に加担しているメンバー」の項目では、薄れ消えかかったタイプ文字の中からベネデッティの名前を確認することができた。メンバー 95 人が記載されたそのリストには、ベネデッティに近しいイデア・ビラリーニョ、ウゴ・アルファロ、ホルヘ・ルフィネッリ、シルビア・ラゴ、ダニエル・ビダルト、ルベン・サッサーノ、キマル・アミール、クリスティーナ・ペリ・ロッシ[189]らの名前も見られる。

最後に、ベネデッティがいかに多くの人に愛されているかを示す例をここで紹介しておきたい。まずはパルマ・デ・マジョルカ、ラス・パルマス、ウエスカなどにある街路名に、そしてマドリードにある庭園名やマドリード州リバス・バシアマドリードにある学校名にベネデッティの名が冠せられていることである。

もう一つは、生誕 100 年を記念して国際天文学連合がモンテビデオ市に

ある教育機関リセオ NO. 58 の発案を受け入れ、小惑星「5346」を「マリオ・ベネデッティ」と名付けたことである。ウルグアイのデジタル新聞『ラレッド 21』［*LaRed21*］(2021 年 5 月 18 日) によれば、その小惑星は 1981 年にすでにチリの天文台によって火星と木星の間で発見されていたが、長らく無名のままであった。この命名の決定には、ガルシア・マルケスやバルガス・リョサなど世界的ブームを巻き起こした作家たちに紛れて見落とされがちなベネデッティの存在を、世界中の人々にもっともっと知ってもらいたいという願いが込められているように思える。

いずれにせよ、このような数々の記念碑的な顕彰が示す通り、ガルシア・マルケスやバルガス・リョサのようなラテンアメリカ文学界に燦然と輝く「巨星」とは言わないまでも、慎ましくも確かな軌道を描く存在感のある星として、これからも人々に敬愛され記憶に残る作家であり続けることは間違いないだろう。

以上、本論文の目的は、強権政治や独裁体制に立ち向かい続けた彼の人生の軌跡と、文学界に果たした役割を明らかにする試みであり、彼の実像に迫る上で自分なりに立てたいくつかの疑問を解くことであった。おおむね当初の課題については達成したものと考えている。そして、このように研究を進めてきた結果、彼の広範なジャンルでの創作活動はもとより、彼の眼を通して見た 20 世紀中葉からのラテンアメリカ文学界やラテンアメリカ各国の歴史・政治状況、さらには、彼と深い関わりのあった人物の業績へと興味・関心の幅を広げることができた。

今後の研究課題としては、今回のようなアプローチとは別の形でベネデッティに関する研究を掘り下げてみたいと考えている。その切り口として、文芸批評に見られる優れた彼の才能に焦点を当てたアプローチと、独裁・抵抗や亡命以外のテーマを取り扱った作品に焦点を当てたアプローチの二つを挙げておきたい。

彼の文芸批評家としての素質や才能はすでに紹介した通り、フアン・カルロス・オネッティに見出されていたが、本人も批評眼についてはまずまずと自己評価を下し、生涯にわたり多くの評論を残している。そこで第一

の課題として、ラテンアメリカの作家をはじめ世界各国の様々な作家について書き残している作品論・作家論にあたることによって、それぞれの作家の作風や文学史上における価値をどのように捉えていたのかを探ってみたい。なぜなら、その探究の過程を通して、評論活動において文学界に果たした彼の役割、豊富な知識や教養に裏打ちされた批評家としての力量がより一層明確になると考えるからである。その際には、例えば本論文の作成にあたって参考とした、『判断力の練習』のような評論などが研究資料の一つとなるだろう。

第二の課題は、彼の短編や小説で特徴的に見られる「不条理」に着目して作品分析を進めることである。第１章第１節でも触れた代表的な短編は、いずれも簡潔ながら意外性をはらんだ緻密なストーリー展開で書かれており、結末まで目が離せない作品となっている。フランツ・カフカをはじめ多くの作家から影響を受けて磨き上げたであろう「不条理」作品における構成力を解き明かすことは、ベネデッティの創作の舞台裏をより一層知ることができるものと考える。その際、巧みに繰り出される言葉の数々や諧謔味あふれる言語的感性にも目を向けていきたい。ラプラタ圏特有のスペイン語だけでなく、亡命体験を通してその土地ごとの語彙や用法を吸収したベネデッティは、自ら生み出す造語や青少年期に身に付けたドイツ語を含めて卓越した言語能力を有する作家であったからである。

以上、新たな研究課題を簡単に示したが、これらの解決を図るためには今後も数多くの彼の作品に目を通し、関連する研究資料・情報を収集・整理・分析していく必要があり、中・長期的な研究計画を立てて、マリオ・ベネデッティに関する研究を一層深めていこうと考えている。

注

1　コロン地区に移った当初はトタン屋根のあばら家に住み、その後 20 回以上も引っ越しを繰り返したという。実際の苦労の様子が窺われる「引っ越し」[“Las mudanzas”] という短編がある。Benedetti, Mario [1993] *La borra del café*.

2 「隣人たち」[“Los vecinos”] という短編では、当時の家計のやりくりが描写されている。Benedetti, Mario[2018] *Despistes y franquezas, Cuentos completos*.

3　長編小説『ゼーノの意識』[*La conscienza di Zeno*] で知られるイタリア人作家 (1861-1928)。この作品はフロイトの精神分析の影響を受けており、トリエステを舞台として主人公ゼーノの対人関係を巡る自己省察が、「意識の流れ」の手法で克明に描写されている。フォークナー、プルースト、ジョイスらと同じく、ベネデッティが小説において影響を受けた作家の一人である。『ゼーノの意識』を知ったのは、『休戦』を発表して以降であったと語るが、自分の作風に近いことを実感している。

4　ノーベル文学賞 (1999 年) を受賞したドイツ人作家 (1927-2015)。彼の長編小説『ブリキの太鼓』[*Die blechtrommel*] を取り上げた評論「ギュンター・グラスと予知的な太鼓の連打」[“Günter Grass y su clarividente redoble”] を 1964 年に執筆。Benedetti, Mario[1995] *El ejercicio del criterio*.

5 『愛と狂気と死の物語集』[*Cuentos de amor de locura y de muerte*]、『セルバの物語集』[*Cuentos de la selva*] で知られるオラシオ・キローガ (1878-1937) からは、短編の最終部分の仕上げ方を学んだという。

6　小説『オルテンシア』[*Las Hortensias*] で知られるフェリスベルト・エルナンデス (1902-1964) からは幻想的な表現方法を学んだという。評論「フェリスベルト・エルナンデス　幻想の信頼性」[“Felisberto Hernández o la credibilidad de lo fantástico”] を 1961 年に執筆。Benedetti, Mario [1995] *El ejercicio del criterio*.

7 「歩く詩人」と言われ、都市や農村の姿を簡潔に表現する作風が特徴。少年期にスペインで過ごした経験がある。彼の生誕 100 年を記念して、評論「フェルナンデス･モレーノの 100 周年」[“Centenario de Fernández Moreno”] を 1986 年 に 執 筆。Benedetti, Mario [1995] *El ejercicio del criterio*.

8　本人へのインタビューでは、ブエノスアイレスから戻った年は「1941 年」とされている。しかし、オルテンシア・カンパネラの調査では、ベネデッティが所属していた国家財務局会計監査部の職員記録を根拠として、1940 年初頭の可能性があると指摘している。いずれにしても 1941 年から 1944 年までの間、雑誌『ロゴソフィア』に詩を寄稿しており、縁は切れてはいなかった。両親や恋人ルスとその家族がまだ信奉していたからだとされる。Campanella, Hortensia [2020] *Un mito discretísimo*, pp.36-37, p.44.　ラウムソルに抱くトラウマのような嫌悪感はいくつかの作品で見られ、特に「泥棒のように」[“Como un ladrón”] という短編で、その不信感を汲み取ることができる。Benedetti, Mario [2018] *Esta mañana*, *Cuentos completos*.

9 『マルチャ』は No.1676(1974 年 11 月 22 日) をもって廃刊となる。

10 「印刷の木曜日」[“Jueves de imprenta”] というタイトルの詩では、翌日金曜日の発行を前にした『マルチャ』編集部内のあわただしい様子が詠われている。Benedetti, Mario [1986] *Preguntas al azar*.　特集記事を扱った月刊誌『マルチャノート』[*Cuadernos de Marcha*] は 3 期 (1967-1974, 1979-1985, 1985-) にわたり発行されている。

11　歌手としても有名なウルグアイ共産党の党員で、1976 年に亡命。アルゼンチン、スペイン、メキシコで過ごし、1984 年に帰国。

12　ダモクレスとは前 4 世紀シラクサの僭主ディオニュシオスの臣下で、「ダモクレスの剣」の故事で知られる人物である。また､別のペンネームとして「オルランド･フィーノ」が使われることもあった。

13　首都モンテビデオから東へ約 100km 離れた保養地ピリアポリスを開発した大実業家フランシスコ・ピリアが創業。醸造に詳しいベネデッティの祖父の移住目的はこの会社への就職にあったが、契約上のトラブルで辞めたという因縁がある。

14　創刊号ではドイツ語の能力を活かして､カフカの次の短編三つを翻訳している｡｢人魚の沈黙｣[“El silencio de las sirenas”]、「アレキサンダー大王」[“Alejandro el Grande”]、「天国」[“El paraíso”]。また、収入源となる巻末の案内広告欄には、当時商業デザインの仕事を請け負っていた弟ラウルの広告が掲載されている。

15　ウルグアイ共和国大学の学生による文芸誌『クリナーメン』[*Clinamen*](1947-1948) のメンバーらによって 1949 年に創刊された雑誌。ベネデッティの短編「予算」[“El presupuesto”] が第 5 号に初掲載され、続く第 6・7・8 合併号からは編集協力者に名を連ねる。同誌は 1955 年に一度廃刊となるも、1963、1964 年の 2 年間だけ復刊されている。スペイン内戦による亡命者ベニート・ミリャが経営するこのアルファ書店はベネデッティの短編集『モンテビデオの人々』[*Montevideanos*] を皮切りに、1958 年からアルファ社として出版事業に本格的に乗り出す。以降彼の多くの作品を手掛けたが、1973 年の軍事クーデターで閉鎖に追い込まれた。

16　ウルグアイの文芸批評家で、1966 年に雑誌『新世界』[*Mundo Nuevo*] をパリで創刊してもいる。その際、ベネデッティは不信感から事務局の仕事の依頼を断っている。米国フォード財団から資金提供を受けた同誌はスペイン語で編集され、ラテンアメリカ文学の普及に貢献した。その後、CIA との関係を取り沙汰されて、モネガルは 1968 年に代表を辞任した。彼はベネデッティの『モンテビデオの人々』､『我々のうちの誰が』､『休戦』､『火をありがとう』などを取り上げた評論『関与した一証言者のフィクション』[“Las ficciones de un testigo implicado”] を 1966 年に執筆。Rodrígues Monegal, Emir [1992] *Narradores de esta América Tomo* Ⅱ.

17　ウルグアイの地方都市メルセデスを拠点として、1948-1959 年の間に 39 号まで刊行された。ベネデッティ曰く、経済悪化に伴う国内問題が厳しくなるにつれて右傾化する面が見られた。

18　当時ブエノスアイレスにいたオネッティとモンテビデオにいたベネデッティとの間で、1951 年 5 月 (もしくは 6 月？ 書簡に正確な日付が明記されていないため不明とされる) から 1955 年 4 月までやり取りされていた。最初の書簡は献本の返礼としてオネッティから送られた。Calaméo-Linkedln, *Juan Carlos Onetti / Mario Benedetti Correspondencia 1951-1955*.

19　学友であったミゲル、アリシア、ルーカスの三角関係がもたらす不確かな愛の行方と 11 年後の清算を描いた作品。

20　アルゼンチン人作家ロベルト・マリアーニ (1893-1946) の『オフィスの短編集』[*Cuentos de la oficina*] からインスピレーションを得たと言われる。Alemany Bay, Carmen [2000] *Mario Benedetti*, p.29. この短編集には｢オフィスのバラード｣[“Balada de la oficina”] や上司への不満を描く「リージョ」[“Rillo”] などが収められている。

21 「サンパーノ」というペンネームで、サッカーなどのスポーツネタをユーモラスな記事に仕立てたという。二大クラブチームの一つナシオナルの大ファン（ライバルチームはペニャロール）で「芝生」[“El césped”]、「左ウイング」[“Puntero izquierdo”]という短編を残しているが、晩年には商業主義に走るサッカー界を嘆いていた。他のスポーツも愛好し、特にキューバ滞在時は卓球に親しんだ。

22 「寝た子を起こせ」[*Mejor es meneallo*]に向けた記事のほか、実名で「パリでの最新映画」や「パリでの演劇」という現地ルポを『マルチャ』に送付している。“Últimos estrenos en París”, *Marcha, No.885,*“Teatro en París”, *Marcha, No.890.*

23 執筆場所はオフィスの近くにあったカフェで、お決まりの席に陣取り、1959 年 1 月から 5 か月間没頭して仕上げた。

24 主人公は 50 歳定年を半年後に控えるマルティン・サントメ。妻イサベルと死別して以降、成人した三人の子供エステバン、ブランカ、ハイメと変化のない日常生活を過ごしていたが、オフィスで知り合った 24 歳のラウラ・アベジャネーダと恋に落ちる。しかし、彼女は流感にかかり、半年も経ずに急死するという展開である。一般的に「休戦」と訳されているが、「休息」と訳されている例もある。

25 ブエノスアイレスのタリーア社から 1963 年に刊行された。

26 ノースカロライナ大学チャペルヒル校では「ウルグアイ演劇の今」、スタンフォード大学では「ウルグアイの社会・政治・文化状況」と題する講演を行った。また米国の演劇事情を視察するなど各地を回り、当初の 4 か月滞在予定を 1 か月程度延長している。

27 1961 年の作品。Benedetti, Mario [1968] *Montevideanos.* 岸本静江訳として、蔵原惟人編『世界短編名作選』[1978] に収録されている。

28 Benedetti, Mario [1961] *Poemas del hoyporhoy.*

29 「ストローテイル」と英訳 (straw tail) に倣ったが、細く弱々しい尾 (cola) を連想させる麦わらの端の部分を指して「罪悪感」を意味している。「恐れから臆病へ」[“Del miedo a la cobardía”] の章では、「cola de paja」とは、「恐れ」(miedo) という精神状態ではなく、「臆病」(cobardía) な態度に至る前段階の精神状態を指すスラングであると本人が説明している。この作品はとても攻撃的な内容だとしてベニート・ミリャのアルファ社が発行を拒んだため、アシール社に持ち込まれて刊行された。

30 ベネデッティは当時の国内の状況を「ウルグアイは共和制を獲得した世界で唯一のオフィス」と皮肉交じりに語っている。

31 大統領任期 1931-38 年、コロラド党。

32 大統領任期 1919-23 年、コロラド党。35 歳の若さで就任したバジスモ路線の継承者。

33 「上から見る」[“Mirar desde arriba”] の章。Benedetti, Mario [1970] *El país de la cola de paja.* また、ブルムの行動に対する国民の反応の鈍さを登場人物たちに語らせている短編「中心街への探検旅行」[“Safari al centro”] もある。Benedetti, Mario [1993] *La borra del café.*

34 銃声を聞いたベネデッティは、回送中のバスの車内に身を隠した。

35 二人を比較検討した評論「バジェホとネルーダ：影響を及ぼす二つの様式」[“Vallejo y Neruda: dos modos de influir”] を 1967 年に執筆。Benedetti, Mario [1995] *El ejercicio del criterio.*

36　1958 年創設。第 1 回受賞作はルイス・ゴイティソーロの『郊外』[*Las Afueras*]、第 4 回受賞作はバルガス・リョサの『都会と犬ども』[*La ciudad y los perros*]。この時は接戦の末、メキシコ人作家ビセンテ・レニェーロ (1933-2014) の『左官職人たち』[*Los albañiles*] が受賞した。その後、この『火をありがとう』は社主セイクス・バラルの助言に基づき、いくつかの章を修正の上、完成を見た。

37　本人は当時の検閲官長に理由を問い質す手紙を出し、回答を受け取っている。他の出版社も発行を請け負おうとしたが、スペインでの発禁は長期間解けなかった。

38　ウルグアイの作家兼ジャーナリストで、『マルチャ』や拡大戦線にも関わり、1977 年スペインへ亡命、1986 年メキシコで客死。

39　編集責任者は作家兼ジャーナリストのフリオ・セサル・プッポ (1903-66)。先駆的な漫画家フリオ・エミリオ・スアレス (1909-65) らが集まって創刊された。

40　滞在中に意気投合した詩人ロベルト・フェルナンデス・レタマールに送った詩である。Benedetti, Mario [1998] *Contra los puentes levadizos*, pp. 48-55.

41　ホセ・エンリケ・ロドー (1871-1917) は、功利主義を批判した評論『アリエル』[*Ariel*] で知られる。

42　小説『低開発の記憶』[*Memorias del subdesarrollo*] で知られるキューバの作家。雑誌『カサ・デ・ラス・アメリカス』の編集委員でもあった。1979 年から米国に移住。

43　戯曲『リサンドロ』[*Lisandro*]、『トゥパク・アマル』[*Tupac Amaru*]、評論『ラテンアメリカにおけるアナーキストたち』[*Anarquistas en América Latina*] で知られるアルゼンチンの作家で、ビデラ軍事政権から逃れるため 1976 年から 1984 年までスペイン、メキシコに亡命。反政府活動に加わっていた二人の子供は拉致され、行方不明となった。

44　〈El Centro de Investigaciones Literarias〉の略。

45　1967 年 11-12 月号 (No. 45) から編集の協力をし、記事も執筆している。

46　ハバナ滞在中の 1967 年から 1971 年にかけてインタビューを行った。残りの 8 人はアルゼンチンのフアン・ヘルマン (1930-2014)、キューバのエリセオ・ディエゴ (1920-1994)、エクアドルのホルヘ・エンリケ・アドウム (1926-2009)、ウルグアイのカルロス・マリア・グティエレス (1926-1991)、イデア・ビラリーニョ、エルサルバドルのロケ・ダルトン、チリのゴンサロ・ロハス (1916-2011)、ニカノ―ル・パッラ (1914-2018) である。ただし、パッラへの取材はチリ旅行中になされている。

47　1968 年に 2 回ほど噂が流されたと、11 月 1 日発行の『マルチャ』紙上で述べている。“Benedetti Suicida”, *Marcha, No.1423*.

48　アフリカ統一機構 (OAU) に加盟する各国の代表だけでなく、各地の武装抵抗組織の代表も参加した。フランスから独立した革命後のアルジェリアについて、「ゆっくり社会主義への道を歩んでおり、もしキューバのように急速なテンポで進めようとしていたら革命は失敗していただろう」との見解を述べるとともに、新たな搾取形態が浸透し始めているとの懸念を抱いている。演劇はアフリカの言語で上演されていたので鑑賞を控え、映画鑑賞やシンポジウムを中心に参加した。また、熱狂する街頭パレードにも印象付けられたと述べている。

49　小説に描かれている通りにトゥパマロスたちが下水溝から逃げたことで、ベネデッティ本人は驚くと同時に、アイデアを提供したのではという疑念をもたれて困惑したと語っている。

50　パディージャ自身は 1992 年に、自己批判の一部は警察やカストロらが書いたことを認めている。

エステバン、アンヘル；ステファニー・パニチェリ〈野谷文昭訳〉[2010]『絆と権力』、p. 52.

51　集団指導体制とは1952年憲法で廃止された大統領制にかわる9人の執政官による評議会制度である。1955年から開始、1967年憲法で廃止される。

52　通称ベベ。1945年からモンテビデオ市の弁護士事務所に勤め、1948年にウルグアイ社会党（PSC）へ入党。すぐに青年部組織で頭角を現す。1957年からウルグアイ西部のパイサンドゥーに移り、農業組合の顧問となる。1961年、北部のベジャ・ウニオンでアルティガス・サトウキビ労働者組合を結成。

53　〈Unión de Trabajadores Azucareros de Artigas〉の略。

54　詩集『近くの隣人』（1965年）所収。Benedetti, Mario［1985］*Noción de patria; Próximo prójimo*.

55　二人のサトウキビ労働者と共に土地調査中にアルゼンチン側に迷い込んだ際、一時逮捕された。しかし、強制送還扱いになるところを両国間の引き渡し手続きが厳密さを欠き、運よくすぐに釈放されている。

56　UTAAの活動家や社会党（PSC）の過激分子のほか、毛沢東主義の「革命的左翼運動」（Movimiento de Izquierda Revolucionario, 略称MIR、ホセ・ムヒカ所属）、ウルグアイ・アナーキスト連盟（Federación Anarquista Uruguaya, 略称FAU）、カストロ主義の「東方革命運動」（Movimiento Revolucionario Oriental、略称MRO）から派生した「農民支援運動」（Movimiento de Apoyo al Campesinado, 略称MAC）などが挙げられる。この「コーディネーター」は1963年初頭に現れ、組織立ったのはその年の冬頃からと言われる。1964年に主導したデモ行進では、地下に潜伏中のラウル・センディックをシンボルとして、「土地を求めて、センディックと共に」を合言葉に、サーベルを振り回す警察騎馬隊や銃、催涙ガスでの威嚇に対峙した。トゥパマロスの誕生によってこの組織は消滅する。

57　1780年のペルー暴動を引き起こしたトゥパク・アマル2世の名に由来し、チェ・ゲバラのフォキスモの影響を受けている。「コーディネーター」内で闘争方針を巡る確執が生じたため、各組織のメンバーがウルグアイ南部のパルケ・デル・プラタに集まり、8章からなる規則を検討し合い、1965年7月には「トゥパマロス」の原型を誕生させる。1966年1月に大会を開催し、正式名称は「国民解放運動トゥパマロス」となった。FAUは方針を拒否して参加せず、MIRの多数派や個人活動家などの多くも路線の違いからその後に離脱した。Reigosa Pérez, Guillermo［2010］*La Federación anarquista uruguaya*, pp. 9-20. Fernández Huidobro, Eleuterio［1994］*Historia de los tupamaros, t.2: El nacimiento*, pp. 69-81.

58　このゲリラ闘争の様子は、フランスとイタリアによる共同制作映画「戒厳令」［*État de siège*］（1972年、監督コスタ・ガヴラス、主演イヴ・モンタン）で窺い知ることができる。監督ガヴラスは『マルチャ』No. 1636（1973年3月23日）のインタビュー記事で、その撮影の意図を語っている。

59　『マルチャ』No. 1530（1971年1月29日）にベネデッティの記事が久しぶりに掲載されているところから推定した。

60　共産党員として1957年の稲作農民のストライキ現場を取材した時に、すでにラウル・センディックと知り合っていた。彼に勧められて『サトウキビ労働者の反乱』を執筆し、その後トゥパマロスに加わる。1970年には政治部門の責任者となり、「3月26日独立運動」を創設する。この構想は

1970 年 10 月チリでアジェンデ政権が選挙に勝利したことを意識してのものであった。毎週開かれていた「3 月 26 日独立運動」の会合には参加せず、別途ベネデッティら幹部たちと会合を持っていた。1972 年 5 月逮捕。詩人、ジャーナリストでもあり、2005 年にはモンテビデオ市文化部長に就任している。

61　Francisco Martínez Ruesta, Manuel［2020］“Los orígenes del Movimiento de Independientes 26 de Marzo”, *Revista de la Red de Intercátedras de Historia de América Latina Contemporánea, Año 7, Nº12*, p. 158.「3 月 26 日独立運動」は 1973 年 6 月のクーデター後、解散に追い込まれた。

62　マウリシオ・ロセンコフから依頼されて参加しており、トゥパマロスには所属していなかった。彼の自宅はトゥパマロスの幹部との会合に時々使われ、ベネデッティも出入りしていた。1971 年 3 月から 1972 年 5 月まで隔週で発行された「3 月 26 日独立運動」の雑誌『クエスティオン』［*Cuestión*］の代表者であった。この雑誌は政治・経済を扱った理論誌にも関わらず、第 4 号にはベネデッティの短編『試練のリレー』［“relevo de pruebas”］が掲載されている。諜報機関からスパイ行為を依頼された女がその対象である既婚の共産主義者を愛してしまい、その道徳的罪を神父に告白するといったストーリーである。

63　港湾労働者組合の指導者で、拡大戦線の方針には異論を唱えていたトゥパマロスの一人ではあったが、1971 年 11 月の拡大戦線の選挙運動中には、刃物でリベル･セレグニを襲った暴漢に立ち向かった。（注 67）サッサーノの熱気あふれる演説は、平均年齢 20 歳であった「3 月 26 日独立運動」の若者たちを引き付けていたと言われる。Aldrighi, Clara［2009］*Memorias de Insurgencia, Historias de vida y militancia en el MLN-Tupamaros.1965-1975*, pp. 430-431.

64　銀行組合の指導者で、トゥパマロスの政治部門にも所属していた。マウリシオ・ロセンコフからベネデッティやダニエル・ビダルトを加えることを打診され、「3 月 26 日独立運動」の創設に関わる。度重なる家宅捜査を受けていたが、「3 月 26 日独立運動」の合法性を盾にしていた。身の危険を感じて 1972 年末にチリへ亡命したが、ピノチェト独裁の始まる前にアルゼンチンに移ってトゥパマロスの再建に加わる。1974 年末にはトゥパマロスから離脱し新組織を立ち上げるが、1975 年にスウェーデンへ逃げ、最終的にフランスにたどり着く。同上 pp. 423-456.

65　ウルグアイ共和国大学で高等教育に関する研究や改革に従事していた人物で、トゥパマロスには所属していなかった。民政移管後は大学の再建に取り組んだ。

66　幹部にはコロラド党出身の政治家セルマール・ミケリーニ（1924-1976）、国民党出身の政治家エンリケ・エロ（1912-1984）、組合指導者で統一行動グループ（GAU）の創設者エクトル・ロドリゲス（1918-1996）、共和国大学教授（のち学長）サムエル・リヒテンシュタイン（1934-2018）らが名を連ねた。ベネデッティは、拡大戦線の機関紙『ラ・イデア』［*La Idea*］にも関わっている。同上 p. 29.

67　拡大戦線が選挙運動のため車列を連ねて各地を回った際には、反対派による投石や発砲を受けた。また、刃物でのセレグニ暗殺未遂事件も起きている（注 63）。

68　1973 年のウルグアイの軍事クーデター後、ベネズエラへ亡命。1983 年 11 月のマドリード近郊での飛行機事故により不慮の死を遂げる。ベネデッティにとって、同じ「45 年世代」に属する仲間の死は悲痛なものであった。

69　実際の就任期間は短い。1971 年 10 月代理採用、1972 年 1 月継続の更新、同年 6 月正式採用、亡命後の 1974 年 1 月アルゼンチンから書面で辞任を申し出て、同年 2 月受理された。Campanella,

Hortensia［2020］*Un mito discretísimo*, p. 165.

70　学歴証明の代わりとしてキューバの文学調査センター（CIL）での実績を応募用紙に記入したという。Fornet, Jorge［2021］“Mario el cubano”, José Carlos Rovira, Mónica Ruiz Bañuls y Víctor Manuel Sanchis Amat eds., *Cien años de Mario Benedetti*, p. 171.

71　投票結果は『マルチャ』No. 1582（1972 年 2 月 25 日）参照。モンテビデオ市内に限定した場合の拡大戦線の得票率は約 30％という高さであった。

72　一説ではゲリラ死者数約 300 人、逮捕者数約 2000 人とされる。

73　ダニエル・アンソニー・ミトゥリオーネを誘拐して一週間後、アジトを発見され逮捕される。1970 年 8 月から約 1 年間服役していたが、1971 年 9 月にプンタ・カレタス刑務所から地下トンネルを掘って脱獄。彼やホセ・ムヒカを含めた 111 人（106 人の政治囚とその他 5 人の囚人）が逃亡した。しかし、1972 年 9 月に再逮捕される。

74　センディックは 1959 年からウルグアイ社会党の幹部になる。弁証法的唯物論を好まず、ウラジミール・レーニンを嫌い、ローザ・ルクセンブルクや建国の父アルティガス将軍に傾倒していた。一方、ベネデッティは本稿でも記した通り、1962 年の国政選挙で同党から立候補していた。

75　地下活動中のセンディックは 1968 年 10 月末ハバナを訪れており、その時ベネデッティや港湾労働者組合の指導者ルベン・サッサーノと行動を共にしていたとされる。Góngora, Sergio［2007］*Raúl Sendic, el primer tupamaro*, pp. 61-62.　おそらくフィデル・カストロに闘争支援を求めるのが目的であったと思われる。1967 年 8 月には『ラテンアメリカ連帯組織』（OLAS）が創設されており、トゥパマロスの中にはキューバでゲリラ活動の訓練を受けたり、住宅建設に従事したりした者もいる。1960 年の初訪問以来すでにキューバとのつながりのあった彼は、チェ・ゲバラからボリビア民族解放軍への参加を打診された際には、自国の闘争を優先するとして断っていたという経緯もある。

76　アルゼンチンの著名ジャーナリスト、クリスティーナ・ムッチによるテレビ番組で本人が断言している。また、詳細は説明していないが、「トゥパマロスはスペイン武装組織『バスク祖国と自由』（ETA）とは違う」と漏らしている。Mario Benedetti en Los siete locos.（https://www.youtube.com/watch?v=66NJe5o7D8o）. また、次の文献でも確認できる。Ruffinelli, Jorge［2008］“Conversación intemporal con un Escritor ‘sin tiempo’”, Greg Dawes ed., *Mario Benedetti, autor uruguayo contemporáneo: estudios sobre su compromiso literario y político*, p. 265.

77　キマル・アミールは、「3 月 26 日独立運動」の幹部であったダニエル・ビダルトやドミンゴ・カルレバーロもトゥパマロスではないと証言している。Aldrighi, Clara［2009］*Memorias de Insurgencia, Historias de vida y militancia en el MLN-Tupamaros.1965-1975*, p. 431.

78　〈Confederación Nacional del Trabajo〉の略。各労働組合の独自性を保ちつつ連携し合うことで合意し、1964 年に結成された。

79　このゼネストはクーデター発生当日の 6 月 27 日から 7 月 11 日までの 15 日間続き、多くの逮捕者を出した。リベル・セレグニは 7 月 9 日に逮捕される。

80　本人が正確な日付を失念しているので、以下の記述に従い「11 月当初」とした。Fornet, Jorge［2021］“Mario el cubano”, José Carlos Rovira, Mónica Ruiz Bañuls y Víctor Manuel Sanchis Amat eds., *Cien años de Mario Benedetti*, p. 171.

81　大統領任期 1981 年 9 月 -1985 年 2 月、無所属。

82　亡命先のアルゼンチンから寄稿したと思われる「『休戦』とその背景」[“〈La Tregua〉y su contexto”]という記事では、原作とは異なる状況設定で映画制作がなされたことへの不満を述べ、監督セルヒオ・レナンとの契約時における確認不足を反省している。これはベネデッティにとって、廃刊に追い込まれた『マルチャ』での最後の記事であった。No.1674(1974年11月8日)。『休戦』はコロンビアでは1980年にテレビドラマ化された。

83　〈Alianza Anticomunista Argentina〉の略。頭文字Aを3つ並べてトリプルAと呼ばれた。1973年に結成された準警察組織で、ペロン大統領夫妻の側近であったホセ・ロペス・レガらが暗躍した。

84　〈Policía de Investigaciones del Perú〉の略。

85　Fornet, Jorge [2021] “Mario el cubano”, José Carlos Rovira, Mónica Ruiz Bañuls y Víctor Manuel Sanchis Amat eds., *Cien años de Mario Benedetti*, p.172.

86　ペルーでは1976年3月、三軍代表による統治評議会が設立され、軍内左派を追放した右派が権力を完全掌握した。後藤政子[1982]『現代のラテンアメリカ　この激動の20年』p.208.　この政変によって前回の滞在時より厳格な対応がとられることを危惧した結果、短時日で出国したと推測される。

87　軍部の悪逆非道ぶりが描かれた短編「対岸」[“La vecina orilla”]には、マチャードの亡命と詩に触れた箇所がある。Benedetti, Mario [1980] *Con y sin nostalgia*.

88　大統領任期1976年9月-1981年9月、国民党。

89　公式には1975年11月発足。アウグスト・ピノチェトの右腕であった諜報機関の長マヌエル・コントレーラスによってチリで招集され、アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイ、ボリビアの代表が出席した。米国国務長官ヘンリー・キッシンジャーが陰で関与していたと言われる。作戦のピーク時の1976年にはアルゼンチンが拠点となっており、その一つとして首都ブエノスアイレスのフロレスタ地区にあった「洞窟」(La Cueva)または「庭」(El Jardín)と呼ばれていた秘密の監禁所で拷問が行われていた。正面には「オルレッティ自動車」という看板を掲げ、偽装されていた。現在は歴史的記憶遺産としての博物館になっている。そこで拷問を受けた後、ウルグアイに移送され、刑務所をたらい回しにされた挙句、殺害され行方不明となった者も数多くいる。また、このコンドル作戦は、活動家の潜伏する欧米の地にまで追っ手を差し向けて実行されてもいた。

90　誘拐された幼児や拘束された妊婦が監禁所で産んだ乳児は「戦利品」と呼ばれて売買されたり養子に出されたりした。多くの養父母には詳細な事実は伏せられていたと言われる。軍医の発行した出生証明書などを手がかりに後年、行方不明の子供の発見につながったケースがある。

91　5月18日ブエノスアイレスで捕まり、20日に殺害された。この時、リストの2番目に挙げられていた国民党議員のエクトル・グティエレス・ルイスほか、トゥパマロス戦闘員数人も暗殺されている。

92　Benedetti, Mario [1977] “Zelmar”, *La casa y el ladrillo*.　ミケリーニに捧げるそのほかの作品としては、1978年5月にメキシコでの講演で語られた評論「どうしても死ねない二人の死人」[“Dos muertos que no acaban de morir”]がある。Benedetti, Mario [1979] *El recurso del supremo patriarca*.

93　ネルソン・マラの短編『ボディーガード』[*El guardaespaldas*]で、同作品は『マルチャ』No.1671(1974年2月8日)に掲載された。マラ本人も投獄され、釈放後はスペインへ亡命。編集主

幹のウゴ・アルファロも投獄の憂き目にあう。

94　77 歳時、1997 年のインタビュー。マヌエル・ガリチはグアテマラ共和国の教育大臣・外務大臣を歴任し、1963 年からキューバに移住していた。Emisora Habana Radio［2011］*Mario Benedetti: "Cuba ha sido siempre una palabra muy importante para mí".*

95　「亡命（アラマールの誇り）」［"Exilios (Los orgullosos de Alamar)"］という章で、アラマール地区での住宅建設の様子や亡命者の生活の様子が記述されている。Benedetti, Mario［1989］*Primavera con una esquina rota.*

96　Benedetti, Mario［1979］*El recurso del supremo patriarca.*

97　同名タイトルの詩集が二人の写真入りでマドリードのビソール社から出版されている。ビグリエッティは 1972 年に一時期投獄され、亡命。民政移管前の 1984 年 9 月に帰国。彼についてベネデッティは評論『ダニエル・ビグリエッティ』［*Daniel Viglietti*］を 1974 年に執筆。

98　ウルグアイ詩人・外交官エンリケ・ラウル・エストラスラス・モンテロ（1942-2016）の祖父にあたる。

99　最後の数行で「政府がマルティの思想を再び支持することのできる日が来るなら、ウルグアイは本当に自由になるだろう。その日は来る、間違いない」と未来に向けての希望を述べている。Benedetti, Mario［1979］*El recurso del supremo patriarca*, pp. 121-133.

100　所収の「20 年前」［"Veinte años antes"］という詩では、亡命地キューバで「一本の木、新しい矢、ミサイルのように立ち上がった」と、革命達成時のカストロの勇姿を思い描きながら詠っている。また、ホセ・マルティを称揚する詩として「告知人ホセ・マルティ」［"José Martí pregonero"］も収められている。

101　投票結果は以下参照。Servicio Paz y Justicia-Uruguay［1989］*Uruguay Nunca Más: Informe sobre la violación a los derechos humanos (1972-1985)*, p. 100.

102　キューバのアラマールに住んでいたウルグアイ人亡命者たちもこの国民投票の結果に湧いたが、その様子は注 95 で触れた章に描かれている。

103　メキシコ国外では無名だったフアン・ルルフォを引き立てたのがベネデッティだと言われる。1955 年にルルフォの小説『ペドロ・パラモ』が発表されるや、評論「フアン・ルルフォと地面すれすれの煉獄」［"Juan Rulfo y su purgatorio a ras del suelo"］を執筆している。説明的な叙述ではなく調和のとれた逸話をさし挟み、リアリズムと幻想の配分を意識してよく練られた作品であり、魔術的リアリズムの開拓者の一人として小説に新しい道を切り開いたと高く評価していた。1958 年時点でもラプラタ圏では知られていなかった作家だとしている。

104　1983 年はまだウルグアイに戻れる状況にはなかったが、ブエノスアイレスで開催されたブックフェアに招待され、トリプル A から逃れて以来のアルゼンチンに久しぶりに戻ることができた。ウルグアイからも多くの人たちが駆けつけた会場は熱気であふれ返っていたと、インタビュアーのクリスティーナ・ムッチが回想している。（注 76）

105　スペインにいた知識人たちから「カストロ主義者」と非難を浴び、執拗な攻撃とその対応に疲弊して、1984 年 10 月に一度『エル・パイス』紙を離れている。

106　マドリードやウルグアイに移ってからも 2001 年まで毎夏、妻と共にバカンスで同島を訪れていた。Campanella, Hortensia［2020］*Un mito discretísimo*, pp. 250-251.

107　二人はそれぞれチャマルティンのプロスペリダー地区に住んでいた。

108　80 歳時、2000 年のインタビュー。Roffé, Reina［2000］*Entrevista a Mario Benedetti*.

109　Benedetti, Mario［2010］*Geografía*.

110　アムネスティ・インターナショナルは 1983 年 4 月の調査に基づき、囚人の釈放、拷問防止の措置、失踪者の調査などを求める覚書を時の大統領グレゴリオ・アルバレス宛てに提出したが、何らの対応も見られなかったので、報告書『ウルグアイにおける人権侵害』を刊行した。それによると 1983 年末現在、ウルグアイには男性約 670 人、女性約 130 人、計約 800 人の政治囚がいたとされる。アムネスティ・インターナショナル［1985］『アムネスティ年次報告書 1984』p. 224.

111　収監中秘かに書き綴っていたラウル・センディックの『経済政策に関する省察 〈獄中ノート〉』の原稿が、1983 年末秘密裏に獄外へ持ち出され、釈放前年の 1984 年 9 月にメキシコの出版社から発行された。その序文を書いたのがベネデッティである。経済分野は門外漢と断った上で、単なる数字の説明ではなく、人間と経済とのつながりに焦点を当てた血の通った経済評論であると紹介している。また、センディックの人物像や「人質」と称されたトゥパマロス 9 人の名前を挙げ、その過酷な獄中生活についても記述している。Sendic, Raúl［1984］*Reflexiones sobre política económica: apuntes desde la prisión*, pp. 7-16.

112　1963 年にセンディックらとスイス射撃クラブを襲撃した内の一人。その際、運転を担当したが、逃走車両を横転させた。パンド市の占領時に逮捕。1971 年 9 月、プンタ・カレタス刑務所から脱走した 111 人の内の一人。1972 年に再逮捕。1999 年から上院議員となり、ホセ・ムヒカ政権では防衛大臣を務める。

113　投票結果は以下参照。El País, 18 de abril de 1989, *El 57% de uruguayos apoya al Gobierno al optar por la 'ley de caducidad'*.

114　1985 年から 1986 年の間に書かれた詩で、帰国直前・直後の心境などを詠っている。

115　以前からベネデッティの詩を音楽活動に活かしていたアーティストには、ダニエル・ビグリエッティのほか、アルゼンチンのナチャ・ゲバラ、アルベルト・ファベーロ、スペインのジョアン・マヌエル・セラットらがいる。ナチャは 1972 年頃からベネデッティの詩「愛しているよ」［”Te quiero”］などを歌っていたアルゼンチンの反体制派歌手であり、トリプル A から脅迫を受け、亡命生活を送った経験がある。ベネデッティはナチャとファベーロに詩集『緊急事態の歌詞』［*Letras de emergencia*］(1973 年) 所収の「歌うための詩集」［“versos para cantar”］を捧げており、アルゼンチン亡命中は二人の世話になっていた。ジョアン・マヌエル・セラットが曲をつけた『南もまた存在する』［*El sur también existe*］というタイトルのアルバムが 1985 年にリリースされている。

116　スペインの「27 年世代」に属し、詩集『陸上の船員』［*Marinero en tierra*］などで知られたアルベルティは、スペイン内戦時にパリへ、さらにアルゼンチン、イタリアへと亡命した。フランコ総統死後の 1977 年に帰国している。

117　小説『白の闇』［英訳版 *Blindness*、原題 *Ensaio sobre a Cegueira*］で知られ、1998 年ノーベル文学賞に輝いたサラマーゴは、2003 年のハイジャック事件に関連した銃殺刑執行を機にキューバ政府擁護を取りやめた。ベネデッティ死去の翌日には、『エル・パイス』紙に友人であり兄であり［“un amigo, un hermano”］という記事を寄稿し、彼の功績を讃えている。

118 「コーヒーカップの底にたまった沈殿物のように記憶の片隅に残ったもの」という意味合いで

付けられたタイトルである。この作品には、登場人物を通して米国による広島・長崎への非人道的な原爆投下を批判した「そのわずかなバランス」[“Ese poco de equilibrio”]という章もある。

119　相矛盾する意味の言葉を組み合わせて表現効果を高める修辞技法。

120　全日程が記載された大会パンフレットは以下参照。
(https://www.cervantesvirtual.com/portales/mario_benedetti/congreso_1997/).

121　この「死のフライト」と呼ばれる残虐行為は、実行に関わったアルゼンチン海軍将校の一人アドルフォ・シリンゴの証言（1995 年）によってその詳細が明らかとなった。実話をもとに創作されたこの作品は、上空から生きたまま海に突き落とされて死亡した囚人番号「19」の男が、ファリアス大尉の前に突如亡霊として現れ、彼の家族の前で罪の深さを思い知らせるというストーリーである。

122　1995 年から 2001 年までの詩を編んだもの。

123　所収の「手帖」[“Agenda”]では、家族の名前の紹介やドイツ系の初等学校をやめるきっかけとなったナチス式敬礼導入に対する父親の怒りに触れている。

124　Ibáñez, Quintana Jaime [2006] *La Poesía Cubana de Mario Benedetti*.

125　注 94 に同じ。

126　農牧業体験の様子は『マルチャ』No. 1449（1969 年 5 月 23 日）のインタビュー記事を参照。詩「畝」は以下参照。Benedetti, Mario [1974] “El surco”, *Cuaderno cubano*, pp. 68-71.

127　後藤政子 [1998]『90 年代のキューバにおける農業政策転換の基本理念』p. 6.

128　Ruffinelli, Jorge [2008] “Conversación intemporal con un escritor “sin tiempo””, Greg Dawes ed., *Mario Benedetti, autor uruguayo contemporáneo: estudios sobre su compromiso literario y político*, p. 268.

129　Benedetti, Mario [1974] “El estilo joven de una revolución”, *Cuaderno cubano*, p. 23.

130　Inter Press Service [1995] *Cuba-Uruguay: Benedetti aplaude visita de Fidel Castro*.

131　注 94 に同じ。

132　Benedetti, Mario [1986] *Preguntas al azar*.

133　1965 年 4 月に「別れの手紙」をカストロに渡し、コンゴでゲリラ活動を展開。その失敗後はタンザニアを経て 1966 年 3 月からチェコスロバキアのプラハに潜伏していた。そしてカストロの説得に従い、ウルグアイ人名義の偽造パスポートを使用して秘密裏に 7 月キューバに一度戻るが、10 月にはボリビアへ向けて再出国していた。

134　大会当日に読み上げられた演説原稿は以下参照。Benedetti, Mario [1974] “Sobre las relaciones entre el hombre de acción y el intelectual”, *Cuaderno cubano*, pp. 40-49.

135　社会における知識人の役割については、イタリアのマルクス主義者アントニオ・グラムシの思想から影響を受けている。

136　Benedetti, Mario [1974] “Señas del Che”, *Cuaderno cubano*, pp. 30-31.

137　同上 pp. 32-34。

138　Padilla, Heberto [2021] *Fuera del juego y otros poemas*, p. 18.

139　5 人の審査員とは、キューバ人ホセ・サカリアス・タレット、ホセ・レサマ・リマ、マヌエル・ディアス・マルティネス、ペルー人セサル・カルボ、英国人ジョン・マイケル・コーヘンであった。

UNEAC の当時の代表はニコラス・ギリェンである。

140　カルロス・フランキ、フアン・ゴイティソーロ、フリオ・コルタサル、カルロス・フエンテス、ホルヘ・センプルン、ガブリエル・ガルシア・マルケスと情報を共有し合って、アイデエ・サンタマリアに海外電報を送った。エステバン、アンヘル;ステファニー・パニチェリ〈野谷文昭訳〉[2010]『絆と権力』p.48. それに対するアイデエの返信内容は本稿の通り、パディージャ逮捕後、バルガス・リョサに宛てた返信の中での回想で明らかである。

141　エドワーズ、ホルヘ〈松本健二訳〉[2013]『ペルソナ・ノン・グラータ』p.54.

142　ホルヘ・エドワーズによるこの作品の評価は、同上 pp.171-172.

143　ホルヘ・エドワーズ自身は「・・・私の外交官特権を当て込んで原稿の国外もち出しを頼んできたという事実はない」と、きっぱり否定している。同上 p.173. 公安警察の暗躍ぶりや出国直前のカストロとの対決は同書に鮮明に描かれている。

144　イベリア航空機で出国し、すぐにマドリード経由でバルセロナにいたバルガス・リョサの自宅を訪れ、キューバでの3か月半の出来事を報告している。同上 p.382. 当時の駐仏大使で、同じくキューバ政府と疎遠になっていたパブロ・ネルーダの下で書記官として働くことになる。

145　Rialta[2021] (https://rialta.org/carta-del-pen-club-de-mexico-a-fidel-castro/).

146　Rialta[2021] (https://rialta.org/primera-carta-de-los-intelectuales-a-fidel-castro/).

147　当時パリにいたコルタサルが、スペイン人作家でフランスに亡命中のフアン・ゴイティソーロと一緒に文章を作成し、署名を集めてカストロに送った。ガルシア・マルケスの署名もあったが、コロンビア人作家で外交官のプリニオ・アプレヨ・メンドーサが本人に連絡がつかないまま断りなしに書き加えたと言われる。これに対しては、署名してしまったことを後悔したガルシア・マルケスを彼がかばっているのではないかという説もあり、真相は謎に包まれたままであると山辺弦が指摘している。一方で、当時ガルシア・マルケスは騒動を避けるために電話の通じないカリブ地域にいたとされるが、通知自体は受けており、何らかの回答はしていたともされる。

148　この2通目の抗議文には1通目にあったコルタサルとガルシア・マルケスの署名がなかった。コルタサルはアイデエ・サンタマリアから真意を詰問され、苦しい弁明に追われている。1972年2月にパリからアイデエに送った手紙がそれを物語っている。一方のガルシア・マルケスは以後、カストロと署名者たち双方に同調するといった姿勢で立ち回っていたと言われる。バルガス・リョサ宅に集まったのは、フアン・ゴイティソーロ、ルイス・ゴイティソーロ、ホセ・カステレ、ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー、カルロス・バラルであった。それぞれがまず下書きをし、比較検討した上でバルガス・リョサの文章が選ばれた。ただし、カルロス・バラルはその後の署名を取りやめた。

149　Vargas Llosa, Mario [1983] “Carta a Haydée Santamaría”, *Contra viento y Marea, 1962-1982*. ここでの「4年前彼と共に過ごしたあの夜」とは、本稿で記したカストロを囲んでの夜のことである。

150　University of Oregon, [1971] “Carta de Haydée Santamaría a Mario Vargas Llosa”, 14 de mayo de 1971.

151　『マルチャ』編集長カルロス・キハーノから依頼を受けていたゲバラが、アフリカ歴訪中に書き留めていた論稿を指し、「新しい人間」の創造の必要性を訴える内容であった。記事に添付された

キハーノ宛ての挨拶文の中で、ゲバラは送付が遅れたことを詫びている。1965 年 3 月 12 日同紙に掲載。“El Socialismo y el hombre en Cuba”, *Marcha, No.1246*.

152　Benedetti, Mario［1974］“Situación actual de la cultura cubana”, *Cuaderno cubano*, pp. 80-112. 及び *Marcha, No.1431*.

153　小倉英敬［2013］「ラテンアメリカ 1968 年論 (3) キューバの場合」、『人文学研究所報』No. 50、p. 111.

154　『マルチャ』No. 1449(1969 年 5 月 23 日) の「ベネデッティ：キューバの経験」という記事から、その時点でもまだバルガス・リョサの特集は組まれる予定にあったことがわかる。協力依頼を受けていたバルガス・リョサは関係資料を事前に送付済みであった。しかし、その後発行が棚上げとなったことは、慎重な対応が取られたことを示すものである。Aguirre, Carlos y Augusto Wong Campos, ［2019］ *Mario Benedetti y el internacionalismo literario: Casa de las Américas, el Centro de Investigaciones Literarias y la serie Valoración Múltiple (1967-1976)*, pp. 101-103.

155　アイデエ・サンタマリアの指示で 1960 年に創刊された雑誌。1965 年から編集長の座につく。

156　Fornet, Jorge［2021］“Mario el cubano”, José Carlos Rovira, Mónica Ruiz Bañuls y Víctor Manuel Sanchis Amat eds., *Cien años de Mario Benedetti*, p. 171.

157　Retamar, Roberto Fernández［2008］*Benedetti: El ejercicio de la conciencia*, Greg Dawes ed., *Mario Benedetti, autor uruguayo contemporáneo: estudios sobre su compromiso literario y político*, pp. 206-207.

158　1971 年 5 月末にモンテビデオで書き上げ、『マルチャ』No. 1546(1971 年 6 月 4 日) に掲載され、その後キューバの雑誌『カサ・デ・ラスアメリカス』No. 68 (1971 年 9-10 月号) に転載された。

159　バルガス・リョサ、マリオ〈立林良一訳〉［2019］『プリンストン大学で文学／政治を語る　マリオ・バルガス＝リョサ』p. 55.

160　同上 pp. 26-27.

161　同上 p. 29.

162　El País, 9 de abril de 1984, *Ni corruptos ni contentos*.

163　El País, 14 de junio de1984, *Entre tocayos / 1*, 15 de junio de 1984, *Entre tocayos / 2*.

164　詩人でジャーナリストのロケ・ダルトン (1939-75) はエルサルバドル共産党に入党後、投獄・追放・亡命の苦難を繰り返し味わい、1973 年にファラブンド・マルティ民族解放戦線 (FMLN) 内のゲリラ組織の一つである人民革命軍 (ERP) に加わる。しかし、その後の組織内対立で処刑された。キューバへ亡命していたこともあり、ベネデッティとは深い親交で結ばれていた。

165　El País, 18 de junio de 1984, *Ni cínicos ni oportunistas*.

166　拷問別の比率は、以下の文献で示される被拷問者に対する男女別アンケート調査結果で知ることができる。Servicio Paz y Justicia-Uruguay［1989］*Uruguay Nunca Más: Informe sobre la violación a los derechos humanos, 1972-1985*, p. 151.

167　ベネデッティはこれら三つの小説のタイトルをもじって、評論『至高の族長異説』［*El recurso del supremo patriarca*］を 1979 年に執筆し、三作品を比較分析している。

168　メキシコのヌエバ・イマヘン社から出版された。独裁体制下のウルグアイからメキシコに逃れたガルポン劇団 (創立 1949 年) が同地で興行。モンテビデオでは 1985 年 8 月に初上演された。し

かし、軍政終了後まもなくの上演は拷問に対する生々しい記憶が残っていたため、観客動員数が伸び悩んだという。

169　当時パナマ共和国にあった米軍基地。左翼勢力弾圧のためにラテンアメリカ各国の軍関係者を訓練する場でもあった。

170　1939 年 12 月、ラプラタ川河口の沖合で「ポケット戦艦」と呼ばれたドイツ海軍のグラーフ・シュペー号が英国海軍の巡洋艦に攻撃され、モンテビデオ港外で沈没した史実に基づく。戦死したドイツ人船員たちの遺体がモンテビデオ市内の墓地に埋葬される様子は、短編「私の第二のグラーフ」[“Mi segundo Graf”] という話に描かれている。第一のグラーフは幼少期に見たツェッペリン号である。Benedetti, Mario [1993] *La borra del café* .

171　戯曲『ペドロと大尉』でも見た通り、被拷問者によって拷問者の顔が特定されないよう頭巾をかぶせたままにする規則となっていた。また、連行する際も収容先を察知されないように同様の措置がとられていた。

172　2018 年にはペンギンブックス社から英訳版として、『壊れた鏡の中の春』[*Springtime in a Broken Mirror*] のタイトルで刊行された。英訳では「壊れた春」(broken spring) ではなく、チェコ語・オランダ語訳版 (いずれも英訳版よりも早い 1985 年に発行) などに倣ったのだろうか、「壊れた鏡」(broken mirror) となっている。以前のような爛漫な春ではなく、何かを失ってしまった春のイメージを、敢えてストーリーに出てくる縁の欠けた鏡に置き換えて題名としたものと考えられる。

173　ベネデッティ本人は国を特定してはいないと語っているが、当時多くの亡命者がいたメキシコを想定して描いているものと一般的に考られている。

174　ベネデッティの別の作品にもしばしば登場する悪戯好きの女幽霊リタを指す。

175　「刑務所収監や潜伏などによる国内残留」を「insilio」、そのような状況下で抵抗し続けた者を「insiliado」といった造語も生み出している。第 3 章第 6 節で取り上げた小説『角の壊れた春』の主人公サンティアゴをその該当者の一人として描いている。

176　El País, 18 de abril de 1983, *El ‘desexilio’*.

177　注 108 に同じ。

178　Paoletti, Mario [2008] “marben@85”, Greg Dawes ed., *Mario Benedetti, autor uruguayo contemporáneo: estudios sobre su compromiso literario y político*, p. 233.

179　注 94 に同じ。

180　同上。

181　注 108 に同じ。

182　同上。

183　Ciento Ochenta(180) [2009] *Un hombre con una pluma, un alma y un corazón*.

184　El Comercio [2014] *¿ Qué piensa Vargas Llosa sobre Benedetti, Onetti y Galeano?*

185　La República [2019] *Mario Benedetti: cien años*.

186　BBC NEWS MUNDO, 15 de septiembre de 2009, *Fundación Mario Benedetti ya es realidad*.

187　Olivera Alfaro, Raúl [2007] “La recuperación de la memoria y la lucha contra la impunidad”, Eduardo Rey Tristán ed., *Memorias de la violencia en Uruguay y Argentina : Golpes, dictaduras, exilios (1973-2006)*, p. 321.

188　El Observador, 11 de mayo de 2021, *Desde espionaje en democracia a datos del ejército argentino: lo que contienen los archivos de la dictadura*.

189　1972 年にスペインへ亡命したウルグアイ人女流作家（1941-）で、2021 年にミゲル・デ・セルバンテス賞を受賞した。主な作品に『狂人の船』［*La nave de los locos*］（1984）、『思い違いの愛』［*Los amores equivocados*］（2015）、『あなたに言えなかったすべてのこと』［*Todo lo que no te puede decir*］（2017）などがある。

参考文献等

〈外国語文献〉

Aguirre, Carlos y Augusto Wong Campos, [2019] *Mario Benedetti y el internacionalismo literario: Casa de las Américas, el Centro de Investigaciones Literarias y la serie Valoración Múltiple (1967-1976)*. (http://bibliotecadigital.bibna.gub.uy:8080/jspui/handle/123456789/71311, 2022年1月23日アクセス).

Aldrighi, Clara [2009] *Memorias de Insurgencia, Historias de vida y militancia en el MLN-Tupamaros.1965-1975*, Montevideo: La Banda Oriental.

Alemany Bay, Carmen [2000] *Mario Benedetti*, Madrid: Eneida.

Alfaro, Hugo [1986] *Mario Benedetti: detrás de un vidrio claro*, Montevideo: Trilce.

BBC NEWS MUNDO [2009] *Fundación Mario Benedetti ya es realidad*. (https://www.bbc.com/mundo/cultura_sociedad/2009/09/090914_0306benedetti_fundacion_mf, 2022年2月12日アクセス).

Benedetti, Mario [1961] *Poemas del hoyporhoy*, Montevideo: Alfa.

——[1964] "Ida y vuelta", Solórzano, Carlos ed., *El teatro hispanoamericano contemporáneo*, México: Fondo de Cultura Económica.

——[1968] *Montevideanos*, Montevideo: Centro Editor de America Latina.

——[1969] "Africa 1969: su fuerza y su vulnerabilidad", *Cuadernos de Marcha no 28*, Montevideo: Marcha .

——[1969] "Una hora con Roque Dalton", *Casa de las Américas no. 54 (mayo-junio)*, La Habana: Casa de las Américas.

——[1970] *El país de la cola de paja*, Montevideo: Arca.

——[1971] "Las prioridades del escritor", *Casa de las Américas no.68 (septiembre-octubre)*, La Habana: Casa de las Américas.

——[1974] *Cuaderno cubano*, Argentina: Schapire.

——[1977] *La casa y el ladrillo*, México: Siglo XXI.
——[1979] *El escritor latinoamericano y la revolución posible*, México: Nueva Imagen.
——[1979] *El recurso del supremo patriarca*, México: Nueva Imagen.
——[1980] *Con y sin nostalgia*, México: Siglo XXI.
——[1985] *Noción de patria; Próximo prójimo*, Madrid: Visor.
——[1986] *Preguntas al azar*, Madrid: Visor.
——[1986] *Viento del exilio*, Madrid: Visor.
——[1989] *Primavera con una esquina rota*, Madrid: Alfaguara.
——[1993] *La borra del café*, Barcelona: Ediciones Destinos.
——[1995] *El ejercicio del criterio*, Madrid: Santillana.
——[1998] *Contra los puentes levadizos*, Madrid: Visor.
——[2000] *Cotidianas*, Madrid: Visor.
——[2002] *Sólo Mientras Tanto*, Madrid: Visor.
——[2003] *El cumpleaños de Juan Ángel*, México, D.F: Suma de Letras.
——[2010] *Geografía*, Madrid: Santillana.
——[2013] *Pedro y el Capitán*, Madrid: Alianza.
——[2015] *Adioses y bienvenidas 84 poemas y 80 haikus*, Madrid: Visor.
——[2017] *La tregua*, Barcelona: Penguin Random House.
——[2018] *Cuentos completos*, Barcelona: Penguin Random House.
——[2020] *Andamios*, Barcelona: Penguin Random House.
——[2020] *Gracias por el fuego*, Barcelona: Penguin Random House.
——[2020] *Quién de nosotros*, Barcelona: Penguin Random House.
Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes, *Entrevista a Mario Benedetti / Reina Roffé.*
(http://www.cervantesvirtual.com/portales/mario_benedetti/obra/entrevista-a-mario-benedetti-0/, 2022年2月11日アクセス), p.101, pp.103-108.
——*Discurso de Mario Benedetti en la recepción del Premio.*

(https://www.cervantesvirtual.com/portales/mario_benedetti/discurso/, 2022年2月12日アクセス).

Blixen, Samuel [2007] "La Operación Cóndor y la internacionalización de la represión en el Cono Sur", Eduardo Rey Tristán ed., *Memorias de la violencia en Uruguay y Argentina : Golpes, dictaduras, exilios (1973-2006)*, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.

——[2010] *Líber Seregni, el general del pueblo, Militares contra la dictadura en Uruguay*, Buenos Aires: Capital Intelectual.

Brand, Oscar [2000] "Mario Benedetti: los fuegos cruzados de la escritura", Rómulo Cosse ed., *Mario Benedetti, Papeles Críticos*, Montevideo: Librería Linaldi y Risso.

Calaméo-Linkedln, *Juan Carlos Onetti / Mario Benedetti Correspondencia (1951-1955)*.
(https://en.calameo.com/read/000028645581faefb83be, 2022年8月12日アクセス).

Campanella, Hortensia [2020] *Un mito discretísimo*, Barcelona: Penguin Random House.

Chavarría, Daniel [2015] *Raúl Sendic, por la huella de Artigas*, Tafalla Nafarroa: Txalaparta.

Ciento Ochenta(180) [2009] *Un hombre con una pluma, un alma y un corazón*.
(https://www.180.com.uy/articulo/4208_Un-hombre-con-una-pluma-un-alma-y-un-corazon, 2022年3月18日アクセス).

El Comercio [2014] *¿Qué piensa Vargas Llosa sobre Benedetti, Onetti y Galeano?*
(https://www.elcomercio.com/tendencias/vargas-llosa-benedetti-onetti-piensa-entrevista-literatura.html, 2022年2月11日アクセス).

El Observador [2021] *Desde espionaje en democracia a datos del ejército argentino: lo que contienen los archivos de la dictadura*.
(https://www.elobservador. com.uy/ nota/ lee-los-documentos-de-la-dictadura-que-el-ministerio-de-defensa-entrego-a-fiscalia-2021511183751,507556044-Partes-Esp-Rec-1972-Compressed (1), pdf, 2021 年 6 月 14 日アクセス).

El País [1983] *El 'desexilio'*.
(https://elpais.com/diario/1983/04/18/opinion/419464807_850215.html, 2021 年 6 月 16 日アクセス).

——[1984] *Ni corruptos ni contentos*.
(https://elpais.com/diario/1984/04/09/opinion/450309610_850215.html, 2022 年 2 月 8 日アクセス).

——[1984] *Entre tocayos / 1*.
(https://elpais.com/diario/1984/06/14/opinion/456012017_850215.html, 2022 年 2 月 8 日アクセス).

——[1984] *Entre tocayos / 2*.
(https://elpais.com/diario/1984/06/15/opinion/456098414_850215.html, 2022 年 2 月 8 日アクセス).

——[1984] *Ni cínicos ni oportunistas*.
(https://elpais.com/diario/1984/06/18/opinion/456357613_850215.html, 2022 年 2 月 8 日アクセス).

——[1989] *El 57% de uruguayos apoya al Gobierno al optar por la 'ley de caducidad'*.
(https://elpais.com/diario/1989/04/18/internacional/608853603_850215.html, 2022 年 8 月 12 日アクセス).

Emisora Habana Radio [2011] *Mario Benedetti: "Cuba ha sido siempre una palabra muy importante para mí"*.
(http://www.habanaradio.cu/articulos/mario-benedetti-cuba-ha-sido-siempre-una-palabra-muy-importante-para-mi/, 2022 年 2 月 11 日

アクセス).

Fernández Huidobro, Eleuterio [1994] *Historia de los tupamaros, t.1: Los orígenes, t.2: El nacimiento, t.3: El MLN*, Montevideo: Tae.

Fernández Núñez, Mireia [2005] *Estudio sobre la significación del exilio en las novelas Primavera con una esquina rota y Andamios de Mario Benedetti*, Galicia: Universidade da Coruña, pp.5-30, pp.40-45.

Fernández Retamar, Roberto [2000] "Benedetti: El ejercicio de la conciencia", Rómulo Cosse ed., *Mario Benedetti, Papeles Críticos*, Montevideo: Librería Linaldi y Risso.

——[2008] "Benedetti: El ejercicio de la conciencia", Greg Dawes ed., *Mario Benedetti, autor uruguayo contemporáneo: estudios sobre su compromiso literario y político*, New York: The Edwin Mellen Press.

Fiol, Margarita y Antonio Puertas, [1984] "Entrevista a Mario Benedetti", pp.67-89.
(https://dialnet.unirioja.es/servlet/articulo?codigo=6445155, 2022年2月26日アクセス).

Fornet, Jorge [2021] "Mario el cubano", José Carlos Rovira, Mónica Ruiz Bañuls y Víctor Manuel Sanchis Amat eds., *Cien años de Mario Benedetti*, Madrid: Iberoamericana.

Francisco Martínez Ruesta, Manuel [2020] "Los orígenes del Movimiento de Independientes 26 de Marzo", *Revista de la Red de Intercátedras de Historia de América Latina Contemporánea, Año 7, Nº12*.
(https://revistas.unc.edu.ar/index.php/RIHALC/issue/view/2101, 2022年8月28日アクセス).

Fundación Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes, *Cronología de Mario Benedetti*.
(http://www.cervantesvirtual.com/portales/mario_benedetti/autor_cronologia/, 2022年2月5日アクセス).

Góngora, Sergio [2007] *Raúl Sendic, el primer tupamaro*, Buenos Aires:

Capital Intelectual.

González Gosálbez, Rafael [1991] *El cuerpo y la sombra: Cuentos y Novelas de Mario Benedetti*, Alicante: Universidad de Alicante.

——[2021] “Mario Benedetti, Dramaturgo Insatisfecho”, José Carlos Rovira, Mónica Ruiz Bañuls y Víctor Manuel Sanchis Amat eds., *Cien años de Mario Benedetti*, Madrid: Iberoamericana.

Ibáñez Quintana, Jaime [2006] *La Poesía Cubana de Mario Benedetti*. (http://letras-uruguay.espaciolatino.com/e/ibanez_quintana_jaime/la_poesia_cubana.htm, 2022年2月11日アクセス).

Infobae [2021] *El Che Guevara en Punta del Este: el “no” a los Estados Unidos y una bala que era él y mató a un profesor de historia*. (https://www.infobae.com/sociedad/2021/08/07/el-che-guevara-en-punta-del-este-el-no-a-los-estados-unidos-y-una-bala-que-era-para-el-y-mato-a-un-profesor-de-historia/, 2022年2月12日アクセス).

Inter Press Service, [1995] *Cuba-Uruguay: Benedetti aplaude visita de Fidel Castro*. (https://ipsnoticias.net/1995/10/cuba-uruguay-benedetti-aplaude-visita-de-fidel-castro/, 2022年2月12日アクセス).

LaRed21 [2011] *Una bandera con 196 años*. (https://www.lr21.com.uy/editorial/445518-una-bandera-con-196-anos, 2022年8月27日アクセス).

——[2021] *Designan a un asteroide con el nombre de Mario Benedetti*. (https://www.lr21.com.uy/cultura/1446049-designan-a-un-asteroide-con-el-nombre-de-mario-benedetti, 2022年2月11日アクセス).

La República [2019] *Mario Benedetti: cien años*. (https://larepublica.pe/domingo/2019/08/04/mario-vargas-llosa-mario-benedetti-cien-anos/, 2022年2月23日アクセス).

Marcha [1939-1974].

(https://anaforas.fic.edu.uy/jspui/handle/123456789/914,2022 年 7 月 6 日アクセス).

Marginaria [1948-49] .
(https://biblioteca.periodicas.edu.uy/collections/show/180, 2022 年 7 月 6 日アクセス).

María Grillo, Rosa [2021] “Entre el delirio y la locura: El verdugo de Mario Benedetti”, José Carlos Rovira, Mónica Ruiz Bañuls y Víctor Manuel Sanchis Amat eds., *Cien años de Mario Benedetti*, Madrid: Iberoamericana.

Méndez, Sara [2007] “La coordinación represiva en el Cono Sur a través de sus víctimas. La desaparición forzada y el secuestro de niños.”, Eduardo Rey Tristán ed., *Memorias de la violencia en Uruguay y Argentina : Golpes, dictaduras, exilios (1973-2006)*, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.

Mercado Marco Antonio, Sandoval [2013] *Desenmascarar la Suiza de América? Inventando a los Tupamaros de los 60.*
(https://www.academia.edu/7036656/_Desenmascarar_la_Suiza_de_Am%C3%A9rica_Inventando_a_los_Tupamaros_de_los_60, 2022 年 10 月 29 日アクセス).

Midori, Uchida [2005] *Did Truth Be Acknowledged?: Commission for Peace and Uruguayan post Military Dictatorship Society.*
(http://repository.center. wakayama-u.ac.jp/files/public/0/1529/20180820140914935148/KJ00004192433. pdf, 2022 年 1 月 31 日アクセス).

Olivera Alfaro, Raúl [2007] “La recuperación de la memoria y la lucha contra la impunidad”, Eduardo Rey Tristán ed., *Memorias de la violencia en Uruguay y Argentina : Golpes, dictaduras, exilios (1973-2006)*, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.

Padilla, Heberto [2021] *Fuera del juego y otros poemas,* Yannelys Apari-

cio Molina y Gustavo Pérez Firmat eds., Madrid: Ediciones Cátedra.

Paoletti, Mario [1995] *El aguafiestas: la biografía de Benedetti*, Buenos Aires: Seix Barral.

——[2008] "marben@85", Greg Dawes ed., *Mario Benedetti, autor uruguayo contemporáneo: estudios sobre su compromiso literario y político*, New York: The Edwin Mellen Press.

Peloduro [1964] .
(https://anaforas.fic.edu.uy/jspui/handle/123456789/11805, 2022年8月6日アクセス).

Randall, Margaret [2015] *Haydée Santamaría, Cuban revolutionary: She led by transgression*, Durham: Duke University Press.

Reigosa Pérez, Guillermo [2010] *La federación anarquista uruguaya*.
(https://www.academia.edu/7488007/La_FAU?email_work_card=view-paper, 2022年10月20日アクセス).

Rey Tristán, Eduardo [2007] "Reflexiones en torno a la violencia política en Uruguay y Argentina", Eduardo Rey Tristán ed., *Memorias de la violencia en Uruguay y Argentina : Golpes, dictaduras, exilios (1973-2006)*, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.

Rialta [2021] *ESPECIAL | 50 Aniversario de Fuera del juego y las derivas del caso Padilla.*
(https://rialta.org/carta-del-pen-club-de-mexico-a-fidel-castro/, 2022年 2月13日アクセス).
(https://rialta.org/primera-carta-de-los-intelectuales-a-fidel-castro/, 2022年 2月13日アクセス).
(https://rialta.org/segunda-carta-de-los-intelectuales-a-fidel-castro/, 2022年2月13日アクセス).
(https://rialta.org/declaracion-de-la-uneac/, 2022年 2月13日ア

クセス).

Rodrígues Monegal, Emir [1992] “Las ficciones de un testigo implicado”, *Narradores de esta América Tomo* Ⅱ, Venezuela: Alfadil Ediciones.

Roffé, Reina [2000] *Entrevista a Mario Benedetti.* (https://www.cervantesvirtual.com/descarga,Pdf/entrevista-a-mario-benedetti-0/, 2021年8月3日アクセス).

Ruffinelli, Jorge [2000] “Mario Benedetti y mi generación”, Rómulo Cosse ed., *Mario Benedetti, Papeles Críticos*, Montevideo: Librería Linaldi y Risso.

——[2008] “Conversación intemporal con un escritor “sin tiempo” ”, Greg Dawes ed., *Mario Benedetti, autor uruguayo contemporáneo: estudios sobre su compromiso literario y político*, New York: The Edwin Mellen Press.

Sendic, Raúl [1984] *Reflexiones sobrepolítica económica: apuntes desde la prisión*, México: Tierra del Fuego.

Servicio Paz y Justicia-Uruguay [1989], *Uruguay Nunca Más: Informe sobre la violación a los derechos humanos (1972-1985).* (https://sitiosdememoria.uy/sites/default/files/2020-01/Serpaj-1989-Uruguay Nunca Mas.pdf, 2022年1月31日アクセス).

Ultima Hora [2020] *Mario Benedetti en Palma, de la discreción a la lucha contra el olvido.* (https://www.ultimahora.es/noticias/sociedad/2020/09/13/1196195/mario benedetti-palma-discrecion-lucha-contra-olvido.html, 2022年2月12日アクセス).

University of Oregon, [1971] “Carta de Haydée Santamaría a Mario Vargas Llosa (14 de mayo de 1971), Casa de Las Américas, 67, julio-agosto de 1971”, *Vargas Llosa y Cuba, La ciudad y los perros. Biografía de una novela.*

(https://bpb-us-el wpmucdn.com/blogs.uoregon.edu/dist/5/11432/files/2015/07/Carta_HS-1p7isl4.pdf, 2022年2月11日アクセス).

Varela Petito, Gonzalo [2007] "Argentina y Uruguay. Crisis compartidas", Eduardo Rey Tristán ed., *Memorias de la violencia en Uruguay y Argentina : Golpes, dictaduras, exilios (1973-2006)*, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.

Vargas Llosa, Mario [1983] "Carta a Haydée Santamaría", "Carta a Fidel Castro", *Contra viento y marea (1962-1982)*, Barcelona: Seix Barral.

Viglietti, Daniel [2007] "Reflexiones en torno al exilio desde el ámbito cultural e intelectual", Eduardo Rey Tristán ed., *Memorias de la violencia en Uruguay y Argentina : Golpes, dictaduras, exilios (1973-2006)*, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.

〈日本語文献〉

アムネスティ・インターナショナル [1985]『アムネスティ年次報告書1984』、大陸書房、pp.224-228.

安藤哲行 [2011]『現代ラテンアメリカ文学併走　ブームからポスト・ボラーニョまで』、松籟社、pp.247-249.

伊高浩昭 [2015]『チェ・ゲバラ　旅、キューバ革命、ボリビア』、中央公論新社。

出岡直也 [2017]「ラテンアメリカ穏健左派支持における経済投票―ウルグアイの拡大戦線の事例」、仙谷学編『脱新自由主義の時代？ 新しい政治経済秩序の模索』、京都大学学術出版会、p.136.

内田みどり [2013]「ウルグアイにおける歴史の政治利用： 軍政の責任をめぐって」、『法政理論』45(3)、新潟大学、pp.160-175.

――[2015]「ネオリベラリズムと周辺国型社民主義―ウルグアイのケース」、村上勇介編『21世紀ラテンアメリカの挑戦　ネオリベラリズムに

よる亀裂を超えて』、京都大学学術出版会、pp. 122-124.
――[2016]「ウルグアイのポスト移行期正義における記憶闘争とその政治利用」『科学研究費助成事業　研究成果報告書』。(https://kaken.nii.ac.jp/file/KAKENHI-PROJECT-25360014/25360014seika.pdf, 2022 年 8 月 1 日アクセス).
――[2022] Ⅲ政治（第 21 章－第 26 章）、山口恵美子編『ウルグアイを知るための 60 章』、明石書店、pp. 116-139.
エステバン、アンヘル；ステファニー・パニチェリ（野谷文昭 訳）[2010]『絆と権力　ガルシア＝マルケスとカストロ』、新潮社、pp. 43-76.
エドワーズ、ホルヘ（松本健二 訳）[2013]『ペルソナ・ノン・グラータ』、現代企画室。
大串和雄 [2019]「ラテンアメリカにおける移行期正義の実践」、『国際問題』No. 679、（財）日本国際問題研究所、pp. 19-20.
オクチュリエ、ミシェル（矢野卓 訳）[2018]『社会主義リアリズム』、白水社。
小倉英敬 [2013]「ラテンアメリカ 1968 年論 (3) キューバの場合」、『人文学研究所報』No. 50、神奈川大学人文学研究所。
――[2021]『1960 年代ゲバラの足跡と「1968 年」論－グローバル・シックスティーズ研究のために－』、揺籃社、p. 9, pp. 204-205.
久野量一 [2018]『島の「重さ」をめぐって　キューバの文学を読む』、松籟社、pp. 27-34.
後藤政子 [1982]『現代のラテンアメリカ　この激動の 20 年』、時事通信社、pp. 192-200, p. 208, p. 234.
――[1998]『90 年代のキューバにおける農業政策転換の基本理念』、p. 6. (http://www.js3la.jp/journal/pdf/ronshu32/ronshu032_01Goto.pdf, 2022 年 2 月 26 日アクセス).
――[2016]『キューバ現代史　革命から対米関係改善まで』、明石書店。
コルトマン、レイセスター（岡部広治 監訳）[2005]『カストロ』、大月書店。

ズヴェーヴォ、イタロ（堤康徳　訳）［2021］『ゼーノの意識』、岩波書店。
杉山知子［2011］『移行期の正義とラテンアメリカの教訓　真実と正義の政治学』、北樹出版、pp. 16-17, pp. 36-38.
ダンサ、アンドレス；エルネスト・トゥルボヴィッツ（大橋美帆　訳）［2015］『ホセ・ムヒカ　世界で一番貧しい大統領』、KADOKAWA。
寺尾隆吉［2013］「抵抗と亡命のスペイン語作家たち」、寺尾隆吉編『抵抗と亡命のスペイン語作家たち』、洛北出版、p. 16.
――［2020］『100 人の作家で知る　ラテンアメリカ文学ガイドブック』、勉誠出版、p. 77, pp. 94-95, pp. 126-127.
バルガス・リョサ、マリオ（立林良一　訳）［2019］『プリンストン大学で文学／政治を語る　バルガス＝リョサ特別講義』、河出書房新社、pp. 26-30, p. 55, p. 74, pp. 261-263.
ベネデッティ、マリオ（岸本静江　訳）［1978］「あとは密林だけ」、蔵原惟人編『世界短編名作選』、新日本出版社。
――（内田吉彦　訳）［1990］「モーツァルトを聴く」、川村二郎編『世界の文学　ラテンアメリカ』、集英社。
松尾俊輔［2022］Ⅱ歴史（第 12 章－第 20 章）、山口恵美子編『ウルグアイを知るための 60 章』、明石書店、pp. 74-114.
山辺　弦［2013］「カストロ体制とラテンアメリカの作家たち」、寺尾隆吉編『抵抗と亡命のスペイン語作家たち』、洛北出版、pp. 86-92.

〈参考写真〉

Mario Benedetti infancia.
(https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&fr=wsr_gs&p=Mario%20Benedetti%20%20%20infancia, 2022 年 12 月 23 日アクセス).

〈インタビュー映像、講演会映像〉

MARIO BENEDETTI A FONDO - EDICIÓN COMPLETA y RESTAURADA- 6 de agosto de 1978.
(https://www.youtube.com/watch?v=-hYakL5zK1E, 2022 年 12 月 23 日アクセス).

Mario Benedetti en Los siete locos.
(https://www.youtube.com/watch?v=66NJe5o7D8o, 2022 年 12 月 23 日アクセス).

Conferencia de Hortensia Campanella (presidenta de la Fundación Mario Benedetti):《Mario Benedetti, luces y sombras de la coherencia》En Centro de Estudios Iberoamericanos Mario Benedetti.
(https://vertice.cpd.ua.es/268332, 2022 年 12 月 23 日アクセス).

Raúl Sendic Tupamaro-Parte1.
(https://www.dailymotion.com/video/x11dw3, 2022 年 12 月 23 日アクセス).

年表〈マリオ・ベネデッティの生涯とその時代〉		
年	ベネデッティの生涯と主な作品	主な出来事ウルグアイ（★）、関連諸国（☆）
1920	パソ・デ・トロス生まれ (9/14)	★バルタサール・ブルム大統領 (1919-23)
1924	モンテビデオ市に引っ越す	
1928	ヒンデンブルク・シューレ（小学部）入学	
1930		☆ドミニカ共和国： トルヒージョ独裁
1931		★ガブリエル・テラ大統領 (-1938)
1933		★ガブリエル・テラ大統領クーデター ★バルタサール・ブルム元大統領自殺 ☆キューバ： マチャド独裁崩壊
1934	ミランダ・リセー入学 ロゴソフィア財団入会	
1935	会社勤務始、ミランダ・リセー中退	
1936		☆スペイン内戦始
1938	ブエノスアイレスへ	☆ペルー詩人セサル・バジェホ死去
1939		★独軍艦グラフ・シュペー沈没 ☆スペイン内戦終、フランコ独裁
1941	モンテビデオ市に戻る	
1945	詩集『消すことのできないイブ』 週刊新聞『マルチャ』に参加	★ドイツ・日本に宣戦布告 (2 月) ☆第二次世界大戦終
1946	結婚後、ヨーロッパ周遊	☆アルゼンチン： ペロン大統領就任
1948	文芸誌『マルヒナリア』主宰 (49 年廃刊) 評論『どんでん返しと小説』	☆コロンビア： ガイタン暗殺
1949	文芸誌『ヌメロ』参加、短編集『今朝』	
1950	詩集『その間だけ』	
1951	『マルセル・プルーストとその他評論』 短編集『最後の旅行とその他の短編』	
1952	米国との軍事協定締結反対デモに参加	★ 52 年憲法制定、大統領制廃止 ☆ボリビア革命（国民革命運動 MNR） ☆キューバ： バチスタ政権
1953	小説『我々のうちの誰が』 戯曲『例えば、あなた方』	☆ソ連： スターリン死去 ☆キューバ： モンカダ兵営襲撃事件
1954	『マルチャ』の文芸欄編集部長	☆パラグアイ： ストロエスネル独裁 ☆グアテマラ： アルベンス政権崩壊

1955		★朝鮮戦争後の影響による経済低迷 ★９人執政評議会制度始 ☆アルゼンチン： ペロン亡命 ☆フアン・ルルフォ『ペドロ・パラモ』
1956	詩集『オフィス詩集』	☆キューバ： グランマ号上陸
1957	新聞特派員としてヨーロッパ各国視察	
1958	戯曲『ルポルタージュ』	☆カルロス・フエンテス『澄みわたる大地』
1959	米国視察、短編集『モンテビデオの人々』	☆キューバ革命 ☆カサ・デ・ラス・アメリカス創設
1960	小説『休戦』 評論『ストローテイルの国』 会社退職、作家活動に専念	☆グアテマラ内戦（–96） ☆ガブリエル・ガルシア・マルケス 『大佐に手紙は来ない』
1961	詩集『この頃の詩』 評論『寝た子を起こせ』	☆米国・キューバ国交断絶、ヒロン湾侵攻 ☆ドミニカ共和国： トルヒージョ暗殺 ★米州機構「プンタ・デル・エステ憲章」、共和国大学でチェ・ゲバラ演説 ★フアン・カルロス・オネッティ 『造船所』
1962	ラテンアメリカ作家集会（チリ）参加 国政選挙立候補（社会党）	★アルティガス・サトウキビ組合デモ ☆キューバ・ミサイル危機
1963	詩集『在庫』、戯曲『往復』 評論『20 世紀のウルグアイ文学』	☆米国： ケネディ暗殺
1964	雑誌『ペロドゥーロ』に寄稿	★オネッティ『屍集めのフンタ』 ☆ボリビア： バリエントス軍政始
1965	小説『火をありがとう』 詩集『近くの隣人』	★トゥパマロス結成 ☆ゲバラのコンゴ支援失敗 ☆キューバ共産党誕生
1966	１月キューバ初訪問 ４月からフランス滞在 評論『ホセ・エンリケ・ロドーの才能と人物』	★国民解放運動トゥパマロス大会開催 ☆アルゼンチン： オンガニア独裁 ☆バルガス・リョサ『緑の家』
1967	キューバ文学調査センター長就任 評論『混血大陸の文学』 詩集『夢すれすれに』	☆ガルシア・マルケス『百年の孤独』 ★ホルヘ・パチェコ・アレコ大統領就任
1968	ハバナ文化大会参加 短編集『死とその他の驚き 』	☆ソ連軍チェコスロバキア侵攻

1969	ウルグアイに一度戻る 評論・詩編『キューバノート』 第一回汎アフリカ文化フェス参加（アルジェリア）、ルポ『アフリカ 69』	
1970	キューバに戻る	★ダニエル・アンソニー・ミトゥリオーネ暗殺 ★ラウル・センディック逮捕 ☆チリ： アジェンデ社会主義政権誕生 ☆キューバ： 砂糖生産計画失敗
1971	ウルグアイ「3 月 26 日独立運動」参加 小説『フアン・アンヘルの誕生日』 共和国大学人文科学部中南米文学科長	★拡大戦線結成（党首リベル・セレグニ） ★ラウル・センディック刑務所脱走 ☆キューバ：パディージャ逮捕 ☆ボリビア： ウゴ・バンセル独裁
1972	評論『71 年の時報』 インタビュー記事『コミュニケーション詩人たち』	★内戦激化、ラウル・センディック再逮捕
1973	詩集『緊急事態の歌詞』 評論『地震とその後』 アルゼンチンへ避難、亡命始	★ボルダベリー大統領のクーデター ☆チリ： アジェンデ政権崩壊、ピノチェト独裁、パブロ・ネルーダ死去 ☆アルゼンチン： ペロン大統領再選、「死の部隊」AAA 発足
1974	評論『ラテンアメリカ作家と可能な革命』 評論『ダニエル・ビグリエッティ』 詩集『ここまで』『他人の詩』	☆アルゼンチン： イサベル・ペロン大統領昇格
1975	ペルーへ避難、出国勧告 アルゼンチンへ戻る 映画『休戦』アカデミー外国語映画賞候補作品	☆コンドル作戦始動 ☆ペルー： ベルムデス独裁 ☆ガルシア・マルケス『族長の秋』 ☆ロケ・ダルトン殺害 ☆スペイン： フランコ死去
1976	ペルーへ再避難、さらにキューバへ避難	★ボルダベリー大統領失脚、アパリシオ・メンデス大統領就任 ★セルマール・ミケリーニ暗殺 ☆アルゼンチン： ホルヘ・ビデラ独裁
1977	短編集『ノスタルジアの有無』 詩集『家とレンガ』 国際作家会議参加（ブルガリア）	
1978	「二つの声で」初リサイタル（メキシコ）	☆ボリビア： ウゴ・バンセル独裁終 ☆スペイン： 立憲君主制へ移行

1979	戯曲『ペドロと大尉』 詩集『日常』 ニカラグア革命後を視察	☆ニカラグア： サンディニスタ革命 ☆ソ連軍アフガニスタン侵攻
1980	スペインのパルマ・デ・マジョルカ居住	★憲法改正案が国民投票で否決 ☆アイデエ・サンタマリア自殺 ☆エルサルバドル内戦
1981	詩集『亡命の風』	
1982	小説『角の壊れた春』 評論『判断力の練習』 エル・パイス紙社説担当（－1984 年） フェリックス・バレラ勲章受章	☆スペイン： ゴンサレス政権 (PSOE) ☆フォークランド紛争 ☆ノーベル文学賞ガルシア・マルケス
1983	マドリード居住	★民政移管要求 40 万人デモ行進 ☆米国グレナダ侵攻 ☆アルゼンチン民政移管
1984	バルガス・リョサと論戦（エル・パイス紙） 短編集『地理』	★海軍クラブ合意 ☆ペルー：トゥパク・アマル武装闘争始
1985	亡命終 週刊新聞『ブレチャ』に参加	★フリオ・マリア・サンギネッティ大統領就任、民政移管 ☆フリオ・コルタサル死去
1986	エル・パイス紙社説担当再開 詩集『ランダムな質問』	★「免責法」制定
1987	詩集『昨日と明日』	
1988	詩集『この世の歌』	
1989	雑記集『うっかりと率直』 アイデエ・サンタマリア賞受賞	★「免責法」可決 ★ラウル・センディック死去 ☆ベルリンの壁崩壊
1990	スペインのアリカンテ大学初訪問	☆チリ： ピノチェト独裁終
1991	詩集『バベルの孤独』、評論『現実と言葉』	☆ソ連崩壊
1992	小説『コーヒーのかす』 映画『心の暗黒面』に出演	☆エルサルバドル内戦終 ☆新大陸発見五百周年
1993	アリカンテ大学討論会「文学と都市空間」参加 評論『世紀末の困惑』	
1994	詩集『在庫 2』、『短編全集』	★オネッティ死去
1995	詩集『忘却は記憶に満ちている』	★サンギネッティ大統領（二期目）
1996	小説『足場』	☆ペルー日本大使公邸占拠事件 ☆スペイン： アスナール政権 (PP)

1997	「マリオ・ベネデッティ国際大会」 （アリカンテ大学主催） アリカンテ大学名誉博士号 レオン・フェリーペ賞受賞	
1998	詩集『人生その括弧』の CD 制作	☆ノーベル文学賞ジョゼ・サラマーゴ ☆英国でアウグスト・ピノチェト逮捕
1999	ソフィア王妃イベロアメリカ詩賞受賞 詩集『俳句の片隅』、短編集『時のポスト』 マリオ・ベネデッティイベロアメリカ文学研究センター設立	☆ベネズエラ：ウゴ・チャベス政権 (-2013)
2000		★平和委員会発足
2001	詩集『私が呼吸する世界』 ホセ・マルティイベロアメリカ賞受賞	☆アルゼンチン債務不履行
2002	詩集『不眠とうたた寝』	
2003	短編集『私の過去の未来』、詩集『在庫 3』	
2004	ウルグアイ共和国大学名誉博士号 詩集『自己防衛』、『いまだ存在する』	★リベル・セレグニ死去 ☆スペイン：サパテロ政権 (PSOE)
2005	詩集『別れと歓迎』 メネンデス・ペラーヨ賞受賞	★タバレ・バスケス大統領（拡大戦線）
2006	妻ルス死去 詩集『歌わない人の歌』	☆ボリビア：エボ・モラレス政権
2007	ベネズエラのフランシスコ・デ・ミランダ勲章受章	
2008	詩集『自身の証人』	☆フィデル・カストロ引退、ラウル・カストロ国家評議会議長就任
2009	ベネデッティ死去 (5/17)	★再度「免責法」可決
2010	詩集『私に出会うための伝記』（遺作）	★ホセ・ムヒカ大統領（拡大戦線） ☆ノーベル文学賞バルガス・リョサ